
魔女伝説 ロザリオカルヴァ

卯月昇華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女伝説 ロザリオカルヴァ

【Nコード】

N1312J

【作者名】

卯月昇華

【あらすじ】

十字架の刻印者。通称ロザリオカルヴァは、妖かしを狩る力を持つ。その一族の次男、真神^{まがみ}アロウは、真神家^{まがみ}との血縁関係を切りた^{みちわ}いと申し出る。その条件として、父親である佐一郎は、世間を騒がす魔女を全て狩ることを言い渡す。一方で、魔女保護法を掲げる組織ブレームンの一人、道^{みちわ}和アサキと出会い、魔女の真実と世界の真実、自分が信じるべき道を探すことを決意し、真神家^{まがみ}と対立、ブレームンにまで追われるようになる。真実を知り、自分の道を見つけた時、アロウはその目に何を見るのか。

序節

夏の終わり、秋がちらほら顔を覗かせる季節。俺は、久方ぶりに故郷に戻って来た。

数字を出して数えれば、俺が高校を卒業してから三年。だからそんなに懐かしむような感慨さは無い。ただ、何と云うか、故郷の空気はやっぱり故郷であって、落ち着いたりはするものだ。

まあ、三年もの間、一度も帰って来なかったんだ、若さ故に何かとざわつく心がそうなるのは無理もない。

見慣れた街は、特に三年という年月が俺を置き去りにした感じは無く、適当な都会さと、適当な治安の悪さが相まった普通の街だった。

ただ、この街の夜は独特なのを除けば……………だ。

夜の十一時。今時分、十一時では学生さえうるつく時代だ。いかにもって奴らがどこで何をしてようと俺には関係ない。とは言え、それも時と場合による。

ビルでも建つのだろうか、まだ骨組みしか建ってない場所に、『ご迷惑おかけしてすいません』の看板がある。そこに描かれている作業員。なんとかなんないか？申し訳なさそうには見えん。……

…と、それはどうでもいい。何やら若い男達が、制服を着た女子高生を囲って喚いている。

バカな奴らだぜ。街灯に照らされてること忘れてんのか？何をするかは知らんが、良からぬことを企てるのは間違いない。だってそうだろう？女子高生を五人の男が取り囲んで、まさかこの国の行く末を語らうとは期待出来ない。そんなことを期待するなら、世を嘆いた神様が、明日世界を崩壊させることを期待する方が確かも。

んなわけで、多少格闘技には覚えのある俺は、女子高生が人生

を変えられてしまう前に。

そう思ったんだ。

「よう。随分楽しそうだな」

「あん？なんだデメエ？」

笑顔で話し掛けてやったらこれだ。

「そう突っ掛かるなよ。ちょっと見物さ」

街灯の明かりををまともに喰らう女子高生の顔を見る。

これはまたえらく美人だ。スレンダーなボディに凜とした瞳。優等生には見えないが、実に賢そうだ。

「ナメてんのか！デメエ？！」

「お、おいおい、そう興奮すんなって！」

「るせえっ！！」

胸倉を掴まれ、いきなり殴られた。

まあ、一発くらい殴られておかないと、これからコイツらは病院へ直行するんだ。それこそ申し訳ないってもんだ。

「イテテ…………… 問答無用かよ……………」

意気がるわりに重みのないパンチ。仕方がないので、わざと効いてるフリをして、立ち上がるうとした時だった。

「ちょっと！アンタら！」

声高に女子高生が叫んだ。いや、どちらかと言えば怒号。こんな時、普通は悲鳴を上げるもんじゃないのか？

男達は一様に女子高生に目を向ける。

だが、そんな男達の注視をもともせず、

「やるの？！やらないの？！ハッキリしてよ！」

俺は耳を疑った。なんと……この女もひよつとしてバカの部類か………？

「なんだよぉ。その気なら最初から言えよなあ。へへっ。可愛いがつてあげますよぉ」

男の一人がそう言うと、他の連中も同意の雄叫びを挙げる。

「じゃあ……やるのね？」

ニヤリといやらしく女子高生が笑った。その笑顔に、俺は違和感を覚え、そのワケはすぐに解ることになる。

「もちろん、ヤっちゃうよー！」

と、バカが言った瞬間、

「ぐえっ！」

「あぎゃっ！」

「ぶほおっ！」

「あひっ！」

「しぎゃっ！」

マヌケにマヌケを上塗りしたような“男達”の悲鳴が響いた。

あっという間に男達は倒れ、プラス、気を失ってる。

「…………驚いたぜ。オマエ、格闘技か何か……………のわっ！」

戦績を讃えようなどと思った矢先、俺は女子高生の靴底に踏まれる結末を迎える。顔をだ。か・お！

「あ、あにふんだ！」

何すんだ！そう言っちゃった。

「人の犯されるとこ見物しようなんて悪趣味なヤツ、野放しには出来ないわ！」

下弦の月が彼女の背の向こうに見える。それはまるで魔女のようだ。

「ま、まへ！おれは……………」

「うるさいっ！この……………変態めっ！！」

「ぐわあああ——っ！！」

こんな危険な女が、これからの運命を共にするパートナーだとは、

お互いに思ってもみなかった。

第一節 刻印

デッカイ武家屋敷。金持ちを全面に押し出した門構えのこの武家屋敷こそ、俺の実家だ。

もちろん、金持ちなんてレベルじゃない。幅広い事業に伴い、政財界、芸能界、致るところに知り合いがいる家系だ。

表札には『真神^{まがみ}』の文字。今でこそ事業で成功した。みたいに
見られているが、そもそもは有名なエクソシストと陰妙師が合わさ
った血筋らしい。

もっとも、俺から言わせれば、陰妙師が活躍してた時代に、エク
ソシストがこの国にいたなんてことが疑わしい。授業でも、西洋の
国と親交が交わされるようになったのはもっと後の時代だと習って
いるし、常識だ。

「…………ツ！」

夕べ、女子高生に踏まれた右頬が痛い。揚句、そこら中を蹴られア
ザだらけだ。

「あの女…………蹴るだけ蹴って逃げやがって…………」

男だったら返り討ちにしてやったのに。

「あら？もしかして…………アロウ様！？」

成金趣味の門の横にある勝手口から、若い、夕べの女子高生と同一
年の女の子が顔を出す。

「よう！ユラ！」

彼女の名前は伊瀬浪ユラ。ウチのお手伝いさんだ。

「いつお戻りに？」

タタタと駆け寄って目を輝かせる。きっと俺に会いたかったんだろう。そういう健気な子なんだ。

「ああ。昨日こっちに着いて、一晚ビジネスホテルに泊まったんだ」

「そうですか。でもお懐かしいゆうございます。……あら？その傷はどうなされました？」

「え？ああ。まあ、ちよつとね」

「相変わらずケンカですかあ？んもっ！成人なさったんですから、少しは落ち着いて下さい！」

「ハハ………そ、そうだな」

言えません。女子高生にやられたなどとは。

「あ、あのさ、親父は？」

「え？あ！ごめんなさい！私ったら、アロウ様をこんな場所で！」

それはいいんだが、あまり突っ込まれたくないからな。傷の事情。

「どうぞ」

ユラは勝手口から俺を通すと、

「お帰りなさいませ」

そう仕切直した。

「ただいま」

懐かしい故郷ではあるが、やっぱりこの家の空気は別物だ。はつきり言っただけだ。

ユラの先導で我が家を案内されるわけだが、ユラ以外のお手伝いさんも多数おり、俺を見るなり驚いてるようだった。

そして、それはあまり歓迎されてない驚きだ。

真神まがみの家は由緒ある格式高い家柄で、礼儀作法を初め、真神まがみの人間としてどうあるべきかなど、とにかく息詰まる家なんだ。

俺はそれが嫌で、高校卒業後、一度は大学に進学したが、三日で辞めた。その後はアルバイトで食いつなぎ、生きて来た。

昔っから問題児だった俺は、この家の厄介者だったし、嫌われ者だった。そんな俺の唯一の理解者が、十三歳の時からこの家にいるユラだ。

「ユラ、オマエ何歳になった？」

「私ですか？今年十七になりました」

「そっか」

ま、理解者と言っても、過ごした時間は短い。それだけに、三年も

経って会えば嬉々としてしまう。

「いい女になったよなあ」

「ア、アロウ様！」

「なあに赤くなってんだよ！」

「か、からかわないで下さい！」

ぷくつと膨れっ面が、これまた可愛い。タベの見かけだけの凶暴女とは違って、中身も愛らしい。嫁にするなら世の男共は、断然ユラを選ぶだろう。

一部のMな人達を除いて。

そうこうしていると、ピカピカに磨かれた廊下は行き止まりになり、吐き気がするくらい趣味の悪い襖がある。

「お待ち下さい」

ユラは襖の前に正座をし、

「佐一郎様。アロウ様がお帰りになりました」

真神佐一郎。それが親父の名前だ。あつ、俺は………まがみあろう真神呀狼。ア
ロウだ。

「入れ」

中から野太い声が下ると、ユラは襖を丁寧にかけてくれた。

「……………フン。帰ってやったぞ」

見たくもない親父と、

「なんだその態度は！大学を勝手に辞め、三年も音沙汰のなかった奴が！」

俺より四つ上の二十五歳の、眼鏡を掛け、神経質を絵にしたようなイケメン。兄貴の刹波せつはが、三十畳はある座敷にいるのが目に入り、つい口調を荒げてしまった。

怒鳴り散らす兄貴を構いもせず、座敷の一番奥に、まるで殿様のように座する親父の前に胡座あぐらをかいてやった。

「三年ぶりに息子が帰ったんだ、何か一言くらいねーのかよ」

襖が閉まった。ユラが出て行っただのだ。

「アロウ！お前は……………ッ！」

「よい。セツハ。アロウを呼んだのは私なのだからな」

兄貴を黙らせ、冷たい視線で俺を睨む。

「散々搜したのだぞ。アロウ」

「俺なんかを搜してくれて嬉しいね」

「……………なぜ大学を辞めた？」

そんなことを聞く為に探偵やら会社の部下やらを使って捜したわけじゃあるまい。すつきり物を言わないのは、親父の悪い癖だ。

「別に。真神まがみの名に恥じない大学へは進学したんだ、後は俺の勝手だろ」

「義理を果たしたと言いたいのか？」

「……………」

「……………まあよい。お前が自分で選んだ道ならば、とやかく言うつもりはない。だが、連絡はするべきだったな」

子供でも諭すような言い草が気に入らない。

俺が悪いのは重々承知だ。しかし、素直になれないのだ。特にこの男の前では。

「二度と真神まがみに帰るつもりはなかったからな。アンタが俺を捜しさえしなければ」

うだうだと説教など聞きたくない。バカ息子は真神まがみと手を切ると言ってるんだ、用件があるなら早く言え。バイトもそうそうは休めない。

「そうか。まあ、その話はまた今度だ」

親父が言つのを見計らったのか、「失礼します」とユラの声がして、お茶を運んで来た。

親父、兄貴、そして俺の順にお茶を出し、後ろに下がって座を

して一礼してまた出て行った。

「じゃ、本題に入ろうぜ。暇じゃないんだ」

「フン。『何が暇じゃない』だ。フリーター風情がエラソーに。忙しいのはみんな同じだ！」

いつも兄貴はこうだ。嫌われてる云々よりも、どこか人を見下すところがある。

ただ、即ケンカとはいかない。必要最低限の筋肉しかないような細身の男だが、真神家^{まがみ}の習わしによって、やはり格闘技には精通しているし、大会でも優勝をしている。やり合えばこちらも無傷じゃ済まない。

「俺は親父に言ったんだ」

「アロウッ！」

「よさんか！」

親父の一言で引っ込んだ兄貴に、舌を出してやった。

「…………アロウ、右手を見せてみる」

「……………」

俺の右手は、いつも黒い革手袋をしている。それは、右手の甲に十字架の形をしたアザがあるからだ。

肩側が上になるように位置付けられ、最近ではアザというよりは、タトゥーに間違われるくらい鮮明になった。

言われるがまま出した右手を見て、

「ふむ。大分らしくなってきたな」

「なんだよそれ」

「わかってると思うが、真神家まがみに生まれる男児には、生まれながらに十字架のアザが手の甲に刻まれる。それは成人を過ぎてより際立つ」

そう。だから親父にも兄貴にも十字架のアザはあり、そのアザを刻カル印と呼ぶ。

稀に刻印カルウの無い奴も生まれたらしいが、そっちの方がいいさ。

刻印カルウ無き者は、成人を過ぎて真神まがみを追い出されるからだ。大金を積まれてな。

「際立つと何か不都合なのか？勘弁してくれよ？レーザー手術で消すなんて」

「そうではない」

親父は茶を啜り、一息入れ、

「実はな、最近この界限で、教会同士が争いを始めた」

「教会？」

「うむ。なんでも、信仰する対象を神から魔女へと変えたとかで、今度はその魔女を信仰する者達が、どの魔女を信仰するかで揉めているというのだ」

どうでもいい。くだらん。なんなんだそれは。魔女を信仰するってのはどうか知らんが、好き勝手に信仰すればいいじゃないか。大体、魔女ってのは何人もいるものなのか？

あまりにくだらない理由で呼び戻されたのだと、深い溜め息をついた。無気力な息は、ふわふわと浮く気も無いらしく、畳みに落ちた。

「それと俺が呼び戻されたの、なんの関係があるんだ？変な宗教に首を突っ込んだ覚えはないぜ」

「それはわかっている。お前に宗教の意味を理解する頭は無いだろうからな」

「チツ」

「話を戻そう。その教会同士の争いを止めてくれと、政府から依頼が来てる」

政府から？なんでまた。

「宗教の問題は放っておけばテロに繋がる。未然に防ぎたいとは言え、政府が積極的に乗り出すことも、国際事情からうまくない」

確かに。亡国では、とある宗教の一派を武力で鎮圧したことに批難が集まった。この国でそれをすれば……頭の悪い俺でも想像はつく。

しかしだ、そんな話を最近耳にしたことはない。教会同士の争いなら、マスコミだって黙っちゃいないだろう。

「警察は何やってんだよ」

目をつむった親父を見て、警察では収まらない事態なのだと知る。

「警察では役に立たんだ。教会はそれぞれに信仰魔女を実体化。その魔女達は手下を従え戦っている」

回りくどい言い方だが、要するに人の手で止めれる問題ではないのだろう。

「そういうことだ」

「妖かしくてことか？」

妖かしたのは、言ってみれば幽霊とか悪魔みたいなのを引くくめたもの全てだ。

そして、それらを退治する能力を持つ者。それが……

「うむ。刻印者。^{カルヴァ}真神家^{まがみ}にお鉢が回って来たというワケだ」

なるほどな。妖かしが相手なら、真神^{まがみ}が介入しなければならぬ。

「親父………」

嫌な予感がした。

「嫌とは言わせん。今まで勝手をして来たのだ。最初で最後で構わん。^{まがみ}真神の役に立て。……アロウ。お前には、魔女狩りをしてもらつ」

「じよ、冗談じゃない！魔女狩りだあ！？そんなの親父と兄貴だけで事足りるだろ！」

カルウ 刻印の力を必要としているのだ。だが、カルウ 刻印は親父と兄貴にもある。そして二人は強い。

歳老いた親父と、

インテリ眼鏡の兄貴、

この二人なら、妖かしの類にやられることはないし、そもそも面倒だ。

親父は着ていた着物を脱ぐ。すると、上半身は包帯だらけだった。

「見ての通りだ。私も歳だな。ドジを踏んでこの様だ」

「…………魔女…………にか？」

「彼女達は不思議な技を使い、一筋縄ではいかない。どうしてもアロウ、お前の力がある」

親父がドジを踏んだなどと信じられないが、

「わかったか。僕とお前とで魔女狩りをする」

兄貴が眼鏡をくいつと上げて言った。その仕草は、真剣な話をする時の兄貴の癖。

「アロウ。お前が真神と縁を切るのなら、魔女狩りを完遂するのが

条件だ」

兄貴が付け加えると、親父は着物を着直し、

「アロウ！改めてお前に十字架の刻印者。ロザリオカルヴァとして
魔女狩りを命じる！よいな！」

世界のどこにいても真神^{まがみ}の名を持つ以上、真神^{まがみ}の者として生きて行
かねばならない。自由は無い。

真神^{まがみ}の名を捨てられるのなら……

「人が宇宙に行く時代に魔女狩りとは………」

ハナから拒否権^{カルヴ}は俺にはない。

右手の刻印^{カルヴ}が恨めしかった。

第二節 咒女（じゅじょ）

「魔女狩り………ねえ」

面倒なことになったもんだ。

魔女狩りをする時間は夜。最低でも夕方六時を回ってからだそうで、その辺りから魔女は動き出すらしい。なんでも、教会が魔女を使って争いを始めて日が浅いらしく、さしずめ教会戦争に関する詳細は霧の中らしい。

兄貴と魔女狩りを始める時間までまだ先。俺は、息の詰まる真神の家を出て、一旦ホテルに戻ることにした。

「^{カルウ}刻印なんて、しばらく使ってなかったな」

右手の黒い革手袋^{カルウ}ごしに、刻印のある辺りを見た。

小さい頃は、よく親父に連れられ妖かし退治に出掛けたもんだ。妖かし達が、親父の刻印^{カルウ}に消されて行くのが、実に神聖さを醸し出していたつけ。

俺はその時に出る、シャープな光によく目を奪われていた。

だけど、思春期を迎えた頃から、真神家^{まがみ}に対する反骨精神から、妖かし退治を辞め、刻印^{カルウ}を使うのを封印していた。

刻印^{カルウ}は凶器にもなる。“人を消すことは出来ない”が、“人を殺めることは出来る”。人に対して迂闊に使用すれば、風穴を開けるのはワケないのだ。

「やれやれだ。やっと自由になったと思っただけなのに」

あれからも出続ける溜め息を、敢えて止めることはせず、俺はいびつな工事跡の残るアスファルトを歩いていた。

そのわずか二、三メートル先を、すごくいい香りのする若い女性
性が歩いていて……いや、全然変な意味ではなくだ、彼女がひら
りどこからかハンカチを落とした。

「あ、あのう……………」

まだ一度も使われていないだろう白いハンカチを拾い、声を掛けた。

「はい？」

「ハンカチ落としましたよ」

「あ、ありがとうござ…………いま…………す」

思わず顔を見合わせた瞬間だった、

「あ……………!!!!」

「あ……………!!!!」

同時に街の往来で叫んだ。

「お、お前……………タベの!」

俺を痛め付けてくれた危険女だった。

「へ、変態!!」

なんてことを叫びやがる。みんな俺を見てるじゃないか。

「バ、バカ！勘違いされるような言い方はやめろ！」

そう忠告したにもかかわらず、危険女は俺からハンカチを“引ったくる”と、

「変態でしょ！よくもまあ昼間っから堂々と！……ハッ！なに！？今度はストーカー！？」

「ふ、ふざけんなっ！俺はハンカチを拾ってやったただけだ！」

「拾ってやった？なんて傲慢な男なの！ハンカチ拾ったくらいでお尻を触らせるっての！？」

「誰がいつ、何時何分そんなことを言った！？」

「顔に書いてあるわよ！」

信じられん。人の親切を、どう解釈したらそうなるんだ？

「もういいっ！親切になんてするんじゃないかった！」

また暴力を振るわれるのは御免だ。

二度も親切にして、この仕打ちだ。関わらない方が身の為。

「待ちなさいよ」

言い切ったか言い切らないかの境界線辺りで、背中に結構な衝撃を受けた。それが、この危険女の回し蹴りだと知るには、くると回転する彼女の、水平に保たれた右脚を見れば一目瞭然だった。

「テ、テメエ！このクソ女！何しやがるっ！」

きつと、世界中は今、俺の味方のはずだ。だってそうだろ？ハンカチを拾ってやったあげく、背中に回し蹴りを喰らったんだ。

なのにだ、この女ときたら、

「あんた、駅まで道案内しなさいよ」

……何様だと言いたいのを通り越し、「？」が頭を埋めて行く。

性格悪いのは鉄板だ。いや、腐ってる。人様に蹴りを入れって道案内をしろと命令するのだからな。親の顔が見てみたいもんだぜ。

「なんで俺が、んなことしなきゃならないんだ？」

「ヒマそうだから」

「ひ……暇だあ？生憎、俺は忙しいんだ！小娘とじゃれあってる暇はな……ぐほっ！」

「駄々こねてないで案内なさい」

警察に突き出してやろうか。今度は腹を蹴りやがった。恐ろしく育ちが悪い。

ただ、蹴りが飛んで来るまでのモーションが、ほとんどない。相当、格闘技か何かをやり込んでいるのは間違いない。

「この……バカ女ッ！」

怒りに任せ、つい俺も蹴りを放った。本気じゃないにしろ、当たり

どころが悪ければ骨の一本はイカれるだろう。だが、それすらも無駄の無い動きでかわすと、

「なあんだ。そこそこやれるんじゃないの」

ニヤニヤしながら言った。

このガキ……………なんだこの余裕は。

もちろん本気で当てるつもりはなかったし、かわしやすいようにしてはやった。が、スマートに避けたもんだ。

「そんな怖い顔しないでさ、ほら、道案内」

「……………」

まあ、宿泊先のホテルは駅の近くだし、また蹴られるのは勘弁だ。

「わかったよ」

「そうこなくっちゃ！はい、これ」

「な……………」

「あゝ楽になった。あ、落とさないでよ」

持っていた手荷物を押し付け、“道案内”よりも先を歩き出した。

この街に帰って来たことが、全ての始まりだったんだ。

名前も言わず闊歩^{かつぽ}する危険女。

後に、自分の運命を呪うことは罪だと知らされる。そんな得体の知れない何かに呑み込まれていると、もっと早く気がつくべきだった。

第三節 魔女

なんでもつと愛想よく出来ないものかね、うちの兄貴は。

魔女狩りの待ち合わせ時間に遅れはしたが、ほんの二、三分。互いの時計の誤差だって考えられるだろうに。

「そういうことを言ってるんじゃない。アロウ（お前）は真神まがみの自覚が無さ過ぎると言ってるんだ」

真神真神真神。口を開けばそればかりだ。ウチの家系は。

「悪かったって」

昼間の、結局名前を名乗らなかった危険女のこともあり、疲弊まがみしてるんだ。言い争う気はない。魔女狩りを終わらせなきゃ真神家と縁を切れないんだからな。

「で、教会ってどこの教会に向かうんだ？」

魔女信仰が始まってから、教会がやたらと増えたという。全ての教会に魔女が存在してるわけではないらしいのだが、今は兄貴に着いて行くしかない。

「町外れの教会だ」

「町外れ？なんでわざわざ。近くの教会、片っ端から当たればいいじゃねーか」

「良からぬ噂が立ってるからな。その教会は。真神まがみが動いてるこ

とはなるべく伏せておきたい。確実な線を行くのがベストだろ。一応は一流大学に進学するだけの頭を持つてるんだ、少しは自分で考えたらどうなんだ？あれだけ親父にでかい口利いたんだ、人に頼り過ぎるな」

呼んだのはあんたらだろ。

車は間もなく目的地に到着する。

魔女とやらを拝んでやりたい気持ちが強く、兄貴の皮肉も気にならない。

「あそこだ」

ゆるりと停車させ、エンジンを切る。

兄貴はダッシュボードに手を伸ばして来て、非常に物騒なブツを二つ取り出すと、俺にその一つを渡して来た。

ブツは、ひんやりとした体温と、ずっしりとした重量を伝えてくれる。

「拳銃じゃないか」

「^{カルヴ}刻印の力じゃ、人間までは狩れないからな。ま、魔女にも効くよう、銀の弾丸を詰めてはあるが」

兄貴は真顔で言う。

「冗談じゃないぜ！俺達が狩るのは魔女だろ！人間なんて聞いてないぜ！」

「落ち着けよ、アロウ。あくまで護身用だ。まだ言ってなかったが、俺達以外にも魔女を狙ってる輩がいるからな」

「俺達以外に？」

「ああ、そうだ。魔女を保護しようとする組織、ブレイメンだ」

「……………なんだよ、魔女を保護するって」

「詳しくは調査中だが、教会が実体化した魔女を、争いに巻き込まないようにする組織。言わば、狩人たる真神家の喧嘩相手とも言える」

「だからってだな、拳銃はマズイだろ」

「フン。ビビったのか？横柄な態度を取る割に、案外意気地が無いんだな」

「そういう問題じゃねーだろ！人殺しは……………！」

「大丈夫だ。魔女狩りに支障をきたす奴は、殺しても罪に問われない。政府も承知済みだ」

「なんて国だよ。つか、こういう時の兄貴は苦手だ。冷酷な一面を惜し気もなく披露してくる。」

「行くぞ。せつかく掴んだ情報だ。棒に振るわけにいかない」

「噂じゃなかったのかよ。」

「なんにせよ、さつさと済ませて早く床に就きたい。」

「ついでに渡されたホルスターに拳銃を仕舞い、ジャケットの下に装備して車を降りる。」

星のないせいか、教会はまるで幽霊屋敷のようなたたずまい。

「ん？なんだこれ？」

敷地内に入りすぐに俺の目に止まったのは、青い三日月の紋章。ランプに照らされている“それ”は、扉の上部に飾られ、下には『BLUE MOON』と施されている。

「ビンゴだな」

兄貴はそう呟くと、

「それは信仰魔女のシンボルで、見る奴が見れば、誰を信仰してるかわかるそうだ」

「へえ」

「じゃ、開けるぞ」

特別インターホンも見当たらないが、だからと言って堂々と扉を開ける兄貴は、神経質とは思えないくらい図々しい。

中は無数のキャンドルで視界が確保された内部は、至って普通の教会模様だった。

ただ、ガラスがステンドグラスでなく、確か外観も教会というよりは小さな洋館だったように思える。きっと、洋館をリフォームしたものなのだろう。

バージンロードを歩く錯覚を起こすくらい、兄貴と並んで奥へ進む。

奥の壁にも青い三日月のオブジェがあり、祭壇には中年の神父が、青いローブを纏って立っていた。

「まだ夜も浅いというに、このようなところへ何の用かね？」

「ええ、実は懺悔したいことがありまして、弟と二人、参った次第です」

兄貴は悪びれもなく嘘をついた。ここが魔女を信仰する教会じゃなかったら、罰当たりもいいとこだ。

「本来なら信者でなければ懺悔は出来ないのだが、まあこれも何かの縁。いいでしょう。ああそれと、今は“懺悔”とは言わず、“告解”と言つのです。余談でしたね。では、“懺悔”室に入りなさい」

礼拝堂の脇の小さな扉。そこが懺悔室だろう。

（アロウ、私が神父を引き付けておく。その間に礼拝堂内部を軽く探つて、魔女の存在を決定づけるものを見つける）

そう囁き、兄貴は懺悔室へ入る。

「探れつつあってなあ……………」

はて、どうしたものか。

本来は十字架があるはずの場所に三日月のオブジェ。充分決定づけてると思うのだが。

後は言われた通りと言うか、適当に見て回る。目立って気を引くものも無く、祭壇の前に腰を下ろすと、振り子時計のボーンという音が鳴り、七時を告げた時、無数のキャンドルによって揺らめく空間に、人影が現れる。

「…………お、おい…………」

次第にくつきりと浮かぶシルエットは、明らかにドレスを着た金髪女性。綺麗だ…………。

「ごきげんよう」

視線がぶつかり、向こうから挨拶をして来た。どこかのお伽話のお姫様のような品のいい女性。

根拠ではなく直感が告げ、確信する。

- 彼女は魔女だ -

煙のように現れた魔女を前に、俺はただただ見惚れるだけだった。

第四節 狩人

「今夜は、月は期待出来ない空模様でございますね」

魔女は人懐っこく会話を求める。

「え、ええ、そうですね」

答えながら、懺悔室を見る。

早く出て来いバカ兄貴。お目当ての魔女だぞ。

青と白のドレスの魔女は、とてもおしとやかに微笑んでいるが、
カルダ刻印で狩ってしまったていいのか？それとも兄貴を待つべきか？

手を後ろに回し、解らないように革手袋を外す。襲って来る気配はないが、備える必要はあるだろう。なんせ、あの親父が怪我を負わされるほどだ。この魔女の仕業かどうかは別にしても、油断は出来ない。

「あら？襟が立ってらっしゃいますわ」

ワイシャツの襟を、親切に直そうとしてくれる。その時、銃声が響いた。

懺悔室からだ。

「兄貴！」

緊張が走る。銃を撃ったのは、おそらく兄貴だとは思っただが。

ふと、ゾツとするような感覚に見舞われ、無意識に立ち上がった俺は魔女を見る。

「…………貴方、その懐にあるもの…………まさか…………銃？」

しまった。ジャケットがホルスターに引っ掛かってやがった。

表情を一変させた魔女は、俺が刻印カルヴを構える前に、不思議な力で動きを防いで来た。

「ぬあつ?! な、なんだ…………?!」

縛られてるのは違う。例えるならそう、身体だけコンクリートに埋められてるような。

正直、これは苦しい。

十字架に張り付けにされたように腕が横に広がる。

「噂に聞いてはいましたけど……………こんなに早くわたくしの下にいらっしゃるなんて。ああ……………不幸ですね。そう思いませんか? ロザリオカルヴァ!」

綺麗な顔が、キリツと俺を射ぬく。

「知ってたのか……………」

「わたくし達魔女を狩る狩人。うふふ。敵の情報くらい仕入れてはあります」

この状態では刻印カルヴは使えない。最悪だ。

それにしても、なんて笑みを浮かべやがる。さっきまでとは違う、獲物を仕留める時の残酷な笑みだ。

「ほう。そいつは光栄だな」

すると、懺悔室の扉がようやく開き、兄貴が銃を構えて出て来た。

「あ…兄貴」

「情けないぞ、アロウ。あまりみつともない姿を晒すな。真神まがみの名が汚れる」

「うるせーっ！いいから早くなんとかしろよ！」

普段は嫌いな兄貴も、今はかりは救世主に見え………ないが、とにかくこの状況をなんとか出来るのは兄貴しかいないのだ。

「だそうだ。悪いが弟を解放してやってくれ」

「くすす。そうはいきません。狩人はわたくし達にとって脅威。そうでなくとも、貴方がたを相手にする暇はないんですから」

「交渉決裂だな。なら………」

一瞬だけ鼻で笑い、眼鏡をくいつと指で上げると、遠慮なく銃をぶっ放した。

銀の弾丸は魔女にかわされたが、注意が逸れたのか同時に俺も見えない力から解放された。

「女性に対して随分遠慮のないことで」

少し機嫌悪そうにした魔女に、

「そうでもない。私は紳士だ。まあ、生身の人間に限っての話だが」

銃口を向けたまま兄貴が歩いて来る。

「アロウ！刻印^{カルウ}で狩れっ！」

「言われるまでもねえっ！」

右手に意識を集中させると、刻印^{カルウ}が金色に輝く。この光が妖かしを浄化……………つまり消し去るワケだ。

「そっぴや、まだ名前聞いてなかったな。魔女さんよ」

妖かしとは言え、見た目は人間。消し去るという行為に抵抗は出てしまふ。せめて名前だけでも覚えておいてやろっ。

「名前だなんて……………名乗るほどの者ではありません。そうですね、強いて名乗るのならば、ブルームーンとお呼び下さい」

消されるってのになんて笑顔なんだ。

「さっさとやれ！アロウ！」

兄貴は相変わらず銃口をブルームーンと名乗った魔女に向け、動きを封じている。ちよつとでも動けば迷わず引き金を引く気だ。

銀の弾丸で魔女を仕留められるかどうかは解らない。さすがに魔女を相手にしたことはないからな。

「悪いな。こっちにも事情があるもんでね」

刻印^{カルウ}の力を解放しようと手の平を開き掛けた時だった、

「ガシャンッ！！」

派手にガラスが割れ、女子高生が転がり込む。

「あつ！お、お前……………！！」

両手に指貫きの革手袋を嵌め、髪をツインテールにして、キレのある瞳。危険女だ。

「……………あら、……………あんたは……………」

互いに知れた顔。名前は知らなくとも、会う度に濃い出会いをしている。

「変態男じゃない」

もつと違う言い回しは出来んのか。兄貴に「知り合いか？」と囁かれたが、それはそれは深い溜め息でごまかした。

「最悪。一日に二度は会いたくなかったわ」

言っな。俺もお前に会いたくなかった。

第五章 麻希

「なんでお前がここに」

言った俺は危険女を睨み付けた。

しかしまあ、扉があるのに窓ガラスを割って侵入して来るとは、この女の頭の中には常識だとか道徳などというものは欠落………いや、陥落してるに違いない。

「あんたこそ。なんでここにいるのよ」

それが蹴りをもらってまで道案内をしてやった者に対する態度か？

「何？根に持ってるの？」

持つわ。

「弟とどういう関係か知らないが、ここは君のような弱い女性が来る場所ではない。悪いことは言わん、早々に去れ」

無駄だよ、兄貴。そんな上から目線で物を言えばきつと、

「神経質そうな男だな。顔の割にモテないと見た」

「な……ッ！」

そういう女なんだよ。

ビシッと兄貴を指差し言った危険女は、チラリと俺の右手を見て、

「^{カルヴ}刻印……ひょっとしてあんたら、ロザリオカルヴァー!?」

明らかに警戒する体勢を取った。

「なんでそれを……!」

俺は再び^{カルヴ}刻印の力を溜める。^{カルヴ}刻印を知ってるということは、ただモンじゃない。

「ロザリオカルヴァー……^{まがみ}真神一族の者なら、話し合う必要はないわね」

危険女はファイティングポーズを取る。おいおい、バトルする気かよ。

「うふふ。なんだか賑やかになって参りましたわねえ」

「あんた、魔女ね?」

「ええ。いかにも。魔女ですわ」

「あんたはブレーメンで保護するわ。安心して」

ブレーメン?それって確か……

「そうか。魔女保護組織、ブレーメンなのか、お前」

兄貴は銃口を魔女から危険女に向ける。

兄貴が車ん中で言ってた、魔女保護法を掲げる組織。この女が?

「ああ。ブレーメンの方ですの。貴方様の噂もお聞きしてますわ」

「だったら話が早いわ。私に着いて来て！」

「お断りします」

「ちよっ……………な、なんでよ！守ってやるって言ってるのに！」

「余計なお世話です。守るとか守らないとか、勝手に決めにならないで頂きたいものですわ」

魔女は不愉快な顔で髪を指で巻くと、

「さて、その殿方」

「なんだ」

兄貴を呼ぶ。

「先程の銃声から、神父様を殺したのだと察しますが？」

「……………見抜かれていたからな。こちらの素性を。殺られる前に殺ったまでだ。それがどうした？」

「それを聞いてホッと致しました。神父が居なくなれば、魔女は自由を手に入れます。従って、わたくしを拘束するものは何もなくなつたワケです。」

魔女はツツーっと天井付近まで浮遊すると、

「感謝しますわ。ロザリオカルヴァのお二方」

ドレスの裾を持ち上げ会釈する。そして、

「せめてものお礼に、名を名乗りましょう。わたくしの名はシンデレラ。時間制限の魔女でございます。皆様がわたくしを追う限り、またお会いすることもございましょう。では、ごきげんよう」

粉のような光になって消えた。

「やれやれだな。また親父に怒られる」

二十歳を過ぎて親父を怒られる心配をしなければならないとは、兄貴は兄貴で大変なのかもな。真神の跡取り^{まがみ}として。

「じゃあ解散だな。兄貴、悪いけどホテルまで送って……ぐあっ
！」

「この変態男ッ！どーしてくれんのよ！魔女に逃げられちゃったじゃない！」

「な………なんでいちいち蹴るんだ！お前は！」

「うるさいっ！変態男に『お前』呼ばわりされる筋合いはないわ！」

我慢にも限度がある。こいつのせいで俺の肉体は悲鳴を上げっぱなしだ。

「誰が変態だ！だ・れ・が！」

このままじゃ收拾が着かないと思ったのか、兄貴が割って入って来た。

「魔女に逃げられた以上、手ぶらで帰るのも忍びない。ブレーメンの情報くらい、持って帰るとするか」

安全装置を外したままの銃を構える。

「おい！兄貴！」

「心配するな。素直に吐けば無傷で帰してやる。そんなことより、知り合いかどうか知らないが、真神まがみの敵を庇い立てるのは見過ごせんぞ。わかったなら、さあ、そこをどけ！アロウ！」

割って入った兄貴と危険女との間に、今度は俺が割って入る。

「女子高生相手に銃はマズイだろ！」

「問題無いと言っただろう。魔女狩りに支障をきたす者を殺しても、罪に問われることはない！」

だから真神まがみが嫌いなんだ。

政府からの依頼だか知らないが、盾突く者を叩きのめそうとする根性が気に入らない。

「アロウ！」

と、兄貴が叫ぶと、“あの”感覚が俺の背中を襲い、

「ぐえっ！」

奇っ怪なうめき声を上げて兄貴にもたれる。

また蹴りやがったんだ。ホント、足癖の悪い女だ。

「覚えてなさい。今度はあんた達より先に、魔女を保護してみせるから！」

そう言つて、遅しく去つて行つた。

「待て！……………くっ、この愚弟め！」

突き飛ばされ尻餅を着く。つたく、どいつもこいつも人をなんだと思つてんだ。

「んだよ……………別にまたチャンスはあんだろ」

「だからお前はダメなんだ！仕事というのはだ……………」

得意なお説教が始まつた。

大体、仕事つてのは報酬があつて成立するもんだろ。魔女狩りを仕事にしたつもりもないしな。

魔女……………か。初めて見たな。イメージとは大分違つてはいたが、間違いなく妖かしの気配だった。それよりかは幾分、人に近いものだったけど。

それと危険女。あいつブレメンだったのか。女子高生を制服姿のまま使う組織つて一体……………。もつとこっ、ナントカスーツみたいなもの着たりしないのか？

あれこれと思慮しなければならぬことが山ほどある。

「ん？なんだあれ？」

一向に止まない兄貴の説教から目を背けると、学生証を見つけた。

「聞ってるのか！」

「わかったよ、兄貴。今度からはもっと気をつけるって」

「……………わかればいい。なら帰るぞ。とにかく親父に報告だ」

言うだけ言つと、兄貴は教会を後にする。

「ふう。あぶねーあぶねー」

兄貴が気付かず素通りした学生証を拾うと、そこには、

『びやくなん白南高等学校 進学科 二年二組 みちわあさき道和麻希』

あの危険女の顔写真と一緒に、そう書かれていた。

「何やってるんだーっ！置いてくぞー！」

「今行くよ！」

明日、届けてやろう。聞きたいこともあるからな。

三年ぶりの故郷ふるさとは、まだまだ俺を落ち着かせてはくれそうにもなかった。

第六節 知性

最後の授業が終わり、放課後というこれまた一日の中で、学生にとつては特別な時間が始まった。

部活動に勤しむ者、目的もなく校内に残り仲間との余韻を楽しむ者。様々だ。

俺は同じ頃の自分を思い出しては、親父に逆らい、喧嘩に明け暮れた青い日々を苦虫を嚙んでいた。

校門の向かいの電柱に寄り掛かり、その“もたれ心地”を確かめるようにドサツと背中を押し付けて、目当ての女子高生が来るのを待つ。

どんなツラして出て来るのか、非常に楽しみだ。“普通”のツラで出て来る確率よりは、仏頂面が出て来る方が確率は高い。

なんせあの無法者だ。友達はいないだろう。

「来たな」

俺の前方、そうだな、約三十メートル先から、道とアサキがやって来た。

予想するまでもなかった。見るからに仏頂面をしている。

「よお」

校門を出て来たところを声を掛けた。

「へ、変態男！」

人の顔を見るなり、戦闘体勢に入った危険女、道とアサキ。こいつはどれだけ暴力が好きなんだ。

蹴りが飛んで来なかったのは、俺がそれを見越して距離を取っていたからだ。

「待てつて。そう攻撃的になるな」

「フン！何しに来たわけ？今日はあんたに用事はないけど」

「あのなあ、お前は自分の用事がなけりや人を拒絶するのか？」

「あんただからよ！」

往来のと真ん中で叫ぶな。みんなが見てる。

「別に気にしないから」

俺が気にするんだよ。

こいつにはまともな会話は無理かもしれん。仕方がない。おとなしく渡すか。

「ほらよ」

「……！！なんであんたが持つてんの！？」

「タベ落として行っただろ。拾っておいてやったんだ。確か、昨日の昼間はハンカチを拾ってやったな。これで二つ貸しが作れたワケだ。道とアサキさん」

「狡い男。恩を着せるくらいなら、最初から拾ってくれなくて結構よ！」

俺を避け、つかつかと通り過ぎたと思いきや、

「馴れ馴れしく名前呼ばないで！」

学生証を取り上げ、去って行った。

「……………やれやれ」

魔女を狩る者と保護する者。相反する俺らだが、この時既に歩き始めていたのだ。荊いばらよりも過酷な道を。

「教会が自分達が信仰する魔女の為に……………ってのはわかるさ。だけど、神父……………つまり主が居なくなつた魔女が自由になつたところで、やっぱり自分が崇拜されたいが為に他の魔女を倒すのか？」

俺は、昨夜のシンデレラと名乗つた魔女について兄貴に聞いてみた。

「だろうな。だがその辺はまだ曖昧だ。誰まがが始めたのかもわからん争いだ。真相を暴くのも一興だろうが、真神まがみとしては依頼を遂行するのみ。要らぬ事はしなくていい」

今向かつてるのは、新たな教会。ガセネタの可能性は低いらしく、

車に乗るや否や、すぐに銃を渡された。

危険のある依頼とは言え、人を殺すのは真っ平御免だ。一応、受け取ってはおいだが、せいぜい威嚇にしか使う気はない。銀の弾丸が無駄になってしまいが、勘弁してもらおう。

「で、今夜はどここの教会に行くんだ？」

嫌いな兄貴と二夜連続でドライブとは、夢が無い。

なるべく喧嘩をしないように、低姿勢で話す。魔女狩りが終わるまで、兄貴は俺の相方。避けて通れるいざこざなら、努力はしてみるべきだろう。

「今日も町外れの教会だ。昨日とは真逆の方向のな」

また、アサキの奴が来るんだろうか。それに、もしかしたら魔女と魔女の戦いがあるかもしれない。そうになったら、魔女を保護すべき立場のアサキはどうするんだ？なんだか見てみたい気もする。

それ以上、兄貴と会話はなく、俺はナビシートの背もたれを倒した。

（魔女……………）

魔女って何なんだろう。真^ま神家^{がみ}にとって厄介者の俺を呼び戻してまで請け負った依頼。

魔女を狩ることだけを言い渡された俺だが、にわかになさな好奇心が生まれていた。

- 真実を知る -

それは禁忌なのだろうか。

流れる街の景色が、どことなく歪ひずんで見えていた。

第七節 幼魔

明らかに教会ではなかった。古びたその建物には、“保育園”と印されている。

「違うだろ」

薄気味悪いくらいに夜に同化した保育園は、おそらく使われていないのだろう。軽く触れただけの門が、腐食しているのが解る。

俺はぼやきながら門をこじ開ける。

「これを見る」

兄貴が言っで、LEDライトで示した場所には、『イエロードリーム』と彫られた石碑がある。

「魔女の教会だ」

兄貴はライトを消し、保育園へと歩いて行く。

シンデレラのいた教会にも、『ブルームーン』と印されていた。きつと何かの称号か何かだろう。

「兄貴」

「なんだ」

「まさか、また神父を殺すんじゃないだろうな」

「さあて。……………嫌か？」

「当たり前だろ！俺達がやるのは魔女狩りだ！人を殺すのは反対だ！」

正論を耳にした兄貴は立ち止まり、

「魔女を実体化するような輩、生かしておくわけにはいかないんだ」

「だからってだな……………！」

「アロウ、私達は正義の味方ではない。果たすべき役割の前で、社会の道德など捨てるんだな。真^ま神家と縁を切りたいんだろ？」

そういうもんなのか？神経質な兄貴が、人を殺すことに躊躇いもないなんて、意外な一面だった。

「……………俺は殺さない」

「勝手にしろ」

本当なら怒鳴ってやりたいところだが、兄貴は真^ま神に残る者。一々口を出すまい。

「アロウ」

「あん？」

不意に声を掛けた兄貴の顔が真剣だった。

「どうやら今夜は前座は無しらしい」

兄貴は園内にあるジャングルジムの上を見ている。

そこには、月明かりに照らされた幼い少女がいた。

「子供……………」

俺の見間違いでなければ、まだ小学校に入学したてくらいの女の子だ。

「何者だ！？お前達！」

腰に手を宛て、ジャングルジムの一番てっぺんに立つ少女は、かわいらしいワンピースを来て、ツインテールはくるくる巻かれて、リボンがある。

兄貴はすたすたとジャングルジムの下まで行き、

「こんなチビが魔女だとは……………」

もう魔女だと確信を持ってるらしい。

「チ、チビいゝ！？ぬゝゝゝゝゝゝゝ。レディーに対してなんて失礼な！」

レディーは関係無いと思うが……………それはさておき、仕事をしよう。

俺は革手袋を外すと、

「悪いな、おチビ。俺の自由の為、狩らせてもらっぜ」

右手に意識を集中する。

発光する刻印^{カルテ}を見た少女は、俺達は何者であるか気付いたらし

い。

「十字架の刻印……………ロザリオカルヴァ！……………うわ、ととと〜
くおー！」

少女は驚きのあまり、足を滑らせ地面に落下した。

「こんなんが魔女なのか？俺はまだ魔女の実力って言うか、親父でさえ手を妬くその能力を見ていないからな。」

「つつ……………んもつつ！カッコ悪い！」

誰に怒ってたんだ、誰に。

「神父はどこだ？」

少女の恥態を完全無視して、兄貴は憮然と言う。

「アタチがそんな簡単に言うもんか。園長室で待機してるなんて、絶対言わないもんね！」

「園長室か」

「え？あ、あれ？」

「アロウ、あの魔女はお前に任せた。俺は神父を始末してくる。しくじるなよ」

狩る気を削がれたのか、言うだけ言うと神父を捜しに建物の中へ入って行った。

「しくじるワケねーだろ。…………ガキンちゃんかに」

魔女とは言え、相手は子供。おまけにドジっ子さんだ。楽勝だぜ。

「くっ…………ロザリオカルヴァめ！このドロシー様を子供扱いした
報い、思い知るがいい！」

ドロシーと名乗ったおチビは、その紅葉もみじのような手に鞭を現す。ジ
ヨッキーが使うような短い鞭。

その鞭で、空中に何やら指揮者のように振る舞う。

「居出よ！冷徹キコリ！」

振る舞った箇所に魔法陣形が浮かび、ドロシーの命令を受けた艶の
無いブリキのロボット？…………が現れた。

「召喚……………ってヤツか！？」

ブリキのキコリは斧を担ぎ、

「お呼びですかい？」

ドロシーの前にひざまずいた。

ドロシーは、ブリキのキコリのその様子に満足したのか、更に
エラソーな口調で、

「あの男を殺せ！」

俺を殺すよう指示した。

ブリキだろうがチタンだろうが、妖かしである以上、刻印カルヴの力

は通用する。

ブリキのキコリは俺を見て、

「ドロシーの命令である以上、ワタシは君を殺さねばならない」

ブリキ風情に殺される気は毛頭ない。それを解らせてやるには、力で掀伏せるまで。

斧を構え、こちらの出方を伺ってる。ならば、お望み通り突進してやるさ。

「やれるもんなら…… やってみな！」

ブリキの胴体に体当たりを噛まず。

思いの外あっさりと会心の一撃を与えられ、よろめき倒れたブリキの胴体に更に拳を叩き付けた。

「ギエエエエエー……ッ……!!!!……!!」

ブリキは身の毛もよだつ悲鳴を上げると、はいつくばりながらドロシーのもとへ行った。

あまりの気味悪さに、俺はとどめを忘れてしまっただった。

「い…… 痛いよお…… ドロシー、助けてえ」

「ええいっ！この役立たずっ！出て来て早々アタチに恥をかかせるなっ！」

「だってアイツ強すぎるよお」

「うるさいうるさいうるさいうるさいっ……!!」

ドロシーはブリキを何度も足蹴にして、ハアハアと肩で息をしている。

なんだかよく解らないが、役立たずには違いない。そこんこだけはおチビに同情しよう。

「こうなったら、次をお見舞いしてやるわ！居出よ！無想力カシ！」

さつきと同じように魔法陣を描く。その手つきだけは、魔女らしく慣れた手つきだ。

そして呼んだ次なる相手は、

「ドロシーちゃん、呼んだあ？」

……………汚いワラの帽子と、汚い服の力カシだった。

力カシは一本足でひょこひょこ落ち着かない。

たまに立ち止まると、まるで突風にでも煽られてるように左右に揺れているのだ。

「ちゃん”はやめなさいって言ってるでしょ！」

「ごめんね、ドロシーちゃん」

「……………」

ドロシーは額に手を宛て俯いた。

これは勘だが、多分力カシ（こいつ）も役立たずのような気がする。

言っちゃいけないかもしれないが、頭が悪そうだ。

「ま、まあいいわ。そんなことより、その男を始末するのよ!」

またエラソーに命令をしたドロシーに、大人として一言忠告しなければなるまい。

「おチビ! 誰が来ても同じだぞ! やめとけやめとけ!」

「く~~~~っ! またチビって言ったな! 何をちてる力カシ! 早くやっちゅける!」

“チビ” ってのがカンに障るようだ。でもチビなんだからしょうがない。

「諦めの悪いチビだ」

「だからチビって言うな! アチシにはドロシーって名前があるの!」

力カシには“ちゃん” 付けするなとイチヤモンはつけるし………呼び捨てならいいのか?

「でもチビはチビだ」

だから俺はチビと呼ぶ。

「なんてムカつく男! 力カシ! 早くやっちなさい!」

力カシは特に返事もせず、ふらふらと俺の前にやって来ると、それまでの緩い動きとは裏腹に、高く跳ね上がり、急降下して来た。

「うわあっ!」

その破壊力は凄まじく、直撃してたら全身の骨は粉碎してだろう。

「危ねー危ねー……………」

カカシの野郎は、脅すわけでもなし、嘲笑うわけでもなく、ただふらふらと近寄って来る。

だが、突如見せる機敏な動きは油断ならない。

「なら……………！」

こっちから突っ込む。それを読んでいたとは思えないが、当たり前のようにカカシは跳び上がり、また急降下して来る。

「出来れば使いたくなかったが……………」

俺は拳銃を抜き、ありったけの弾丸を放った。

急降下を始めたカカシは、自分の落下運動をそれ以外の運動に変える術を知らないらしく、全ての弾丸を喰らってくれた。

「やったか！」

ドサツと落ちたカカシに動かないでくれと願いながら近寄る。

「うおっ!？」

ところが、何事もなかったかのように起き上がると、ドロシーのもとに戻って行った。

「バカな。銀の弾丸を喰らって動いてやがる……………」

その謎はあつさり解けた。

藁^{わら}で出来たカカシの身体は、急降下して来たこともあり、弾丸を貫通させたのだ。盲管にならなくては意味がない。

「ドロシーちゃん、あいつ怖いよう」

「お、お前まで！いいからもっかい行って来なちゃい！」

「やだやだやだ〜！」

「カカシッ！」

「ふえ〜〜。ドロシーちゃんなんか嫌いであ〜っ！」

「あっ！」

カカシは戦意喪失の為、逃亡した。

ま、ラッキーだな。

「ううう〜〜。どうもこいつも！」

「苛立つなよ。部下の質つてのは、主の質に比例するんだ。おチビには人の上に立つつてのは、少しばかり荷が重かったみたいだな」

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいー
ー！ー！ー！ー！」

これだから子供は嫌いなんだ。すぐに癇癪^{かんしゃく}を起こしやがる。

「もう終わりだろ。大丈夫、狩るつつても、痛いわけじゃねーから」

多分な。狩られたことなんてないから解らんが、カルヴ 刻印は塵のように消す力。あれが痛いとは思えない。

「行くぞ」

俺がカルヴ 刻印を使おうとした時だ。

「こっとなつたら！」

ドロシーは三度目の召喚を始めた。

しかしだ、ここまで来ると三度目の召喚を受けて出て来る妖かしも、そう警戒するようなものじゃないだろ。だったら、最後の悪あがきを見てやるのも慈悲か。

「来いっ！千獣の獅子！！」

だが、そんな俺の考えは甘いものだった。

魔法陣から現れたのは、ドロシーが口にした通り獅子だ。つまりはライオン。

「ガオオオオーッ！！」

大気を揺るがすような咆哮は、衝撃波となって俺を吹き飛ばす。

「ぐあっ！……………くっ、マ、マジかよ……………！」

身体を打った痛みなど感じないくらい、それは常識はずれだった。

「終わりなのはお前だ！ロザリオカルヴァ！」

ドロシーが勝ち誇るのも無理はない。そのライオンは、通常のものより三倍はある図体をしているのだ。

「反則だろ……………」

切り札は最後まで残すから威力があるのだ。

俺にとっては銀の弾丸がそうだった。でも、その弾丸はもうない。

幼過ぎる少女が、今はしっかりと魔女に見えていた。

第八節 動機

千獣の獅子と呼ばれたライオンは、俺を睨んだまま舌をペロリとした。

体長何メートルあるだろうか。もはや獣の域を超え、化け物だ。

「ガルルル……………」

唸り声さえ地面を這って下腹辺りに響いて来る。

「うっふっふっふ。アタチの勝ちだ！こいつに喰われれば、骨の欠片すら残らない！」

「くそつたれ……………」

見事なまでの筋肉を見せてるライオンは、一歩前に出て首を振ると、もう一度咆哮した。

刻印^{カルヴ}の力で倒すのが先か、喰われてしまうのが先か、いずれにせよこちらから仕掛けるのは不可能だ。敵の出方を見て、せいぜい逃げ回ることだ。精一杯だろう。なんとか隙を見つけられればいいくらいだろう。

ドロシーが“魔女らしく”にやけ、“主らしく”命令する！

「さあ！行きなちゃい！ロザリオカルヴァを殺ちてちまえ！」

その主の命令を受け、雄々しく、威厳ある偉大なライオンは答えた。

「断るっ！！！」

シーンと静まり返り、俺も、そしてドロシーすらその意味に理解出来ないでいた。

「な……………っ！」

わなわなと震えながら、ドロシーは何て言うか悩んでいるようで、結局、

「ロザリオカルヴァなど相手に出来るか！」

ライオンの方からそう告げた。

「ワシは帰る！」

全く戦う気はないらしい。ま、助かったと言えば助かったが、踵を返したライオンは、魔法陣の中へ首を突っ込んだ。その時だ。

「このっ、バカライオンッ!!」

持っていた鞭を、そのか細い腕で力いっぱい振るい出した。

「ひ、ひいいいゝゝゝっ!!」

「死ね！お前が死ね！自ら死ね！徹底的に死ね！」

「痛い！痛いって！」

「臆病者め！死ね死ね死ねっ!!」

「だ、だって、勝てるわけないって!」

「うゝゝゝるさいっ!!主の命令を堂々と拒否するような奴は、死んでしまえっ!!」

なんだか可哀相に思えてきた。
と言うか、拍子抜けした。

-これが魔女なのか?-

幼いとは言え、不思議な能力は持っている。このライオンとて、その気になれば無敵じゃないか。

「お、おい、もうその辺にしといてやれよ。いくらなんでも、叩き過ぎだろ」

個人的思考はともかく、動物虐待を無視は出来ない。

俺の声で、ドロシーはピタリと手を止めた。

「お前には関係ない」

「そういうわけにいくかよ。見ろよ、ケツに血が滲んでるじゃないか」

「黙れっ!アタチに指図するな!」

そうして、再びライオンを叩こうとしたドロシーの腕を、俺は無意識に掴んでいた。

「い、痛い!」

魔女とは言え非力な少女は、俺の力に屈服したが、なぜだろ？許せず手を離せなかった。

「主だから何をしてもいいなんて、間違ってると思わないのか？」

「狩人ごときが……口を挟むな！役立たずにはお仕置きが必要なのだ！」

刹那、俺の右手はドロシーの頬を張っていた。

「な……何を……？」

「黙れッ！！」

「ひっ！」

「叩かれて痛いと思うなら、自分のわがままでむやみに叩くな！！」

魔女狩り。それが俺の目的のはずだ。ドロシーがライオンを叩こうが、ブリキを蹴ろうが、どうでもいいじゃないか。なのに、俺は……。

乱暴にドロシーの腕を突き放し、カルヴ 刻印を彼女の額に宛てる。

「……………」

何人いるか解らない魔女の一人を狩るチャンスなのに、狩る気にはなれなかった。

カルヴ 刻印を引っ込め、深く溜め息を吐く。

「逃げるよ」

「……………え？」

「早く！兄貴が戻って来ないうちに逃げる！」

要らぬ正義感が邪魔をした。

今回だけだ。今回だけ見逃す。

「狩人……………なぜだ？ロザリオカルヴァとしての使命を果たさないのか？」

ライオンが言った。

「今日はそういう気分じゃない」

心のどつかで、昨夜のようにアサキが来て邪魔してくれることを望んでいたのかもな。でなきゃ、この行動に説明を付けられない。

「キコリ、ドロシーをワシの背中に乗せろ」

伏せたライオンの大きな背中に、ブリキのキコリは放心状態のドロシーを乗せてやった。

「今夜の恩は忘れない」

ライオンはさっきまでの臆病者の仮面を脱ぎ、俺を数秒見据え、去る。

「……………また会おう。狩人よ」

そして、ブリキ共々気配を消した。

「会わない方がいい。次は………」

振り返らなかった俺は、その後の言葉が見つからなかった。

第九節 客人

「二度も逃げられるとはな」

次の日。ドロシー達を逃がした俺への不満を、兄貴は親父の前で皮肉った。

親父は黙っていたが、俺も何か言う気にはなれなかった。

「アロウ」

ようやく口を開いた親父が言いたいことは予想がつく。

魔女狩りは政府の依頼なんだ。時間を掛けてはいられない。

「わかってるよ。たださ、^{カルウ}刻印をずっと使ってなかったから勘が鈍って」

「言い訳をするなよ」

「じゃあ兄貴が狩れよ」

「なに？」

「人殺しに夢中ってのは、いかなもんかと思っぜ」

「調子に乗るな！お前がやれないって言うからだな………！」

「なんだよ、やるのか？」

苛々が止まらない。だから兄貴に突っ掛かるしかない。

二十歳を過ぎて兄弟で殴り合いの喧嘩つてのは見苦しいかもしれないが、この街に戻って来てから気分が晴れないのは確かだ。

「もういい。お前達二人に頼んだのが間違いだった」

呆れ果てた親父は、少し何かを思考してから、

「昔から仲の悪いお前達だ、こんなこともあるうかと助っ人を頼んである」

そう言って、

「入りたまえ」

俺の後ろの襖に向かって声を掛けた。

助っ人って言っても、妖かし相手に頼れるのは真神まがみの人間だけだ。しかし、俺には従兄弟などの血縁関係にある者は、親父と兄貴しかない。

親父は一人っ子だし、死んだお袋もそうだ。

襖は遠慮もなく開けられ、現れたのは長髪で、野良犬のような男だった。

しかも、薄汚れたコートを纏い、両方の腰に洋剣が下がっている。

歳は若く、俺と代わらないくらいか。どこと無く淋しげで、悲しげで、今にも泣き出しそうなくらい重い表情をしている。

「だ、誰だ……？」

兄貴も知らなかったらしい。眼鏡をくいっと直して緊張をごまかしてた。

「桐山クダイ君だ」

親父の紹介を受け、そのクダイとか言う男は、

「君らのお父さんから依頼された桐山クダイだ。よろしく」

微笑みすら浮かべずに、暗い声色を出した。

「父さん！助っ人なんて聞いてない！大体、こんなホームレスみたいな男、どこから連れて来たんだ！」

兄貴が珍しく親父に噛み付いた。

「セツハ。失礼だぞ」

「しかし………！」

じつと睨まれた兄貴は、それでも尚、噛み付きたいようだったが、

「構いませんよ」

クダイの一言で、矛先を彼に向ける。

「納得出来ないな！妖かしを……魔女を狩ることが出来るのは真神^{まがみ}の血を引く者だけだ！どんないきさつでここにいるかは知らないが、さっさと出て行ってくれ！」

「魔女狩りは出来なくても、人を殺すことくらいは出来るさ」

兄貴のことなんか眼中にないのがわかる。同時に、ある種の危険な香りを感じた。

この男、何か他に目的がある。金なんかじゃない何かだ。

「説明してくれよ親父。真神まがみとの縁を切る約束、反古にする気じゃないだろうな！」

俺としては、そこが重要なわけで、こんな奴が現れたばかりに蔑ないがしろにされたくない。

「約束？それは魔女狩りを終わらせたらの話だ。そうしたいのなら、一日でも早く終わらせることだ」

親父は立ち上がり、

「セツハ。アロウ。くれぐれも彼を困らせるな。私の大切な客人だと念頭に置いておけ」

座敷を出て行った。

「今夜も行くんだろ？魔女狩りに」

クダイは俺と兄貴を交互に見て言ったが、兄貴は鼻を鳴らし親父の後を追うように出て行った。

残された俺は、

「魔女狩りの主導は兄貴にある。兄貴に聞けよ」

そう教えると、やはり座敷を出て行くのだった。

親父が客人として招くほどだ、まともな人間でないことは確かだ。そして、それに確信を持つのはまだ先の話。

仮に、この時点でコイツの正体を見抜いていたとしても、今の俺に出来ることは何もなかっただろう。

桐山クダイ。その存在が、世界を壊し始めていた。

第十節 接触 前編

今夜の魔女狩りまでまだ数時間ある。あのクダイとかいう男もおそらく着いて来るだろう。だとしたら、物事がおとなしく進んでくれるとは思えない。

憂鬱な気分のまま、俺はデパートに来ていた。

特に俺が買いたい物はないわけではなく、用事があるのはユラの方だ。

「えーと、これと、これと……」

真神家の若いお手伝いさんは、午後休みを取り、服を買いたいと言い出し、そのエスコート役に俺を選んだのだ。

俺自身、少しでも気分転換にでもなればと快く承諾はしたものの……

「な、なあユラ。まだ買うのか？」

「もちろんです！」

まあ、買うわ買うわ。普段はいい子のユラも、やはり女なのだ。

もっとも、お手伝いさんなんて仕事を若干十七歳でしているユラは、高校へ行ってない為、友達がいらない。だから、誰かと買い物となるとテンションも上がるのだろう。

「ユラ、少し休もうぜ」

「あっ！あれカワイイ！」

人の話を聞かず、意外や意外。ゴシックロリータの服飾店へ駆けに行った。

「あんな趣味があつたのか……………」

さすがにあの店には入れない。仕方がないので、ベンチで休むことにした。

「ふう」

こうして周りを見ると、魔女信仰のイカレた教会同士の戦争など、夢なのではないかと思ってしまう。

のびのびした空気に包まれたこのデパートメントストアで、寝泊まりしてもいいくらいに穏やかだ。

日常とは、こんなにも緩やかなものなのか。

その緩やかさに負け、俺は足を伸ばし背伸びをした。

「キヤッ！」

「あっ！す、すいません」

俺の伸ばした足に、清掃員がつまずき転んでしまった。

「大丈夫ですか？」

「ええ。こちらこそ申し訳ありません。今日からのアルバイトです、不慣れなものですから」

清掃員の胸のバッジには、『新人』のマーク。そして、三角巾で顔は解らないが、声を聞く分にはまだ若い。

若い清掃員は立ち上がり、膝の汚れを落とすと、何度も頭を下げて来る。元々、足を伸ばした俺が悪いのだ。謝らなければならないのは俺の方だ。などと思っていた時だった。

「いえ、俺が悪いんです。どうか頭を上げて……………」

「いいえ、私の不注意です……………」

目と目が合った。自分がどうにかなってしまったのではないかと疑うくらい、その清掃員に見覚えがあった。

「お、お前……………!!」

三角巾の中には綺麗な顔。それは、

「シンデレラ!!」

間違いない。時間制限の魔女シンデレラだ。

「ロザリオカルヴァ!」

背を向け逃げようとするシンデレラの肩を掴んだ。

「待てよ!お前こんなとこで何してやがる!?」

「は、離して下さいまし!」

「答える!」

「いやあああ……………!!消される……………!!」

「うわっ！バカ！デカイ声出すな！」

絶叫しやがった。その結果を頭でシミュレートするまでもなく、俺とシンデレラの周りに人だけが出て来る。

「お願いします！見逃して下さい！後生ですからあゝ！！」

「泣くなっ！」

ワサワサと集まる人ばかりから、俺を非難する声が聞こえ、むしろ俺の方が身の危険を感じて来た。

そうしていると、背中にボウリングの球が当たったくらいの衝撃が乗った。不意を突かれ、そのまま倒れる。

「いっつつつ……な、なん……ぐあっ！」

振り向こうとした俺の顔を、誰かが踏ん付けた。

「真昼間から懲りないわね！」

「ア、アサキ！！」

瞬間、勇猛な女子高生に捧げる喝采と称賛の声で辺りを埋め尽くされた。

アサキは足を退けるや、すぐに胸倉を掴んで来た。

「公衆の面前で魔女を強姦だなんて、いい度胸してるじゃない」

「ちょ、ちょっと待て！なんか勘違いしてるぞ！」

「黙りなさい！不埒千万！始末してやるわ！」

言っと、アサキはサバイバルナイフを取り出し、喉元に突き付けた。当然、野次馬達は不測の事態にどよめく。そりゃそうだ。英雄が一転、人を殺そうとしてるのだから。

そんな窮地に立たされた俺を見て、ユラが来てくれた。

「アロウ様！」

状況は理解していないのだろうが、

「な、何をしてるの！あなた！」

アサキにそう言った。

ユラ、頼むから刺激しないでくれ。こいつはその辺の女子高生とはワケが違う。

「何って……見たらわからない？」

「アサキ、話を聞いて……ぐっ」

「あんたの連れ？」

コクンコクンと頷いた。

「アロウ様からどきなさい！」

ユラは何か使命感に燃えてるようで、手荷物をドサッと下ろすと、こっちに近寄って来る。

それを受けたアサキは、売られた喧嘩はと、標的を俺からユラに変える。

「生意気な女ね」

「それはどうも」

ユラの俺を守ろうとする想いは嬉しかったのだが、こんなに血の気の多い子だとは思わなかった。

そんなこんなで、二人の睨み合いが始まったばかりで、警備員がやって来た。

「チツ。ここで捕まったら面倒だわ」

アサキはサバイバルナイフを仕舞った。

同時に、それは俺も早急にここから立ち去らねばならぬということ。

シンデレラに構ってる暇はないと思うと、

「あれ？」

いつの間にか、いなくなっていた。

「命拾いしたわね」

そしてアサキも、捨て台詞を吐いて逃走した。

「アロウ様、大丈夫ですか？」

健気な表情を見せてくれて悪いが、

「逃げるぞ！ユラ！」

「え！？」

捕まって面倒になるのを避けたいのは俺も同じ。

ユラの手を引き、買い物袋を置き去りにその場から逃げた。
許せ、ユラ。服は後から買ってやる。

（それにしても……………）

何故、魔女がアルバイトを？

様々な疑問のひとつに違いはなかったが、体力も精神も休まらない俺は、今おみくじを引いたら、大凶を引く自信だけはあった。

第十節 接触 〱後編〱

「はぁ……………」

昼間の疲れからか、車に乗ってから、ずっと溜め息ばかり吐いていた。

「…………… 大分お疲れだね」

そんな俺を見兼ねてか、ナビシートからクダイが言って来た。

「まあな」

ステアリングを握ってるのは兄貴ではなく俺だ。兄貴はと言うと、今回の情報は信頼性が足りないとかで、キャンセルだと。

でも本音は、クダイのことが気に入らないだけなのだ。多分、今頃は、独自に情報を集め、一人で魔女狩りをする段取りでもしてるだろう。

「…………… 親父とはどんな関係なんだ？」

歳を尋ねると、クダイは俺より一歳だけ年上だ。だから尚更気になる。親父の客人でこんな若い奴はいないだろうし、見るからに政財界の人間ではない。物騒なことに、西洋の剣を二つも持って歩いているんだからな。

「どんな？まあ、少なくとも愛人ではないね」

フツと笑ってジョークのつもりなのだろうが、全然面白くないぜ。

「別にジョークのつもりはないよ」

「お前は人の心が読めるのか」

軽くツツコミを入れるも、半分以上は皮肉だ。

俺は車を止め、

「今夜はここだ」

魔女狩りをする教会を見た。

「さあて、お前のお手並み拝見と行こうじゃないか。刻印カルウを持たないお前が、魔女狩りに選ばれた理由を知りたいし」

車を降り、クダイに言ってやった。

クダイは二本の剣を左右の腰に装備させ、

「それは構わないけど、いいのかい？君のお株を奪うことになるよ？」

「ケツ。余計なお世話だ。言っとくけど、刃物で処理出来るような連中じゃないからな」

「フフ。確かめてみたのかい？」

「何？」

「君は刻印カルウが無ければ魔女狩りは出来ないと思ってるみたいだけど、他の方法だってあるんじゃないのかな？」

意味ありげに笑う。それは、俺が知らない何かを知ってるという証に見えた。

「上等だ。刻印はその昔、世界さえ終わらせると言われてた力だ。そんな力が、他にもあるなんて思えねーよ」

「世界さえ終わらせる………か」

クダイは一人先に進むと、教会の入口で立ち止まり、こう言った。

「なら聞こう。君は終末を見たことがあるか？」

ゾクリと寒気がするほど鋭い目つきで俺を見ていた。

「いい加減、一人くらいは保護してもらわんと」

男は厳しい口調でアサキにそう釘を刺す。

「わかってるわよ。でも、いつもロザリオカルヴァが邪魔を………」

「言い訳は聞きたくない。アサキ君、忘れてもらっては困る。我々は遊んでる暇は無いのだよ」

「……………はい」

盾突くわけにもいかず、おとなしく返事をする。

「ダンテ室長。あまり責めないであげて下さい。彼女はブレイメンで大切な任務を背負っているんだ。機嫌を損ねられて辞められては困るし」

二人のやり取りを見ていた女性が庇う。

「ジャンヌ、君は甘すぎる。我々に失敗は許されないのだ」

そう呼ばれた女性は、ショートのを髪を耳にかけ、アサキを見て苦笑いした。

若いアサキが一生懸命なのを理解してやれるのは、同じ女性たる自分しかないと考えているのだ。

「それはそうと、そのロザリオカルヴァが今夜も動き出したようだ」話を切り替え、肝心の本題にはいる。ジャンヌが仕事の顔になったのを見て、

「そこに魔女はいるのか？」

ダンテもまた気持ちを切り替えた。

「どうだろ？ボクのところにはなんの情報も来てないよ。かと言っ

て、みすみす見てるだけってのも………ね」

そう言っアサキを見る。行けと言っているのだ

「わかったわよ。行って確かめて来るわ」

ツンとした態度で了承した。

立場が低いというのは、何かと不便極まりない。

「いや、待ってくれ」

行けと言ったジャンヌが止めた。

ダンテもその真意は解ってないようで、何を言おうとしてるのが興味が湧く。

「何よ。忙しいんだから早くして」

「まあ、そんなに突っ掛からない。実は提案があるんだ」

ジャンヌはダンテに向かって言った。

「提案？」

「ああ。ボくらブレーメンは、どちらかと言えば小さな組織だ。今はまだ真神^{まがみ}がこちらの詳細を把握しきれていないから行動に制限されないが、もし真神^{まがみ}が本気になったら、ちよつとマズイよね」

ジャンヌという女はキレ者だ。その脳内で思考され、生み出されるものは、ある種の理論として成り立つんじゃないかと思うものが多い。だから、ダンテはジャンヌが言い終えるのを待つ。

しかし、アサキにはどっちでもいい。何を言われようと、実行するのは自分なのだから。

「そこでさあ、ロザリオカルヴァの一人をこっちに引き込んだらどうだろ？」

「な……………何言ってるの！？それって、仲間にするってことでしょ！？冗談じゃないわ！」

即行で否定するアサキだが、

「面白いね。しかし、仲間にしてどうするんだ？」

ダンテは関心強く聞き返した。

「もちろん、ブレーメンの一員として働いてもらう。魔女を狩るのではなく、保護する方のさ」

「バツカじゃない。なんでロザリオカルヴァの力を借りるわけ？私達だけで充分よ！」

「彼らの力は魔女を狩るだけの力じゃない。守ることに使える力だ。次男の真神アロウは、真神家との絶縁を望んでるそうじゃないか。なら尚更都合がいい。こちらの思惑を話して、理解してもらえれば力になってくれる。ボクはそう思ってる」

「嫌よ！あんな奴に全部話すわけ？絶対反対だから！」

断固として拒むアサキだったが、

「ロザリオカルヴァを味方にか……。なるほど。それはつまり……」

ダンテはジャンヌの表情を伺う。どうやら思うことは同じらしい。

「いいだろう。接触してみる価値はありそうだ」

ダンテが許可を出すと、

「了承を得たよ。ああ、ボクも一緒に行くから安心して」

ジャンヌはアサキの肩を叩いた。

「さあ、行こうか。真実が暴かれる前に、ボクらにはやらなきゃいけないことがある」

第十一節 慢心

「なら聞こう。君は終末を見たことがあるか？」

思い詰めたように悲しいクダイの眼差しは、俺の心臓を止めてしま
うのではないかと思うほど鋭かった。

「なんだよ、シュウマツって。土曜日なら毎週来るじゃないか」

そんな馬鹿臭いことを聞かれてるわけじゃないことぐらい、俺だっ
てわかってるんだ。でも、茶化してやらなきゃ、自分を保てそうに
ないくらい、クダイの視線が恐かった。

「あはは。君は面白いね。僕の知り合いに似てるよ」

知るか。似せようとして似てるんじゃないんだよ。

「終末ってのは、世界の終わりの時のことさ」

ほう。ならお前は世界の終わりを見たことがあると、そう言いたい
のか？

「世界が終わる時、どんな風に終わると思う？」

「どんなって……巨大隕石が降って来るとか、核戦争が勃発する
とか……そんなもんだろ」

「……まあ、それも有りだけど、本当に世界が終わる時、世界は
鏡のように割れてしまうんだ」

「はあ？世界が鏡みたいに割れるだって？」

危ない人間なのか？この桐山クダイという男は。俺にはクダイが何を言ってるのか解らない。

「空間に亀裂が入って、音を立てて割れるんだ。君は信じないかもしれないけど、僕は二度、世界を壊してる」

正気かよ。ヤバイ薬でもやってんじゃねーのか。誰が信じるか、そんな話。

「フツ。冗談だよ」

「お前なあ」

「アロウがあんまり真剣に聞いてくれるからさ。つい調子に乗っちゃっただけ」

こんな奴が親父の知り合いだとは、やっぱり嘘っぱい。一緒にいると頭がどうにかなっちまうぞ。

「お前の冗談に付き合ってる暇は全く無い！さっさと済ませて帰ろうぜ！」

クダイは肩をすぼめて見せたが、敢えて無視した。

教会の扉や、その周辺には、いつもの“あれ”がない。“あれ”ってのは、『ブルームーン』だとか『イエロードリーム』だとか、胡散臭い称号みたいなものだ。シンデレラの時も、ドロシーの時にもあった。それが今夜は存在してない。ってことはだ、ハズレが確

定してるようなものだ。徒労だろう。

「ま、一応中を見て……………」

そう思ってドアノブを引いたが、鍵が掛かっていなかった。

健全な教会なら、夜は鍵を掛けておくもの。なんてったって物騒なこのご時世。施錠も無しに一晩置くとは思えない。

「待つて！」

突然、クダイが俺を制止する。

「なんだよ」

「……………人の気配じゃない気配を感じる」

「……………」

また冗談かと疑ったが、瞬間で終わった。クダイが瞳を閉じて何かを感じてる。というよりも、教会内部を通視してるようにも思える。

「来る！！」

クダイはそう叫ぶと、俺を突き飛ばし、自分も高く跳ね上がった。

「マジかよ……………」

その跳躍力は、人間のものではなかった。

が、それだけを驚いてる場合でもなかった。

教会の扉が吹き飛び、中から得体の知れない物体が出て来て爆

発しやがった。

「くっ……………なんだってんだ」

クダイは多分、教会の中から迎撃体勢を取っていた魔女の気配を感じたのだろうが、俺は身の危険しか感じない。

爆発によって巻き上がった砂埃が収まると、そこにはユラと変わらないくらいの歳の女の子がいた。

「嘘。今のかわしたワケ？」

魔女の登場だ。

「どうやら当たりだったみたいだね」

クダイはクダイで俺の脇に“降りて”来て言った。

……………って、一体どのくらい空中にいたんだ、この男は。

「ふふん。まあいいわ。この“空間搾取”の魔女、レッドスター・アリス様が、お前達をあの世に送っちゃうからね！」

ドロシーのワンピースよりも少し高そうな、赤いワンピース。少し癖のあるブロンドの髪。これまた魔女らしからぬ格好をしている。

「これは随分と口の悪いお嬢さんだ」

そんな少女を、クダイはからかい気味の口調で言つと、

「いいのかい？ 僕が倒しちゃって」

選択を俺に迫って来た。

刻印カルヴを持たないクダイが、どうやって魔女を倒すのか見てみたい気もするが、

「俺がやるよ」

また親父や兄貴に何を言われるか解ったもんじゃない。

アリスだっけ？この魔女も俺がロザリオカルヴァだと知ってるようだし、今夜は確実に仕留めてやろう。

右手の刻印カルヴを出し、戦闘に備えた。

「やっぱりロザリオカルヴァだったのね！ふふん。相手にとって不足はないわ」

アリスはアリスでとくに準備は出来ている。

その足元から、虎猫が現れ、

「頼むから負けんでくれよ。まだ死にたくないからな」

なんと、喋りやがった。まあ、魔女に猫は付き物だから不思議ではないのだろうが……。

「心配しなさんな。チェシャ猫は黙って見てなさあい！」

シンデレラともドロシーとも違う天真爛漫な女の子。戦うには抵抗が伴う。

かと言って、俺自信ケツに火が点いてるのも事実。

クダイを頼るのもなんだし、

「覚悟を決めるか」

悪く思うな。俺にも事情があるんだ。

「ふふん。お前は私に触れることすら出来ないんだから！」

妖かしを狩る力。心のどこかで絶対的な力だと慢心していた。

魔女の力。それは魔法を超えた不可視の存在だと思い知らされることになる。

第十二節 招待

アリスが見せた力。それは、空間を将棋板のように区切り、マスを目を入れ替えるという神業だった。

“空間搾取”とは、狙った部分の空間を搾り取る。そんな意味なのかもしれない。動作がそんな感じだ。

だから、俺がアリスに仕掛けても、寸前で全く違う場所に移動させられている。

「ふふん。どーよ！アリス様の空間搾取の能力は！」

どうって……こんな現象が実際に起きてることが信じられなさすぎて、どうとも言えない。

「なんなんだ……いつの間に違う場所に移されるなんて」

こりゃあ、本気で行かないとやられちゃう。

「迷っても始まらねー。前進あるのみだ！」

何度でも挑戦するしかない。

刻印^{カルグ}に力を込め、後ろめたくはあるが、アリスの顔面目掛けて拳を投げる。

当たれば、そのまま消えてくれるはず。

「うおおおー！ーっ！！！」

「何度やっても見えた結果だというのに」

アリスの足元の猫が皮肉を言った。

黙れ。猫よ。やってみなけりや解らないこともある。

そう意気込むも、次の瞬間にはクダイの真後ろにいた。

加速する拳は、クダイの頭を狙う羽目になったが、クダイは振り向きもせずかわした。おかげで、無様に転ぶ結果となる。

「どわっ！」

「大丈夫かい？手を貸そうか？」

ム力つく野郎だ。

「結構！」

さて、立ち上がったはいいが、どうすべきか。思案をし始めると、

「アロウ。僕がやろう」

クダイがそう言った。

「^{カルヴ}刻印も無いのか？」

「そんなもの、僕には必要ない。僕にはこれがある」

左側の腰の剣を抜き、自慢げに見せてくれた。

「剣なんかで倒せる相手じゃないぜ」

「これはただの剣じゃない」

「フン。伝説の剣なんてほざくんじゃないだろうな」

「この剣はダークスレイヴ。伝説なんて生易しい肩書くらいじゃ満足しないよ。この剣は」

悔しいが、空間搾取を破る術を俺は持たない。

「……………譲るぜ」

「そうさせてもらっよ」

クダイはアリスの前に立つ。

「誰が来たって同じなんだから！」

「アリス。気をつけた方がいい。こやつ、人間の気配じゃない」

チエシヤ猫が注意を促している。

それにしても妙なことを言いやがる。クダイが人間の気配をしてない？そんなわけあるか。妖かしならとくに気付いている。

「空間搾取。面白い魔法だけど、僕には仕組みが解ったよ。悪いけど、一手で終わりさ。お嬢さん」

敢えて構えることもせず、アリスを挑発する。

「仕組みが解ったところで、どうにか出来るもんじゃないから！」

一方で、アリスはチエシヤ猫に言われたのを警戒してか、クダイが仕掛けて来るのを待っている。

「行くよ」

そのクダイは、ダークスレイヴを投げた。風を裂くように飛んで行くダークスレイヴは、明らかにアリスの心臓を狙っていた。

「甘い甘い！とりゃあっ！」

空間搾取。アリスはまたあの仕草をする。ダークスレイヴを搾取して、別の場所に移すつもりなのだろう。それが、突然として俺の目の前だったら……ジ・エンド。

クダイが何かに気付いたようだが、頼むから最悪の結果は避けてくれ。

ところが、そんな俺の不安は裏切られてしまう。

一瞬歪む空間は、アリスが空間を“いじって”いる証拠。同時に、その歪みの中でダークスレイヴは消えた。

「……」

当然ながら、俺は搾取されたダークスレイヴへの警戒をする。
なのにだ、

「勝負あったね」

クダイはさりとて言い切った。

その意味は……

「そ、そそ、そんなあ……」

ダークスレイヴは、アリスの鼻先に宙に浮きながら突き付けられ

ていた。

へたれ込むアリス。チェシャ猫も、猫ながら驚いた表情をしている。

「ど……どうなってんだ……？」

俺も目を丸くせずにはられない。搾取されたダインスレイヴが、
“なぜか”アリスの前にあるからだ。ミスをしたのか？

「なあに、単純なカラクリさ」

得意そうにクダイはジェスチャーを身振り、

「彼女の空間搾取つてのは、あらかじめ自分の周りに搾取する魔法
トラップを仕掛けて、全てのトラップを一気に発動させる。だから、
どこに何が来ても、思惑の場所に移動させられる仕組みになってる
んだ」

「いや、だからってだな、ダインスレイヴは搾取されたはず。な
らなくてアリスの前に？」

「搾取される前に、僕が移動させたのさ。弱点としては、あらかじめ
軌道が予測出来るものでないと成功率が下がるってことかな。つ
いでに言わせてもらつと、空間搾取のトラップを仕掛けているのは
彼女じゃない。“彼”だよ。そうだね？チェシャ猫」

なんて奴だ。ほんの少し見ただけで仕組みを解きやがった。

「一定の範囲をマス目で区切り、それぞれの空間に歪みを作つてお
くのがチェシャ猫の役目。アリスは敵や物体の軌道を読み、トラッ

プを発動させるトリガーにしか過ぎない。ま、こんなところかな」

なるほど。親父が連れて来ただけはある。分析力と閃きに長けているというところか。

「細かいところは違うんだろうけど」

そう付け加えたクダイに、

「何者だ。明らかに人間ではない」

チエシャ猫が言うと、

「僕は人間だよ。ちょっとだけ変わり者なだけの。ね」

そして振り向いて俺を見て、

「トドメは君に任せるよ。このまま魔女を狩るか、生かしておくか」

「なんで俺に委ねるんだ？お前がやるって言ったんだろ。大体、生かしておいてもしょうがねーだろ」

責任を持て。そう言いたげな俺を見透かしたのか、

「狩ればロザリオカルヴァとしての責務は果たされる。だけど、それだけじゃ君は何も知らないままだ」

「何を言いたいんだ？はつきり言えよ！」

「魔女だって生きてるんだ。その命を摘み取るなら、知るべきこと

は知るべきじゃない？」

「いい加減にしろよ？知るべきことってなんだよ！」

クダイの回りくどい言い方に同意出来ず、怒りをあらわにしてしまった。かと言って、クダイが便乗して怒るわけではない。ただ静かにこう言うのだ。

「真神の手駒のままでいいのか？」

と。

その瞬間、言葉の意味を理解した。

要するに、自由欲しさに魔女狩りをすることは、視点を変えれば利用されているだけ。政府と真神との間のやり取りは俺には語られていない。親父が何かを隠してるのは推測出来るが、興味が無かったただけだ。

魔女を生かして得られるもの。それは真実への道。

何も知らず魔女狩りを続ければ、親父や政府の企みに加担することになる。

無論、何かを企んでいればの話だ。

ただ、クダイがそれを教唆するのは、これまたおかしい話ではないか。

「クダイ……………お前、親父の味方じゃないのか？」

「どうしてだい？」

洗練された理想的な肉体には似合わない笑顔で聞き返される。

「俺に真神を裏切れって言ってるんだろ？」

「それは君の解釈次第だよ」

違うのか？真実を知れと言うのは、何も知らなくていいと親父に言われた俺にとっては、最大の裏切り。他の解釈などないのだが……

「話し中失礼するが、我々の異端審問の結論は出たのかね？」

まるで魔女裁判を受けていたかのように、チエシヤ猫は言う。

さながら、クダイが検察官で、俺が裁判官と死刑執行人とを兼任しとると言ったところか。

「さあ、君の判断を聞かせてくれ」

同い年のクダイがやけにエラソーに感じる。

狩るか生かすか。生かしてどうする？逃がしてもまた同じことの繰り返し。
カルヴ

烙印が焼け付くように疼く。狩れと急かすように。

「俺は………」

「その魔女は我々で保護させてもらう」

暗闇から声がし、現れたのは、ボーイッシュな金髪の女と、

「児童虐待で訴えてやろうかしら」

アサキだった。

彼女がいるということは、連れの女はブレイメンなのだろう。

もつとも、連れられてるのはアサキの方だと、立ち位置から推測可能だった。

ささやかな魔女裁判は、乱入者によって無効とされた。だが、俺は心のどこかに安堵を覚えたのは確かだった。

「やれやれ。君が呑気だから邪魔が入ったじゃないか」

吐息を漏らし、クダイはダーインスレイヴを引き寄せ鞘に収める。その“異端児”的な振る舞いに、アサキは驚いてるようだが、連れの女は顔色ひとつ変えなかった。

「あまり人前に出るのは趣味じゃない。僕は先に帰らせてもらっ」

「え？あ、ちよつ、ちよつ、待てよ！クダイ！」

片手を挙げただけで、クダイは俺を残し宣言通り帰路に着いた。

「あんにやるー……………」

人前に出るのに趣味は関係ないだろ。

「どうやら我々の行き先は決まったようだな」

放心状態にあるアリスを連れ逃げることは不可能と悟ったか、チエシヤ猫は一先ず保護してくれると言った、ブレーメンに甘んじる決心をしたらしい。

「真神^{まがみ}呀狼君だよね？」

金髪の女は爽やかに笑み、

「ボクはブレイメンの室長補佐、ジャンヌだ」

挨拶をする。どうせ挨拶するなら、フルネームを聞きたいね。

「俺に何か用かよ」

「ハハ。まあ、そんなにつつけんどんにならないでくれ。ボクらは君と喧嘩をしたいわけじゃないんだから」

知るか。第一印象は最悪と言っておく。なぜなら、一人称を“ボク”、俺を“君”と呼ぶのが、クダイの女版に思えて気持ち悪かったからだ。

アサキがアリスを抱き上げると、チエシャ猫はホツとしたようだ。

「用件なら早くしてくれ。今夜の失態を報告しなけりやならない」

兄貴の小言は、昼間の倍にはなるだろうな。説教が好きな人間だから。

「それなら単刀直入に言おう」

そうしてくれと言ってるんだ。にしても、珍しくアサキが口を開かない。さっきの皮肉が全力投球だとは、明日世界が終わるとしても認められない。つまりは、このジャンヌという女が、ブレイメンでアサキとは掛け離れた地位にいることの証だ。

「真神アロウ君、君をブレイメンに招待したい」

「は？」

おいおい、何の話だ？唐突も加減をしてくれないと困る。

「君のやろうとしてることは、世界を恐怖に陥れることなんだ。知ってるか知らないかは別として……」

ジャンヌは仕切直すように話を中断させてから、

「真実を知りたくないか？」

クダイと同じようなことを言ってきた。

“真実”なんて聞こえがいいだけで、中身は案外、残酷なもの。ろくでもないことに巻き込まれるだけで、知る者をいつも傷付ける。それを理解しながらも、針の付いたエサだと知りながらも、触れずにはいらなかった。

第十三節 有限

よく考えれば、真神^{まこと}と政府が本腰を入れてないにしても、未だ見つけれないでいる組織なんだ。テレビで見るとな“いかにも”なんて組織なわけがなかった。

アサキとジャンヌに着いて行き着いた場所は、街の中心にある寂れた教会だった。

「遠慮はしなくていい。さ、入りたまえ」

立ち止まり呆然とする俺に、ジャンヌは優しく促してくれるが、別に遠慮はしてない。意外な場所に驚いただけだ。

「変態行為はやめてよ」

アサキはアサキで、人を変態呼ばわりするのをやめる気はないらしい。

「るせー」

教会はやっぱ普通の教会だと、俺はそう思ったのだが、ふと立ち止まりぐると中を見回したチエシヤ猫は、

「いいステンドグラスだ。職人の魂が伺える」

感心していた。

「そつなのか？俺にはよくわからないな」

「凡人にはわからないからこそ、魂があるとわかるのだ。誰にでもわかるようなものは、誰にでもそれが可能だということ。永遠に気付かれないかもしれないものに、お前は魂を注げるか？」

猫風情に人のなんたるかを説かれるとはな。

「むしろ魂を注げるくらいの仕事にありつきたいね」

まあいい。とりあえずブレイメンに来てしまったのだ。聞いてやるうじゃないか。真実って奴を。

教会内部を奥へと進み、古い階段を下る。長い廊下を進み、今度は昇る。そして扉を開くと、戦後を臭わすような雰囲気 of 建物内部へ辿り着く。

「やけに古い建物にこだわってるんだな」

「おかげで、誰もブレイメンを見つけれないでいる。まあ、最近やたらと教会が建ってくれたせいでもあるけど」

ジャンヌはにこやかに答えると、行き止まりの部屋の扉をノックした。

「真神^{まがみ}アロウト、魔女を連れて来たよ」

ノックしたわりに親しげに声をかけると、中から「入りたまえ」と男の声がし、促されるままに入った。

ジャンヌが扉を開けると、書斎にあるようなアンティーク調の机があり、そこには髪の高い男が座っていた。

俺もアリスも、そしてチェシヤ猫も、険しい表情の男に警戒心を抱く。

「はじめまして。ブレーメン室長のダンテだ」

無骨に自己紹介をしてくれたが、妙に偉ぶる口調が、更に警戒心を深める。

「一応紹介しようか？ボクの右隣りから、真神^{まがみ}アロウ君、空間搾取の魔女アリス、その使い魔チエシャ猫だ」

ジャンヌが俺にだけ“君付け”するのは、あくまで客として扱われているからだろうか。

「うむ。まずはアリス、君の身の安全は我々ブレーメンが保証する。いろいろ話したいことはあるが、一先ずゆっくり休むといい」

「お前らは魔女を保護するのが目的だそうだが、私もアリスもそれを受けるとは決めていない。全ては交渉次第。そのことは、今の時点で認識して頂きたい」

クダイの一件から元気を無くしたアリスに代わり、チエシャ猫が申し出た。アリスもさすがに死を感じ、怯えているのだ。それでも、

「疲れたから少し休ませて」

アリスはぶっきらぼうに言った。

「了解した。アサキ、部屋を用意してやってくれ」

「……………はい」

ダンテに言われ、アリスとチエシヤ猫を連れ出て行った。そのあまりにスムーズなやり取りに、まずは俺と話したいのだと悟る。

その段階で、好印象は持てなかった。魔女の保護を謳いながら、アリス達に具体的な歓迎ムードを作るでもなく、さっさと片付けるような行為は、仕事と割り切ったことだとしても納得は出来ない。

「ちょっと待てよ。保護するにちやあ、淡泊過ぎやしねーか？チエシヤ猫はあんたらの保護を受ける心構えはあるんだ。もう少し掛ける言葉があるだろ」

「魔女は自分達の使命を知っている。それだけに保護される理由も充分に理解しているのだ。無駄な会話はいらんのだよ」

「上から目線で話をするってなら、帰らせてもらっぜ」

「真実を聞きに来たんじゃないのかね？」

俺を黙らすには充分な一言だった。

しかし、このダンテという男と話してる限り、永久凍土のように互いの心が溶け合うことはない。こんな時、女って人種は必要なのだろう。

「喧嘩をさせる為に引き合わせたわけじゃないよ。少しはボクの立場も考えてはくれないか？」

どちらかと言えば、ダンテに言った言葉なのだろうが。

「……………わかった。君の顔を立てよう」

「そうしてもらえると助かるね」

そしてダンテは、おもむろに話し始めた。

「難しい話は抜きだ。君ら真神まがみの人間は、政府に依頼され魔女狩りを目論んでいる。相違ないかね？」

「……………そうだ。なにもかも話されたわけじゃないから詳しくは知らないけど」

「ふむ。では率直に言った方がいいかな。魔女狩りを続ければ世界が破滅する」

「世界が……………破滅？」

それは率直過ぎやしないか。せめて順序は追うべきだろ。

「ダンテ室長、それじゃあ、あまりに飛躍し過ぎだ」

ジャンヌはいつの間にかソファア―に腰を下ろしていた。

「ジャンヌの言う通りだぜ。もっと説明の仕方ってもんがあるだろ」

「オーケー。ボクが話す」

ジャンヌはそのままダンテの代弁をし始める。

「魔女達は、ある目的があって存在してる。しかし、それは人間社会を無視した行為となる為、特別な力を持つ神父を使い、彼女達の行動を制限させてるんだ」

「……………そりやまた……………」

親父や兄貴から聞いた話と違う。神父は魔女を実体化して、信仰魔女を決める戦いをしてると言った。ところが、それをジャンヌは否定する。

「魔女の目的って？」

「魔女同士殺し合い、それぞれの力を奪い、吸収。完璧な魔女になること。それが目的だ」

「何の為に？」

「来るべき審判の日に備えてだ」

ワケがわかんねー。来るべき審判の日だと？そりや一体いつだ。

「一週間後だ」

ジャンヌと俺の会話に、ダンテが割って入った。

「一週間後？一週間後に何が起きるんだよ？」

「ニュース見てないのかい？」

そしてまたジャンヌの番。

「見てる暇がないだけだよ」

肩をすくめ、なんだかバカにされた気分だったが、話が進まなくな

るのは御免なので、敢えて流すことにした。それを察知したか、ジャンヌは先を話してくれた。

「一週間後、“金環日食”が起こる」

「金環日食？皆既日食とは違うのか？」

そう聞き返すと、ダンテもジャンヌも溜め息を吐く。悪かったな。科学は苦手なんだ。

「金環日食って言うのは、太陽の中心に月が……まあ、家に帰って調べてくれ。ボクは教師じゃないからね」

さじを投げるな。さじを。

「ま、まあいい。で、その金環日食が起こるとどうなるってんだ？そんなのは単なるイベント。よくある天体ショーじゃないか」

「確かにそうさ。でも今回の金環日食は違う」

「何が違うんだ」

「記されているのさ。とある予言書に」

ジャンヌが少し眉を潜めた。

「くだらねー。予言書だあ？そんなもの、当時、社会に不満を持っていた人間が、皮肉を暗号化して書いた代物に過ぎねーよ。今と違って、お上にナメた口ききやあ、すぐに死刑だって有り得た時代だ。それに、予言書なんて腐るほど存在するんだぜ？そして、100%の確

率で誰も解けていない。事後、つじつまが合うように紹介するのがパターンさ。人間が何百、何千年も未来を正確に読めるのなら、戦争なんて起きない世の中になってるさ」

「アロウ。君の言う通りだ。ボクもそう思っていた。でも、生まれてしまった。魔女がね。それすら予言されている書物なんだ」

「なら聞くけどよ、完璧な魔女は、金環日食の日に何をしようってんだ？」

「戦うのさ」

「誰と？」

何人いるか知らない魔女が、同胞の力を我が物にしようと戦う。その努力の末に、更に誰かと戦う？

ジャンヌは口を閉ざし言い淀んだが、

「金環日食によって生まれる最大にして究極の魔女……」

悪寒が走った。こんな滑稽な話にだ。

「ブランシエットだ」

ジャンヌの目が恐かった。それはきっと、真実を告げていて、その魔女の名が呪われているからだ。

親父が魔女狩りを急ぐのも、この為なんだと直感が疼く。

「ブランシエットは世界を破滅に導く魔女。アリス達は完璧な魔女になり、ブランシエットに戦いを挑む」

「勝つたら？アリス達が勝つたらどうなるんだ？」

「世界は救われる。が、それは魔女の世界を構築するということ」

「それじゃあ、勝つても負けても世界は破滅じゃねーか！」

「だからブレイメンが保護するんだ。魔女同士を戦わせるわけにはいかないし、ブランシエツトに挑ませるわけにもいかない」

「ちょっと待て。挑ませるわけにいかないって……戦わなきゃ助かるのか？」

「ブランシエツトが世界を破滅させるには、実体化した魔女を生贄にしなくちゃならない。それを、金環日食が完成した時刻から12時間と書いてある。つまり、12時間魔女を一人でも保護出来れば、人類は助かるんだ」

「正気か？となれば、魔女狩りを行うのはブランシエツトに加担することになるワケか。」

「なら、逆に魔女を根絶やしにしたらどうだ？ブランシエツトに挑む魔女がいなければ、変な儀式も無くなるだろ」

「至極真つ当な意見だと思って発言したが、今度はダンテが否定して来る。」

「金環日食までは、魔女は実体化を続ける。ゼロになることはない」

「だったら一人にしちまえばいい。一人を守るなら簡単だ」

「ブランシエツトがどんな魔女か知らないから言えるのだ。我々の容姿と変わらないかもしれないし、幽霊のような存在かもしれない。あるいは、巨大な化け物かもしれない。一人の魔女を守り通す力が人類になかったら？……… 12時間待たずに破滅する」

「親父や政府は知ってて魔女狩りを？」

「それはわからない。知らずにやってるのか、何か思惑があつてかだが、魔女狩りをするのは極めて危険なことは確かだ」

俺に全てを語らなかつたということは、親父達がこのことを知っている可能性は高い。

「魔女つて何人いるんだよ。保護しなきゃいけないなら、その人数だつてわかつてなきゃ難しいだろ」

「書物によれば、ブランシエツトが必要とする生贄の魔女は6人。となれば、最低6人は存在していることになる」

俺が知る限りは、シンデレラ、ドロシー、アリスの三人。後三人か………。

それと、魔女同士が殺し合うことで数が減り、新たに魔女が生まれては来ないのだろうか？

「金環日食まで、魔女同士を戦わせたら、減った分の魔女はどうなる？」

「それは客人に聞いたほうが早いだろう。何せ、何千年か前にも同じことがあつたはずだからな」

古びた書物より生き証人。ダンテは目の奥を光らせていた。

金環日食の日に生まれる魔女ブランシェット。一体、どんな魔女なんだ……。

第十四節 会話

「どうだった？」

公園で俺を待つてアサキは、この寒い季節にソフトクリームを食べ
ていた。

「ダメだ。何も教えてもらえない」

ブレーメンが話した真実の裏付けがたく、親父にそれとなく聞い
てはみたが、知らなくていいとしか言われなかった。

クダイと兄貴もいなかったし、あまりアサキを待たせて蹴りを
喰らわせられては敵わないと、急ぎ足戻って来た。

「いい加減、信じたら？」

「そう簡単には無理だろ。一週間後に世界が破滅するなんて話」

ブランシェット………どんな魔女なんだ。世界を破滅させる魔女つ
て。少なくとも、アリス達を見る限りは想像に難しい。

「まだ破滅するって決まったわけじゃないわ。ブランシェットから
12時間逃げられれば………」

「そういう話じゃない。有限の時間を与えられて？冗談もいいとこ
ろだ。予言だかなんだか知らないけど、そんなもん信じてるなんて
笑っちゃうぜ。ブレーメンが真実を語ってくれたのだとしても、鵜
呑みにするほど人間出来ちゃいない！後一週間だぞ！？最低六人は
いるだろう魔女を保護して、金環日食の日の12時間を逃げるだな

んで、無茶苦茶じゃないか！」

俺はアサキに当たっていた。突き付けられた真実は、予想を遥かに通り越して不誠実だったからだ。

正直、どうすればいいのかわからない。

「……………時間は無いわ。私達を信じるか、真神を信じるかはあなたが決めること。あなたの結論を待つ余裕はないの」

「……………」

「仮に、あなた達ロザリオカルヴァが魔女を消してしまっても、アリスだけは守り抜くから」

迷っていた。ブレーメンが本当に真実を話したのか？だが、じっくり思考を重ねる時間が無いのも、アサキの言う通り事実だ。

「……………わかったよ。俺としても親父が何も話してくれない以上、百パーセント信用出来ないし、まずは魔女を保護することに協力する。そうじゃないと先が見えないからな」

一週間先に行くまでに、道が見えないんじゃ、打つ手も無いしな。

「そうと決まれば、行くぞ！」

「え？どこに？」

「デパートだよ」

アサキはよく意味を理解していないようだが、

「シンデレラがバイトしてただろ」

あつ。と、閃いたような顔をして、

「でも、もういないかも」

「そんなの、行かなきゃわかんねーだろ」

強引にアサキの手を引き、走り出す。アサキは後わずかなソフトクリームを落としていたが、気にもせずシンデレラがバイトをしてたデパートを目指す。

俺とアサキの運命は、もうこの時に決まっていたのかもしれない。

「またあの試練が訪れるのか」

チエシャ猫は嘆いた。かつての過去では、なんとか難を逃れはしたが、今回もそうとは約束されてるわけではない。

「それが役目だろう。我々の」

ダンテは普段よりリラックスした様子で言った。まるで、古い友人とでも話すかのように。

「三千年前は、運がよかった。大きな災害もあり、ブランシェットも思っようには行動出来なかっただろっしな」

チェシヤ猫は当時を思い浮かべ、深い溜め息をつく。

「逃げ切れば、次の三千年後にまた生まれて来れる。深い眠りの後にな」

「生まれて来る度に試練があるのなら、いつそ、挑もうとは思わないのか？」

ダンテは、チェシヤ猫がその気なら、挑むことも運命だと思っている。

「同胞を殺してまで、挑もうとは思わんよ。私はアリスが好きだ。ならば、生まれて来る度、試練が待っていようとも、その時間だけは楽しませてやりたい」

「親心か」

「それはお前とて同じであろう？ダンテ……いや、グリムよ」

ダンテは苦笑いをするだけだった。

「しかし、いずれは決着もつけねばなるまい」

話を変えるように、チェシヤ猫は前足をペロツと舐めながら言い、

「三千年ごと、生きてせいぜい二週間。永遠に繰り返すのは御免だ」
付け加えた。

「同胞は殺さないんじゃないのか？」

「他の方法がきつとある」

「………… ロザリオカルヴァ。利用価値はあると思うかね？チエシヤ猫」

ダンテの問いにチエシヤ猫は反応をどうすべきか考え込んでいたが、

「皆が丸く収まる結果など、所詮は夢物語の中だ」

犠牲は付き物。自分達の望みを叶えたいのであれば、誰かにツケを回さなくてはならない。

神格化したような猫は、幸せは誰かの不幸せの上にあるのだと、
そう言いたげだった。

第十五節 墮天

アサキと俺は、一番手っ取り早く“保護”出来そうな魔女を捜しにやって来た。

「さあて、どこにいるやら」

嗅覚を時給700円程度で働かせ、俺はシンデレラを求める。

「そんなことしなくても、ビルサービス会社に電話すればすぐじゃない」

と、出鼻をくじくアサキ。

「そりゃまあ……そうだけど」

フロア案内板の隅っこには、ビルサービス会社の社名と、電話番号がある。住所も。

「でもせっかく来たんだ。一通り見て回ろうぜ」

そう言うと、アサキはただでさえぶっきらぼうな顔を、怪訝な顔にして指差す。

「あん？なんだよ？」

「あれ……」

顔に似合わずしなやかなアサキの指に導かれると、その先には、

「……………いやがった」

モップを先頭に行き来してる金髪の清掃員を見る。その姿は、清掃
と言っよりも、右往左往してるようにしか見えない。

「手間、掛ける必要もなかったみたいね」

「ふう。仕事熱心なのは、褒めてやるべきか」

肩透かしを喰らったが、まあいいさ。

「行こう」

「変態行為したら殺すから」

……………。

他にセリフはないのか。

言ったところで喧嘩になるだけ。言い返さずにアサキに続いて
シンデレラのところへ行く。

「こんにちは」

そう話し掛けたのはアサキだ。自然な笑顔を初めて見た……………が、
どこか儀礼的に思えるのは、先入観からだろうか。

「あつ、こん……………にち……………わあっ!？」

驚くな。気持ちは解るが。

腰を抜かすシンデレラは、俺にもアサキにも怯えていた。

無理もない。俺はロザリオカルヴァだし、アサキはシンデレラからすれば……………未知の存在ってところか。

「わわわわ、私に何か用事でも!？」

「落ち着けよ」

混乱するシンデレラに触れようとすると、

「触らないで下さいましっ！」

「いや……………あのさ……………」

「誰か!人殺しですわっ!ああ……………っ!助けて下さいましっ!!うつら若き乙女の危機でございますわっ!」

「騒ぐなって!そんなんじゃないから!」

二十一年の人生の中で、これでもかというくらい説得するが、一向におとなしくしてくれないシンデレラに、なんと、こともあるうにアサキのヤツは、彼女の腹部に蹴りを入れやがった。

「ぶふう……………っ!」

妙ちくりんな呻き声を上げ、シンデレラは撃沈した。

「ア、アサキ!」

「……………ったく、うるさいっつーの!」

神様。この女に悪気はないんだ。悪いとしたら、足癖悪く生まれることを許したあんただ。

先は短いのに、前途多難に思いやられそうだった。

人は、地上を支配することに成功した。きっとそれは、どの世界へ行っても同じなのだろう。

あたかも自分達が神であるかのように王道闊歩するその存在は、ひとたび天変地異に苛まれると、手の平を返したように天に祈るのだ。

だから、普段の生活の中での祈りなど、なんと浅く小さな行為なのか。

パイプオルガンが厳正さを演出する教会で、クダイは信者達を冷めた目で眺めていた。

（人が繁栄したのは祈らなかったからだ。……………本当にそうなのかい？）

記憶の中だけで生きる知り合いに、軽くひねて見た。

祈らず、ただ未来だけを見て生きていたのなら、祈りを重んじる今は、もう繁栄の限界に到達しているのかもしれない。

「……………茶番だよ」

人々の祈りを嘲笑い、クダイは教会を立ち去る。

「あつ、すまない」

振り向き様に肩がぶつかり、咄嗟に謝る。

「……………気にするな」

ロングコートを纏い、フードで顔を隠す男はそう言った。

そう言われたので、そのまま去ろうとした時、ロングコートの男が囁いた。

「クク……………人とは愚かだな」

「……………?」

それは明らかにクダイに話し掛けていた。

「一体、何に祈りを捧げるのか」

「神様じゃないのか」

「フツ。神ほど人の命を軽んじる者はいない。最初から見捨てられてるとも知らず、惨めな光景だな。教会というところは」

嫌な臭いがした。クダイの本能が覚醒する。

「でも、人に祈りは必要だ」

そう反論するクダイの目つきは、鋭く、野生の獣のように変容した。

「クックツ。祈って都合よく事が転ぶなら、それこそ神もそうするだろう」

その背中を少しの間見つめていたが、

「救いようのない者もいるのさ」

そう吐いて、クダイは踵を返し教会を後にした。

「……………よくわかってるじゃないか」

ロングコートの男は、フードをサツと外した。

そこには、深い青の髪。前髪の奥、眉間には一筋の傷があった。

「人に祈りは必要？……………クク。人に祈りなど必要ない」

悪意に満ちた眼光が、祈りを捧げる人々を捕らえる。

「必要なのは、自分達の愚かさを悟る時間だけだ」

そして、ニヤリとほくそ笑み、

「ま、百万年あっても無理な話だろうがな」

ステンドグラスの神と天使を嘲笑った。

第十六節 戦士

ようやく落ち着きを取り戻した時には、既に夕暮れ時だった。

「話はわかりましたわ」

さっきまで取り乱してたシンデレラは、一転、偉そうだった。

時刻は18時。シンデレラは清掃員の姿から、初めて会った時と同じドレスを纏っていた。

なんでも、彼女が魔女として力を発揮出来るのは、24時間のうち、18時から24時の5時間だけらしい。

確か、“時間制限の魔女”とは名乗っていたが、そういう意味なのか？

「違います！」

話を逸らした怒りとは別の怒りをぶつけられた。

「わたくしの力は……」

「まあまあ。その話はまた後でいいじゃないか。それより、保護を受けてくれるのかい？」

実にさりげなくジャンヌが話を戻した。こういうところを見ていると、ジャンヌは聡明な女なのだと思う。

アサキとは雲泥の差だ。

「そうですね。どうしてもと、そちらさんがおっしゃるのであれば、考えてみなくもありませんけど」

素直じゃないのか、プライドが高いのか。

「じゃあ決まりだね。一応、紹介するよ。ボクはジャンヌ。そして彼がアロウ。ロザリオカルヴァだ。そして、君を蹴った彼女が、アサキだ。あと、ブレイメン室長」

「ダンテだ。よろしく」

とくにリアクションをしなかった俺とアサキとは対称的に、ダンテはにこりと笑顔まで見せ、挨拶をした。

シンデレラも改めて挨拶を済ませると、「タタタタッ」と、廊下を駆けて来る足音が聞こえた。

その足音が止まずして、勢いよく扉が開いた。

「ふふん。久しぶりの久しぶりい〜〜！」

アリスだった。

「おやまあ。ロケット女ではありませんこと！」

「ロケット女？」

アリスをそう呼んだシンデレラに、俺は聞いた。

「ええ。いつも勢いだけで、終着点のない人ですから」

「うぬぬ……………それが久しぶりに会った同胞への挨拶か！この、五時間労働女！」

「し、失礼ね！わたくしは、朝8時から夕方5時の、9時間拘束、8時間労働をしますわ！おたくと違いまして、しっかりと働いてますの！」

「ふふん。働かずにいられない、就労中毒者のくせに！」

「ぐぎぎぎぎ……なにゆえ！なにゆえに働きもせずのうのと生きる小娘ごときに好き勝手言われなければなりませんの！」

「……………何が始まったんだ。これは喧嘩か？それとも、これが魔女同士之争いか？」

「ああ……………わたくしはいつもなじられてばかり！悔しいったらありやしない！」

「いつだって、勝つのはこのアリス様よ！」

その戦いに勝利したアリスは、やはり「ふふん」と鼻を鳴らすのであった。

「なんなんだ、一体……………」

「三千年ぶりの再会だ。はしゃぐのも無理はない」

「チエシャ猫」

いつの間にか、チエシャ猫がダンテの机にのさばっていた。

おい、俺は今お前が言ったことを聞き逃さなかったぞ。

「なんだよ、三千年ぶりの再会って」

アリスとシンデレラは、まだ一悶着している。

「来い。ここでは騒がし過ぎて敵わん」

年寄りじみたことを言い、机から飛び降りつつかと部屋を出て行く。

「行こう。彼は君を仲間と認めたらしい」

ダンテはジャンヌになにやらアイコンタクトし、チェシャ猫の後を追う。

「……………何が仲間だよ」

俺も、猫談議に招待された以上、行かないわけにはいかなかった。

この街に、異常とも思えるくらい教会が増えた。しかし、魔女を捜すには逆に都合がよさそうだ。

人の集まる教会。そうでない教会。はっきりと別れており、そうでない教会は、片手ほどもないからだ。

クダイは一仕事を終え、街の名物の古墳の上にいた。

「必要のない祈りをする種族……か」

そして、教会で会ったロングコートの男を思い出していた。

「……あいつ、人間じゃない。……何者なんだ？」

久々に胸が高揚している。危ない兆候だ。

昔はこうじゃなかった。戦いを目の前にしても、それを楽しむようなことは決してなかった。

なのに、癖の悪そうな輩を前に、求めている。血に濡れる戦いを。

「今の僕を見たら、みんな何て言うだろうな」

失った時間に置き去りにしたままの仲間を想い、懺悔をしなければならぬのは自分なのだと言ふ。

だからと言って、“人”には戻れない。

「……どっちにしろ、やるべきことをやるだけだ。例え、この世界を壊すことになってもね」

二本な剣を抜き、地面に突き立てる。

一本は気高いほどまがましいダインスレイヴ。

もう一本は黄金に輝く刃の剣。

そして、冬間近の空にしては青々とした空間を見つめ呟く。

「……僕は祈らない。望むものは、全て力で手に入れる！」

この世界に、人の域を出ることが出来た、奇跡の戦士がいた。

第十七節 悪意

「……………」

何て言えばいいのか、俺は悩んだ。

こともあろうに魔女達は、三千年毎に金環日食のおよそ二週間を生きるのだと言う。そして、ブランシェットから難を逃れて、次ぎの三千年後の金環日食まで眠るのだと。

「……………じゃあ、ブランシェットと戦ったことはないのか？」

喋る猫様に尋ねてみる。

「無いわけではない。ブランシェットは6人の魔女を生贄にしなれば、自らの目的を果たせない。今までは、ブランシェットが地上に現れてからの12時間の間に、それが出来なかったただけだ」

引き分けて考えればいいのか？

「第三者から見ればそうかもしれん」

ダンテは不意に発言をし、しかし悔しそうに、

「だが、それではなんにもならんだ」

三十代半ばの男の、その厳しさの理由を垣間見た気がしたが、なぜこの男が“そう”言えるのか、不思議だった。

「世界を救う為、力を貸してくれんか？」

チエシヤ猫は、傍目はその愛らしい小首をもたれた。

「で、でもよ、俺の力は妖かしを消し去るだけの力だ。魔女を狩るのならまだしも、保護するだけなら特に役に立てることはないと思うぜ」

「そんなことはない。当面は魔女の保護でいい。頼む。力を貸してくれ」

当面って………後一週間だろうが。

そんなことより、さて、どうしたものか。正直、まだコイツらから胡散臭さを感じないわけじゃあない。それに、ブレーメンに手を貸せば、間違いなく親父と兄貴は俺を許しはしないだろう。まして、広く深く、権力のある家だ。この世で唯一人、孤独で生涯を生きたらなくなるだろう。早い話、世界から無視されるわけだ。

そんな苦痛を、ブレーメンの話を鵜呑みにして強いられるのは真つ平だ。もちろん、戯言だったらの話だが。

だから、すぐに答えることなんて出来なかった。

俺は平穩に毎日を過ごせればそれでいいんだ。その為には、真神の人間であることは切り捨てたい。親父達に背いて、縁を切るチャンスを手振りに振りたくないんだ。

「“三人”とも、魔女の情報が入ったわよ」

そこへ、アサキがやって来た。

なんてナイスなタイミングだ。チエシヤ猫と同類に見られたのはなんだが、今は許そう。せめて一年の猶予があるなら、答えることも躊躇わずに済むのだろうけどな。

「四人目か？」

ダンテが聞くと、アサキは頷いた。

「よしっ！なら一先ずは魔女の保護に行ってくらあ」

これみよがしに言った俺は、威勢で自分の心をごまかした。

「車、貸してくれ。いいだろ？」

早くこの場を離れたかった俺は、わかりやすい態度だったかもしれない。

ダンテはポケットからキーを取り出し、放り投げた。

「真神^{きみ}んちの車には勝てないが、一応、外車だ。ぶつけないでくれよ」

ダンテも一先ずは俺に猶予をくれるらしい。

「そんなときは真神に代替え品もらったら？」

アサキはさざりと言った。

「じゃ、行いっぜ」

その俺の背中に、

「アロウ」

チエシャ猫は声を掛けた。

「ブランシェットは待つてはくれんぞ」

猫よ。俺はまだ心を決めてない。忘れるな。

「はいよ」

適当な返事をした俺だが、まだ何も始まっていないことに気づいていなかった。

「いいのかい？アロウを誘わなくて」

クダイはセツハに言った。でも、答えは解っている。聞くまでもなかったのだが、軽くコミュニケーションを取っておいた方がいいと思います、口にただけだ。

「何度掛けても圏外だ。構わん。駄目弟などいなくとも、私が魔女を狩る！」

「兄弟なのに仲悪いんだね」

「フン！兄弟だから仲良しとは限らん」

「……………」もつとも。でもさ、僕は一人っ子だから羨ましいよ。兄弟喧嘩さえもね」

くだらんとでも言いたげに、セツハは無言で先に行く。

「……………フッ」

クダイは、じつとセツハの背中を見つめて、

「きつと、何か始まるよ。そのうちね」

微笑を浮かべた。

「この不調和の正体はなんだ……………？」

ロングコートの男は、肌で感じる違和感にある種の錯覚を見る。

世界でありながら世界ではなく、街でありながら街ではない感覚。

見渡しても、そこはありふれた街並。しかし、確実に誰かの意志が紛れ込む街。

「…………汚れた存在が居るな」

通り過ぎてもよかった街だ。他にやることがある。

だが、興味をそそられた。

彼もまた、クダイ同様に戦いを求めている者。興味がそそられれば、気持ちに嘘をつけない。

「この世界では、一体何が真実なのか……………ククク。見せてもらおうか」

男の前では、全ての悪意が平伏す。

第十八節 旅人

アサキを連れ、俺は情報通りの教会へ向かった。

そこは、こじんまりとした教会ではなく、広い庭園があり、高さもある豪華な教会だった。

その庭園を“汚す”ように無造作に停車された高級外車。兄貴のだ。

「信じられない止め方するのね」

身内の恥に、恥ずかしくなる。

アサキはこれが兄貴の車だと知ってるようだ。

夜更けに教会に来る輩は、ブレイメンが真神かしかない。それに、何度か接触してるからわかっていても不思議ではない。

「兄貴は昔からわがままなのさ」

自分が絶対だと思っている。無論、親父は別としてだ。

そんなだから、俺は兄貴が好きじゃない。金持ちの長男って、みんなわがままなのかね。

「それよりも、どうするよ？正面から行けば兄貴に会うぞ？」

「だから？別にいいんじゃない？……あつ、あんたは都合悪いんだっけ？」

ああ、悪いね。まだブレイメンに入るとは決めてないし、出来れば兄貴とは会いたくない。

「でも私には関係ないしね。正面からでしょ」

この女……忘れてた。こういう女だ。

「何してるの？早く来なさい」

俺は犬か。

「おい、アサキ！待てよ！」

一人、先に行くアサキに声を掛け終えたと同時にくだった。教会の窓ガラスやステンドグラスから、まばゆい閃光が洩れ、爆発音が鳴り響いた。

「キャツ！」

女子高生らしい悲鳴を上げたアサキは、衝撃で軽く尻餅を着く。

あと十歩ほど前だったら、綺麗な顔立ちがメタメタになってたかもしれない。

「大丈夫か！」

「え、ええ。大丈夫」

アサキを立たせ、俺は教会を見た。

魔女か兄貴か。どちらかが攻撃したのは間違いない。

爆煙が立ち込め、視界が満足でない。しばらく捕獲された獣のように動かずいると、

「アロウか？」

兄貴が現れた。

「兄貴……………」

まさか……………魔女を消したのか？

「遅かったね。……………おや？その娘は確か……………」

のうのうと、クダイも居た。

「どういうことだアロウ！？その女はブレイメンの女じゃないかって！なぜ、お前が一緒にいる！？」

さあて、何て返答すればいいかね。

もっとも、兄貴が納得する返答は用意してないけど。

「アロウは私達の仲間になったのよ！」

なっ……………なんで俺より先に返答するんだよ。それに、そんなこと言ったら……………」

「……………なるほど。思いついたものだな、アロウ。馬鹿な選択だとは思うが、真神の厄介者であるお前が敵に回るのは、私としては願ってもないこと。始末しても問題なくなったわけだ」

「待ってくれよ！兄貴！話を聞いてくれ！」

「聞く耳持たんな。フツ。若い女に毒されるようでは、魔女狩りなど出来んワケだ。腑抜けめ！」

「んなわけねーだろ！話を聞けよ！」

「黙れッ！ちようどいい。魔女を始末したついでだ、クダイ、この腑抜けも始末してくれ」

「なんだって……………！！」

兄貴を覆い隠すように、クダイが立ちはだかる。

「退け！俺は兄貴に話があるんだ！」

「アロウ。僕は佐一郎氏から頼まれてここにいる。ならば、佐一郎氏の敵に回った君にお伺いを立てる必要はないわけだ」

しれっと、何を吐かしやがる。

「クダイ、刻印は人間に危害を加えることも可能だ。……………ケガするぜ？」

「アハハ！いいね！ちようど体力を持て余してたんだ。相手になるよ」

左側の鞘からダインスレイヴを抜く。

「クダイッ！」

「いいじゃないか。魔女だかなんだか知らないけど、女の子のお尻ばっか追いかけてもつまらないしね」

コイツ……本気だ。本気で俺を殺すつもりだ。

こんなところで覚悟を決めなきゃならないのかよ。

「アロウ………」

クダイの殺気を気取ったのか、アサキが不安を見せる。

「……逃げ道はない。……やるしかないんだ！」

刻印^{カルダ}だけでどこまで出来るかはわからないが、逃がしてくれそうに
もない。

「いい覚悟だ。まるで………かつての僕を見てるようだ」

「お前の過去なんて知らねーよ！」

殺気が留まることなく押し寄せる。冷や汗がシャツに滲み、俺に警告する。万が一にも、勝てる夢を見るなど。

「早くやれ！クダイ！」

兄貴がヒステリックに命令を下すと、

「わかったよ」

ジリッと踏ん張りを利かせ、刹那、クダイが掛かって来た。

それは人間な目で追えるものではなかっただろう。

わけのわからないうちに、すぐ目の前まで来ていた………だが、
金属同士が衝突する音がし、俺の視界には知らない背中があった。

「お前は……………」

そう呟いたのは俺ではない。クダイだ。

「ククク。面白そうなことをしてるじゃないか」

背中の主は、ロングコートを着てフードを被っているが、どうやら顔見知りらしい。

「……………ただ者じゃないとは思ってたけど、やっぱり人間でもなかったか」

なんだなんだ、コイツも妖かしか何かか？クダイがそう言った真意はさておき、ロングコートの男は太い刃の剣でダーインスレイヴに對抗していた。

「ほう。俺が人間じゃないと、どうして言えるんだ？」

「気配が違う。わかるんだ。そして、この世界の住人でもない」

「こいつは驚いた。そこまで解るのか……………フツ。たまには寄り道もしてみるものだ。意外な発見もある」

ロングコートの男がクダイを押し戻すと、クダイはスウェイバックで距離を取った。

クダイは表情を“真面目”にし、

「何者だよ……………お前」

付き合いは至って浅いが、俺に見せるクダイの声でもなかった。

きつと、それがクダイの本性なのだろう。

暗いと言うか、闇を纏ったような………それこそ、人間のものと違う雰囲気だ。

「答える。何者だ」

「ククク。答える義務があるのか？」

一方で、ロングコートの男はクダイをからかつてるようにも見える。いや、からかっている。

「言いたくなくや言わなくてもいい。けど………」

そう言うと、電光石火のごとくダインスレイヴを振り抜き、風圧で男のロングコートを粉々にする。

とてもじゃないが、人間技じゃない。

ようやく顔を見せた男は、暗闇に飛ぶわずかな明かりでも解るくらいに、青い髪をして鏡のように光る銀色の鎧を纏っていた。

「この世界から退場してもらう！」

「………俺を邪魔者扱いするってことは、貴様もこの世界の住人じゃないのか。クク………まあ、それこそ気配で解るが」

「余計なことは言わなくていい！聞かれたことだけに答えるんだッ！」

そこはクダイと男の独壇場。俺やアサキ、兄貴が入り込む余地はない。

「……………よかるう。しばらく厄介になる世界だ。名前くらい知っておいてもらわんとな」

「名前を聞きたいワケじゃない！何者か聞きたいだけだ！」

「フツ。感情的な男だな。俺のよく知る男に似ている」

そして、男は顎を上げ、

「俺の名はサマエル。時空間を旅する者だ」

名乗り、

「貴様も同じだろう？」

クダイに聞き返す。その当人は、

「……………さあ？どうだろうねえ。……………でもこれだけは言える。僕に期待をしないことだ。そう、都合のいいことも悪いことも。僕は……………」

卑しく、にやける。

「人の領域を超えた者だからね」

後に俺は知ることになる。その言葉の意味を、この世界の真実と共に。

そして、可能ならば、返して欲しいと。
神様ってヤツに捧げた祈りをな。

第十九節 理由

「ちょっと待てよ！二人で勝手に盛り上がるなよ！」

クダイとサマエル。俺達の存在を無視したやり取りに、俺は業を煮やした。

「サマエルとか言ったな！勝手に割り込んで来て、勝手にクダイとやり取りをするんじゃないー！」

「クク。そいつは悪かった。だが、命は救われただろう？」

「この野郎……」

「そう恐い顔をするな。あのクダイという男、お前が太刀打ち出来る相手ではない」

サマエルはそう言つて、クダイの相手を譲ろうとはしない。俺にしてみれば助かるんだが、そこは男。プライドがある。

「だからって、はいそうですか？と思つてんのか？」

「……………言わないのか？」

「デメエ……………！」

思わず殴り掛かった俺の拳を受け止める。力には自信があつたのに、拳を押し返すことが出来なかった。

「セツハ。今夜は退こう」

すると、おもむろにクダイは兄貴に言う。

「なんだと？私はアロウを始末しろと命令したはずだ」

「でも、邪魔者が入ったし、とりあえず魔女を一人狩ったことの報告をした方がいい。アロウのこともね」

煮え切らない様子だったが、やがて兄貴はクダイの提案に頷き、

「いいだろう」

納得した。

「サマエルだっけ？今夜の続きはまた今度だ」

クダイはダーインスレイヴを鞘に収めた。

「ククク。楽しみはとっておくものだからな」

サマエルもまた、剣を鞘に戻す。

「アロウ。覚悟しろ。真神を裏切った報いは、身を持って処理してもらう」

そして兄貴は、クダイを連れ、車に乗り込み教会を去った。

残された俺達の問題は、

「クソツ！兄貴に先を越されるなんて！」

魔女を狩られてしまったことだ。

「私達も一旦、ブレーメンに戻りましょ。ダンテとジャンヌに報告しないと」

「ああ。わかってる」

それに、ただ帰るわけにもいかない。

「俺も貴様らに着いて行こう」

そうだ、サマエルがまだいる。

それも、勝手に着いて来ると決めてな。

「お前なあ、」

「何を争ってるかは知らんが、力にはなれるはずだ」

クダイのことを言ってるんだろう。確かに、クダイがこのまま敵でいるなら、俺では太刀打ち出来ない。シンデレラやアリスだって無理だろう。当然アサキもだ。

だが、力になるうつつでツラじゃない。おそらく、クダイと剣を交えたただけだろう。何の意図があるかは知らないが。

サマエルを連れて行くかは俺に選択権はない。この場のなら、それはアサキにある。

「どうする？アサキ」

「……………信用は出来ないけど、彼の力は頼れるわ。本人から申し出

てるんだし、とりあえず連れて行きましょ」

アサキの承諾を得て、

「クク……まあ、期待には応えてやろう」

サマエルは満足そうだった。

ただ、魔女が一人消された事実。それが果たしてどう転がるか、それだけが気になっていた。

「そうか。アロウがブレーメンに」

佐一郎は、セツハの報告を淡々と耳にしていた。

まるで、予測していたように。

「どうします、父さん？」

「……ふむ。しばらく放っておけ」

「な……なぜです！？放っておける状況じゃないでしょう!？」

到底、納得出来ることではない。

「父さん。なぜブレイメンを探さないのです？その気になればすぐに見つけられるはずですよ！この際、ブレイメンも一気に潰した方が……！」

「いつでも潰せるから潰さんのだ」

「父さん！」

「セツハ。お前はこれまで通り、魔女狩りを続ければいい。わかったな」

口調も表情も穏やかではあるが、有無を言わさぬ威圧感があった。

「……………わかりました。ですが、これだけは申し上げておきます。アロウが私の前に敵として現れるならば、私はアロウに生きる道を与えません」

それが真神家の掟だ。

「……………好きにするといい」

その言葉を聞き、セツハは部屋を出た。

「自分の弟を平気で殺せるのかい？」

庭の池を渡る小さくも立派な橋の上で、クダイは鯉にエサをやりながらセツハに聞いた。

その質問は、アロウにもしたものだし、二人のことは安易に見抜ける。だから答えはわかっている。

しかし、セツハはすんなりとは答えなかった。

「……………それもまた宿命というヤツだ。血を分けた兄弟故の」

「わからないな。そうまでして従わなきゃいけないものなのか？ 家柄って」

「……………そう教え込まれて来たからな。それが当たり前だと思ってしまっただ」

「思ってしまうってことは、本当は間違いだって気づいてるってことか」

「……………。」

「……………僕にも兄と呼べる人がいた。血は繋がってなかったけど、確かに兄と呼ぶに相応しい人だった。一見、無愛想で冷たい印象を受けるけど、すごく面倒見のいい男だった」

「……………過去形で話すとこを見ると、亡くなったのか？」

「ああ。僕を生かす為にね」

クダイは、空になったエサ袋をギュツと握り締め、

「もし時間を戻せるなら、次ぎは彼を死なせたりしない。それに、他の仲間達も。今の僕なら、それが可能だから」

それは叶わぬ夢への懺悔にしては、どこか現実味のある言葉で、クダイという人物の全てのようにも思えた。

「……………死んだ人間は生き返らない。それが摂理というものだ。だが、奇跡が起き、可能であるならば、私は母親というものに会いたい」

「そういえばセツハのお袋さんって、亡くなって大分経つんだってね。佐一郎氏から聞いたよ」

「アロウを産んですぐだそうだ。私にはその当時の記憶がない。ちよつとした事故で、幼い頃の記憶が抜けてるんだ」

「そっか。それは悪いことを聞いたね」

「いや。構わない。久々に母親に会ってみたいなどと淡い想いを抱けた。……………毎日、忙しいと、忘れてしまう。私も所詮、人の子なのだ」

「人の子……………か」

「そういえばクダイ、お前、人の領域を超えたとか言ってたな？あれはどういう意味だ？」

「……………気にしないでいいよ。売り言葉に買い言葉だし」

「フツ。そうは見えなかったが……………ま、いいだろう。人には事情がある。望んだ事情もあれば、望まぬ事情もあるだろう。聞くだけ野暮だな」

そう言うと、セツハは背伸びをした。きっと、アロウや佐一郎の前では見せない姿。息を抜けた感じで、昨夜の疲れを見せない。

「今夜も出掛ける。昼間のうちに少しでも寝ておけ。また、アロウ達が現れるかもしれんからな」

去って行くセツハを一度も視界に入れず、

「……………みんな、僕は本当に正しようとしてるんだろうか……………」

失ったものを取り戻したい。その為の犠牲なら、神の命さえ手に入れて来よう。望むものは、全て力で手に入れよう。そう決意したばかりなのに、クダイの心に陽の当たらない場所がある。

人であるが故に苦しむ理由があるのなら、人であり続けなければならぬ理由はない。

- 会いたい人達がいる -

それだけがクダイが苦しむ理由。

なのに、人であることを拒んだ青年は、人であることを捨てねばならない理由だけが見つからないでいた。

金環日食まで、あと六日。

第二十節 悪魔

とりあえずブレイメンに戻った俺達は、みんなにサマエルのことと、魔女が一人消されたことを報告した。

意外にも、サマエルのことはすんなり受け入れてくれ、組織と呼ぶには小さいが、ブレイメンにいることを快諾してくれた。

が、魔女が一人消された事実は、頭を悩ませる種となったようだ。

「グリーンハーブ………リジイか」

それが被害にあった魔女の名前らしい。ダンテは額に手を当て、考え込んでいる。

「二人は保護してるからいいけど、残るはあと三人か」

ジャンヌが珍しく険しい表情を見せる。

「そっぴゃ、ドロシーはどこへ行ったんだ？あれ以来顔を見せない。」

「リジイがやられるなんて………」

シンデレラはショックからか、少し顔が青ざめてる気がする。

「チェシャ猫、他の魔女も早く保護してあげようよ」

アリスの提案に、チェシャ猫は、

「うむ。こうして悩む時間は私達にはない。一秒でも早く他の魔女

を探さねばならないぞ、ダンテ」

「わかつている」

重い空気の中、サマエルだけが“普通”だ。

「クク………魔女か」

「何がおかしいの!？」

アサキが突っ掛かる。

「わずかな日数で、世界を救う準備と手立てを用意しなければならんとはな。ご苦労なことだ」

「バカにしてるわけ!？ 私達は真剣なのよ!」

「そうではない。俺は様々な世界を傍観して来たが、短期間でケリを着けなければ破滅する世界というのは初めてなんだ。………悪気はない」

コイツ、そのうちアサキに蹴られるぞ。

とは言え、アサキの機嫌が斜めを向いたのは間違いなく、

「アロウ。すまないがサマエルと席を外してくれ。ああ、君らの部屋はシンデレラとアリスに用意させる。それまでその辺で時間を潰してってくれると助かる」

ジャンヌが言いたいののは、アサキへの配慮と、ダンテ達と打ち合わせをするからということなのだろう。

「だよ。少し外そうぜ、サマエル」

「……………」

これまでの経緯を説明してやろうと、ブレーメンの窓口にもなってる教会へ向かった。

「随分と矛盾した話だ」

丁寧に説明してやったつもりだが、サマエルから返って来た言葉は、否定的なものだった。

「何が矛盾なんだ」

そもそも、サマエルの態度はデカイ。我が物顔とはコイツのことで、出会って数時間とは思えないくらいに横柄だ。

「クダイや貴様の兄貴は魔女狩りをしてるのだろう？だが、魔女はその人数がゼロになることはないと言った。ならば、クダイ達の上のことは意味のないことになる」

「そりゃそうだが、もしかしたら俺達の知らない何かがあるんだろ」

「クク……………本当にそうか？」

「何？」

「よく考える。ブランシエットは魔女を生け贄にすることで世界を破滅させると言う。その魔女を保護し、金環日食から12時間を逃げ、難を逃れる。そうすれば、魔女は再び三千年の眠りに就く。こんな馬鹿な話があるか」

「……………なんでだよ。どこもおかしくないだろ」

「ならば、魔女は何の為に眠りから覚めるのだ？目的があるからだろう？ブランシエットを倒し、魔女だけの世界の創造をすると」

人から得た知識を、あたかも自分が最初に会得したように喋るな。

「だけど、チエシャ猫達はブランシエットと戦う気はないみたいだぜ」

「眠りを選ぶと？」

「仲間同士の殺し合いを避けたいんだろ。そんなこと言ってたっけ」

「……………それを鵜呑みにしてるのか？」

「……………俺にはお前が、何が言いたいのかわからんね」

「ブレーメンの奴らが真実を語っていると断言出来るか？」

……… どういう意味で言ってた？ チェシヤ猫達が嘘をついてると？ ぶざけんな。 お前に何がわかる。

「断言出来ないのなら、疑ってかかるべきだ」

「ご忠告ありがとうございます。 悪いが、お前の言いたいことがさっぱりわからん」

「クツクツ。 教えてやろう。 真実とは角度を変えて見ると、全く違う一面を見せることがある。 結局貴様は、聞いたことだけで事を判断してるようだが、奴らを信用するに値する情報ではないだろう？」

「みんなが嘘を言ってるって言いたいのか？」

「魔女が目的を蔑ろにして、人間に従う理由は存在しないんじゃないかと言ってるんだ」

「いや、だからだな、ブランシエツトに挑む気が………」

「三千年経てば、また同じことを繰り返すのにか？」

「んなこと、俺が知るかよ。 本人達がそれでいいなら、何も問題ないだろ」

「貴様は無知だからそんなことが言えるのだ」

「なんだとっ？！」

「魔女達が何か別の目的を持っていたら、貴様は後悔することにな

る」

なんなんだ。これから世話になるうって連中の非難をするのか？

「ククク。ならひとつ聞く。真実が、貴様の納得出来ないものであったなら、貴様は受け入れないのか？」

「……………唐突になんだってんだ」

「貴様は、真実というものが、自分の納得出来るものだと思ってる。だから、説明を拒んだ自分の父親に真実はないと思っているだけだ」

「そんなことはない！俺がみんなを信じるのは……………」

「優しくされるからか？」

「……！」

「丁寧な接し方をされ、丁寧な説明を受ける。誠実にされれば、苦にはならんだろうからな。だが、奴らの態度が嘘の可能性もあるはずだ。そして、もし、真実が貴様にとって受け入れ難いものなら、貴様はこう言うはずだ、“そんなはずはない”と。今のうちに進む道を見定めておかねば、永遠に真実に辿り着けなくなるぞ」

なんでコイツは、会ったばかりの俺にここまで言うんだ？俺に何をさせたいんだ？

「ククク……………^{いば}荊の道でよければ、いつでも歩き方を指南してやるがな」

動揺した。サマエルの言葉の裏には、これから先、何が起きるかわかっているような重さがあった。

けど、それはありえない。未来から来た存在でもない限り。

サマエルが俺を“どこか”へ導こうとしている。それは、人が楽園と呼ぶ場所か。神が地獄と呼ぶ場所か。

今のコイツは、俺には悪意剥き出しの悪魔にしか見えなかった。

第二十一節 喪失

一夜明け、俺は一人ブレイメンの教会の中庭で考え込んでいた。夕べのサマルと会話。アイツは、ブレイメンのみんなが嘘を言っている可能性を示唆して来た。まるっきり信じてはいないが、何かひっかかる。

「真実……見方を変えれば別の一面を見せるだろ？なんだよそりや」

まるで謎解きをさせられているような気分だ。

「だああああーっ！！イライラするぜ！！」

「朝からうるさい人ね」

悶々として寝転がる俺を、アサキはケダモノでも見るような目で見下ろしていた。

「アサキ……」

「後六日よ。……ブランシエツトがやって来るまで。それまで、残る三人の魔女を保護しないといけないの。発情してる暇なんてないんだからね」

誰が発情してんだよ。ったく、人を人として見てるのか。

「わかってるさ」

「わかってるようには見えないけど？」

小姑かお前は。

「るせーな。考え事してんだよ」

「どーせロクでもないこと考えてんでしょ」

「あのな……………」

いい加減キレそうになった時、ふと疑問が浮かんだ。それは、アサキの立場。

組織と聞いていた俺は、ブレーメンがダンテ、ジャンヌ、アサキの三人だけだとは思っていなかった。

とりあえず一番偉いのはダンテ。ダンテが会社組織で言う社長の立場なら、ジャンヌは秘書。それならアサキは平社員ってところだ。

なのに、アサキは重宝されてる感がある。
だから気になる。コイツの立場はなんだ？

「アサキ」

「何？変態行為はお断りよ」

……………殺すぞ。

「アサキ、お前達ブレーメンって、三人だけなのか？」

「……………な、何よ、突然」

「教えてくれ。他にメンバーはいないのか？」

跳ね起きた俺に驚いて、アサキは一步下がった。

「アサキ！」

それに負けじと、一步詰め寄る。

「い、いないわよ。それがどうかしたわけ？」

たった三人の組織？馬鹿な。それで対等に真神とやり合っつもりだったのか？

親父は負傷しているから除くとして、兄貴と俺はロザリオカルヴアだ。刻印カルヴの力で魔女も人も消せる。

対して、ブレーメンはアサキだけがいつも現れていた。

トップであるダンテが直に行動することはないだろう。ジャンヌがアサキと現れて、兄貴や俺を相手に戦うことも出来たはず。もしくは、別行動で魔女を探すことも可能だったはずだ。

現に、魔女の情報はコンスタントに入ってきて来る。だったらどちらかを“していなければならぬ”。

なら、なぜそれをしなかった？

答えは単純だ。サマエルの読み通り、ダンテとジャンヌが疑わしい。

アサキはどうか？………コイツは、“白”だ。

証拠に、ブレーメンが三人だとあっさり言い切ったからな。

「なあ、魔女の情報ってどこから持って来るんだ？」

これが一番重要だ。

権力ある金持ちの家に生まれた俺は、そういったものは簡単に

手に入ると思っていた。しかし、たった三人のブレイメンにそれだけの力はないだろう。もし、情報集めに金をぶんまいたり、精力的に行動すれば、すぐに真神に知られてしまう。

ブレイメンは一体、どうやってこんなにも早く情報を仕入れて来れる？

「どこって……私にもわからないけど」

「わからないって……じゃあ、ダンテやジャンヌから直接、指示をもらってるんだな？」

「え、ええ……そうよ」

「……なるほどな」

確信は得た。

この街は教会のひしめく異常地帯。わずか六人の魔女を保護する為の情報を、ピンポイントで選別する手段はブレイメンにはない。それを可能にしていたということは、教会が百あると千あると、最初からわかっていたということになる。魔女がいる教会の場所を。

「アロウ？」

「アサキ。お前、ダンテ達とどうやって知り合ったんだ？」

「はあ？あんだ、どうしたのよ？」

「ダンテとジャンヌ。お前の三人の関係を聞きたい」

サマエルの言葉だって危ういが、今一番疑わしいのはあの二人だ。

はつきりさせておかないと、後々後悔しそうな気がした。

「関係って言っても……………」

急に歯切れ悪くなったアサキは、時間にして一分もないのだろうが、迷ったあげくにこう言った。

「……………記憶が……………ないの……………私」

「記憶が……………？嘘だろ？」

アサキは俯きかげんで首を横に振り、

「嘘じゃないわ。本当よ」

弱気に発言し、目を合わそうとはしない。

「ある日、目を覚ましたら、病室のベッドの上だったわ。覚えてたのは名前だけ。後は、自分がどこに住んでいたのかも、両親がいたのかも覚えてない。思い出せないのよ」

「……………記憶喪失なのか？」

「多分……………」

なんてこった。アサキは、何も知らずにブレイメンに使われてるのか。

「ダンテやジャンヌとはどうやって知り合ったんだ！」

「……………来たのよ。向こうから。私に会いに」

「それでおめおめブレーメンに入ったのかよ！」

「しょうがないでしょ！他に頼れる人がいなかったんだから！アロウに記憶を失った人間の気持ちなんてわからないわよ！」

「アサキ……………」

涙を見た。一滴だけど、アサキの頬を流れた。

「笑ったら？いつも私に詰られてるんだし、嫌いでしょ？だったら笑っていいわよ。記憶のない操り人形だって」

「そんな風に思っわけないだろ！」

「なら同情でもするつもり！？ハンツ！それこそ屈辱よ！」

「なんでそんな話になるんだ！俺はただ、真実を知りたいだけだ！」

「真実？！真実って何よ！」

「親父や、ダンテ達が他に目的を持って行動してるとしたらってことだよ！」

「他の目的……………？」

「ああ、そうだ！ブランシェットが現れるまでは、魔女の数はゼロにはならない。にもかかわらず、魔女狩りをする真神。そのことを知らないのかもしれないが、だからといってあまりに稚拙。ブレー

メンもだ。お前を除けば、ダンテとジャンヌの二人だけ。いつも何か行動させるのは、全部アサキだ。お前がいなかったとしても、代わりにジャンヌが保護活動をしてたとは思えない」

そう思ったのは、単なる感覚的なものだったが、ジャンヌがアクションを起こす時はもつと事態が切迫した時のような気がするのだ。

「聞く必要がある。記憶を失い、病室で寝てたお前を、ブレイメンに引き入れた二人だ。お前の記憶喪失の原因も知ってるかもしれない」

「アロウ………」

アサキの喪失した記憶。これは偶然なんかじゃない。ダンテとジャンヌは何か知っている。

行くしかなかった。何か嫌な予感がしていても。

第二十二節 否定

アサキは言った。気づいたら病室のベッドの上だったと。そして、名前以外の記憶がなく、ダンテとジャンヌが自分をブレーメンに誘ったのだと。

「でもそれって、おかしくないか？」

俺はダンテとジャンヌを問い詰めた。

アサキはやめてくれと言ったのだが、このまま成り行きのままってのは気持ち悪い。それに、真実は自分の目で知らなくちゃならない。決してサマエルに感化されたから、ってわけじゃない。まあ、少しはあるか。

とにかく、俺の知る現実とは、真実なんかじゃない。それだけはどうやく解った。

「おかしい？どこがだ？」

ダンテは俺を見向きもせず、コーヒーを飲みながら新聞を読んでいく。この態度こそ、俺の知らない何かを知ってる証拠だ。

残り六日と迫った中、悠長過ぎやしないか？指揮を取る者とは言え、“組織”の規模を考えれば、自身が行動を起こさなければならぬはずだ。

不信任だけが部屋を埋め尽くして行く。

「お前ら、アサキを知ってたってことだよな？」

さあ、答えてみる。なんて言い訳するよ？

どうせ答えるのは……

「いや、たまたまだよ」

ジャンヌだ。

「たまたま？フン。そんなこと信じられるか！アサキはかなり格闘技をやり込んでいる。それを見込んだスカウトかとも思ったんだが、記憶のないアサキの情報がないってのは不自然だろ。あいつも人間だ。戸籍くらいあるのが普通だ。まさか調べてないなんて言うんじゃないだろうな？」

調べてないってんなら、これから役所に行くまでだ。この街の人間じゃなかったとしても、容易に調べられる。

「……………調べたさ」

ジャンヌが言うと、アサキは、

「何もわからなかった。……………そうよね？」

アサキとしても知りたいのだ。自分が何者で、なぜ記憶を失ったのかを。

「わからなかったなんて通用しないぜ。お前ら、魔女の情報は簡単に持って来るじゃないか。素性の知れない人間の情報くらい、すぐ調べ挙げられるだろ」

「でも、わからなかったんだよ」

「ジャンヌ！」

「嘘なんて言っていない！この街にも、この国にも、世界のどこにもアサキに関する情報はないんだッ！！なんなら、君の実家の力を使って調べてみればいい！！」

冷静だとばかり思っていたジャンヌが怒った。

「そんな…………アサキの情報が世界のどこにもない…………？」

不信任を払拭しきれない中、アサキは乱暴に扉を開け出て行った。

「アサキ！！」

俺はアサキを追いかけようとした。すると、ジャンヌが険しい表情で、

「アロウ。ボクらがその事実をアサキに告げなかったのは、彼女を傷つけてしまうからだ。君にはわからないか？自分の素性もわからず、調べればわかるようなことが世界のどこにもない。記憶がなくなったアサキの、最後の綱は、存在すら否定してしまったんだよ。今、彼女がどんな気持ちか、君にわかるかい？」

そう言った。…………言われたんだ。

「真実真実と正義ぶって言うけど、真実を知ること、知らなくていいことまで知ってしまう。君は何もわかってない。知れば全てが解決すると思っている。…………浅はかだよ」

何も言えなかった。ジャンヌの言葉が、ナイフのような鋭さで胸に刺さったまま、俺はアサキを追った。

第二十三節 宣告

「申し訳ありませんが、一時間で構いませんから部屋を空けて下さい」

清掃員のコスチュームで、三角巾をしたシンデレラが言った。

言った相手はサマエル。サマエルは用意された部屋のベッドで寝込んでいた。

「き、聞いてらっしゃいますか？」

就労中毒者とアリスに言われた通り、シンデレラは何かしていないと落ち着かないのだ。

「用意してもらったばかりの部屋だ。掃除の必要はない」

そんなシンデレラを、サマエルは軽くあしらう。

「ですが、ベッドのシーツくらいは……………」

「必要ないと言っている」

シンデレラはサマエルの風貌に、ただでさえ恐怖心とか威圧感を感じている。言い切られてしまえば、それ以上は何も言えなかった。

そこへ、タタタツとアリスがやって来た。

「ちょっと！朝ご飯まだなわけ！？」

腰に手を当て、強気に発言する。しかし、シンデレラとしては、ア

リス風情に偉ぶられる筋合いはない。

「朝ご飯などとつくに終わりましたわ。お寝坊をしたあなたに、わざわざ作る気はございません!」

「ぬわあゝにゝをゝ! シンデレラのくせに生意気よ!」

「怠け者に世話する義理は持ち合わせていませんの」

「ぐぎゝゝっ! いちいち反論するなあっ!」

寝耳に水といきたいところだが、キーキーとうるさ過ぎてかなわず、サマエルはムクツと起き上がった。

「うるさい小娘どもだ」

「お前は朝ご飯食べたのか!」

けだるそうなサマエルに、アリスが指差して問うと、

「フン……人間の食事は口に合わん。俺は貴様らと違い、“短”期間の空腹になら耐えられる」

なんのことやら、アリスにはわからないが、要するに、気が向いた時に食べればそれでいいのだろうと、勝手に解釈した。

「そんなことより、出て行け。食事もいらなければ掃除もいらん」

「うぬゝゝゝゝっ! なんて傲慢さ! シンデレラ! やっちゃんなさい!」

「お宅に命令される筋合いはございません！」

ゴツンと額をぶつけ合っていると、

「客人がよいと言ってるのだ。いつまでも騒ぐでない」

チエシャ猫がのそりと入って来た。

「だってシンデレラが………！」

「わたくしのせいにしないで！」

チエシャ猫は溜め息を吐き、

「二人とも、私はこの客人に話がある。すまないが出て行ってくれ」

アリスとシンデレラを“追い出した”。

「……ふう。やれやれだ。元気なのはいいが、少しは緊張感を持つてもらいたいものだな」

話の冒頭を愚痴で飾ったのは、それだけ深い話をしたいからだろう。

サマエルもチエシャ猫の真意は承知したようで、

「クックツ………遠回しに話す必要はない。聞きたいことがあるなら、ストレートに言え」

「……フフ。ただ者ではなかるうが、想像以上の人物のようだな」

「さあてな。ただのならず者かもしれんぞ」

チエシャ猫は、ぴょこんとサマエルの真向かいのテーブルに飛び乗る。

「では早速聞こう。時空間を旅すると言っていたが、お前の目的はなんだ？」

「フツ。唐突だな。まあいい。……俺の目的は、そんな大層な目的ではない。ある二人の男を追っているだけだ」

「……二人の男？お前のようにやはり時空間を旅してるのか？」

「旅をしてるといふ言葉は妥当ではないがな」

「……その二人の目的は？なぜお前はその二人を追っているのだ？」

警察の取り調べのように矢継ぎ早に尋問して来る。チエシャ猫は、サマエルの時空間移動に興味があるわけではないらしく、むしろその目的。それに絡む事情にあるようだ。

「クク。何を知りたいのかよくわからんが、知りたいのなら教えてやろう。……そいつらの目的は互いに消し合うことだ。一人は宇宙を無に還そうとしている。もう一人は、それを阻止しようとしている。それだけのことだ」

「……で、お前がそいつらを追う理由はなんだ？」

「クク……宇宙を無に還そうとする者は、悪魔の神。それを阻止する者は、輪廻を司る神となった少年。そいつらの強さは、貴様ら

の想像では足りないくらいの強さを誇る。そいつらを倒し、強さの頂点を極める。それが俺の目的だ。無論、他に強い奴がいれば、戦うまでだが」

「……………」

強くなる。というのは違う。なぜなら、サマエルは既に次元の高い強さを誇ってるからだ。

「サマエル。ならばお前は这个世界を去るべきだろう」

「……………ほう」

「この世界に、お前の望む相手はいない。その二人の神を追った方がいいのではないか？」

「それは忠告か？それとも警告か？」

「……………なんとことだ？」

「俺が何も知らぬと思ってるなら、考えを改めるべきだな」

「……………フツ。さて、私にはさっぱりだ」

「なら俺からも聞こう。貴様らは三千年ごとに目覚めると言っていたが、三千年前の更に三千年前、つまり六千年前はどうかだったんだ？」

「六千年前？」

「更に遡って九千年前、一万二千年前……ブランシエツトとか言う魔女との戦いを、ずっと続けて来たのか？」

「そうだ。勝負こそ着きはしないが、ずっとだ」

「ククク」

「何を笑うことがある？」

「聞き方を変えてやろう」

そう言うと、サマエルは口角を上げた。そこに悪意はある。

チェシャ猫は、生唾を飲んで言葉を待つ。

「三千年ごとの戦いとは言え、始まりはあつたはずだ。だが、それは唐突にはやって来るものではないだろう。貴様らが人間に従う理由はない。にもかかわらず、人間の保護を受け、三千年後に行こうとしている。笑いたくなるような理屈だ」

「矛盾してると言いたいのか？」

「ブランシエツトに勝てないからだと逃げ切りたいのだろうが、そうはいかん。三千年という時間は、眠り続けられる時間ではない。“いかなる理由があつても”だ。ある日、唐突にブランシエツトが生まれ、そこから三千年ごとの眠りと二週間の戦いが始まったなど、到底、信じられる話ではない」

サマエルは、チェシャ猫に明確な理由がないことに気づいている。尋問の主導権は、サマエルへと移る。

「回りくどい言い方は抜きだ。サマエルよ、はっきり言うがいい」

「クク………なら言わせてもらおう。貴様らに始まりはない。三千年とほざいているが、その記憶は作られたものだ。誰かがこの世界を実験台にし、何かをしようとはしているが、貴様らが直接関係してるとは思えん」

「なかなか面白いストーリーだ。だが、ブランシエツトは存在する」

「金環日食の日。ブランシエツトが現れたら、俺が退治してやる。貴様らが怯えるほどの相手なら、不足はない。それとも、手出しされるのは都合が悪いか？クク。どちらにせよ、楽しみだ。この世界の行く末がな」

「悪魔だな。お前は」

チエシヤ猫は話の終わりを告げるように、テーブルから降りた。

すたすたとドアまで歩き、立ち止まる。

「……………そういえば、忠告か警告かと言ってたな。……………強いて言うのなら、これは宣告だ」

「……………宣告？」

「この世界でお前は絶望する」

そして、チエシヤ猫はドアをすり抜け消えた。

「……………絶望だと？ククク。そんなもの、遠い昔に嫌と言うほど味わって来たさ」

チェシャ猫の消えたドアを見つめていた。

第二十四節 迷宮

「アサキ」

アサキを追いかけて、彼女の部屋まで来ていた。

意外に広く、殺風景ではあるが、洋風の小洒落た感じがあった。

「聞くべきじゃなかったな。ゴメン。軽率だったよ」

謝っても、アサキの心が癒えることはないのだろうが、それでも謝るしかない。

当のアサキは、俺の謝罪に関心もせず、ただ俯いてる。

「お、俺って昔から空気読めないって言うか、人の都合とか考えないからなあ……ハハハ……」

何を言ってるんだ、俺は。そんなんじゃ、慰めにもならないだろ。

「……なあ、アサキ」

「……………」

「……記憶、やっぱり欲しい……よな」

「……………」

「取り戻してみないか？」

考えもせずに出た言葉に、アサキが振り返った。そこには、あの危

険女のアサキはなく、涙を流すただの女子高生がいた。

迂闊にも、元が美少女だけに、俺はドキリとしてしまい、目を逸らした。

「せ、世界のどこにもお前の情報がないなんて、そんなの嘘さ。ダ
ンテとジャンヌが調べ損ねただけだよ。なんつったって、ブレーメ
ンは組織とは程遠い、“団”みたいなもんだからな」

「…………だからって、どうやって私の記憶を…………？」

「それは、その……………」

「無理よ。そして無駄。確かにブレーメンはちっぽけな“団”みた
いなものだけど、あの二人は一般人じゃない。何か、そういう臭い
のする存在だもの、そういう意味では、あの二人の話は信じられる
わ」

「で、でもだな……………」

「ありがとう」

「え……………」

「嬉しかった。私の為にそこまで言ってくれて」

「アサキ……………」

「私の為に必死に何か言ってくれる人なんて、いないと思ってた。
だから、それだけでも満足かもね」

「ふざけんなっ!!」

「!!!??」

「満足だつて?!んなわけねーだろ!記憶がなけりゃ、自分自身が何なのかわからないままだ!記憶がなけりゃ、どんなことに悩み、苦しみ、喜んだのかわからねーじゃねーかつ!!」

「ア……アロウ……」

気づけば叫んでいた。考えてなかったのとは違う。無意識に、腹の底から想いがしゃしゃり出て来やがったんだ。

自分が、何を言ってるのかもわからないのに。

「記憶つて、そりゃあいいことばっか詰まってるわけじゃないだろうけど、大切な人とか思い出が絶対あるはずだ!それがないまま生きるなんて、満足出来るわけねーっ!!」

俺はアサキの上腕を掴み、

「だから取り戻すんだ!お前の記憶を!」

「だからあ、取り戻すつて……どうするのよ……!」

「んなもん、片っ端から情報収集に決まってるんだろ!ダンテとジャンヌにも協力させるし、真神の権力も利用する!ついでにサマエルとクダイにも手伝わせる!ヘッ、あいつら人間離れしてっからよ、きっといい仕事してくれるぜ!あ、シンデレラは働き者っぽいし、アリスは……まあなんかやらせるとして、チェシャ猫は猫のくせに賢いから、頼れるさ!」

なんでもいい。押し切りたかった。この淀んだ空気とアサキの涙ごと。

そんな俺の気持ちが伝わったのか、アサキはニコツと微笑み、

「……………そうね。頼ってみてもいいかも」

「ああ。そうさ！きっと何か見つかるさ！」

「うん！」

軽く言っただけじゃない。この世界で生まれた以上、何らかの情報はあつた。どんな手段を用いても、アサキの情報を探して、記憶を戻してやる。

「アロウ」

「ん？なんだ？」

「改めて、ありがとう」

「いや、ま、まあ……………なんだ……………き、気にすんなって！」

普段のアサキからは想像つかない優しい笑顔と口調だった。

胸の中にほんのりと温かいものが芽生えていたが、それが恋心なのかどうかは、考えないことにしていた。

「今日も魔女狩りするのかい？」

銃の手入れをするセツハを見れば、解りうることではあるのだが、クダイはそれを敢えて聞いた。

「わかりきったことを聞くな」

「フフ。いや、やけに熱心に手入れしてるからさ。別のこともするのかと」

「なんだ、別のことは」

「アロウ殺し」

「!!--!」

「……………冗談だよ」

「私が、アロウを殺すのを目的としてると言いたいのか!」

「そう怒らないでよ。言っただろ? 冗談だつて」

「冗談には聞こえなかった。」

「時空間移動者だかなんだか知らんが、偉そうに人を茶化すな! 大

体、人間が時空間を越えて別の世界を行き来するなど、私は信じていない！」

「…………… 同感だよ。無理もない」

セツハは驚いた。クダイが、自身の否定を認めたからだ。

しかし、それが上辺だけのものであることは、すぐに吐露される。

「クダイ…………… ツ。馬鹿にしてるのか!？」

「とんでもない。僕だって君の“立場”なら、きっとそう言うさ。でもね、事実はあるんだよ。セツハが僕とサマエルを否定するのは、“時空間移動” 出来ると言う非現実的な一点だけだ」

「充分だ！非現実的なら、現実ではないと言うことだろう！」

机に手の平を叩き付けたセツハを、クダイは不気味な目で見つめる。

「わかってないよね。“その” 非現実的は、セツハ自身が“身につけた” 常識に過ぎない。でも、“その” 常識が偽りだとは疑わないのかい？」

「フツ。常識を疑えだど？笑わせるな。常識は常識だ。有り得ないものは有り得ないのが世の中であり、有り得ないことを可能にするなど、神にしか出来んこと。それとも何か？お前やサマエルは神だと告白でもしてみるか？」

「それも面白いかもしれない。僕とサマエルが神ならば、それだけで証拠になっってしまうわけだ」

卑しくクダイが笑む。まるで、セツハが術中にハマったかのような
歓喜さえ漂わせて。

セツハは思わず息を呑み、言い知れぬ重圧感にまどろむ。

「いいことを教えてあげるよ。人が自分を保つのに不可欠なものは
記憶だ。さっき常識を疑えって言ったのは、君の中にある全ての記
憶……生まれから現在に至るまでの全てが、一秒前に創作され
たかもしれないってことさ」

「……………な、なんだと……………っ！」

突拍子もない言葉なのに、突っ返せない。

記憶が一秒前に創作された？そんなものは戯言。虚言だ。なの
に、クダイに勝てない自分がいる。

セツハの動揺は異常だろう。何の話かわからないのにプレッシ
ヤーを感じての動揺なのだから。

「アロウは利口だよ。少なくとも、真実を自分の目で確かめようと
している。魔女狩りを押し付けられた時から、自分は違う世界にい
るんじゃないかとさえ思ってるだろうね」

「私とアロウがいるこの世界が、全く別の世界だと言うのか？」

「セツハ。真実は一つだなんて思わないことだ。有り得ないことが
真実だった場合、君は出口を見失う」

「くっ……………なら、私達がいる“ここ”は、どこだと言っただッ！
！」

信憑性のカケラもないクダイの言葉は、既にセツハを袋小路に追いやっている。

こんな時、すべきことは一つだけ。

「ここは……………」

そのすべきことは、確実に相手を仕留める武器になる。

「ラビリンスだ」

“存在”の定義が“記憶”によるものであるならば、人は行くべき道を紡げなくなる。

なぜなら、記憶とは曖昧なもので、経験“した”と誰かが書き込めば済む話だからだ。

- 全記憶の一秒前の創作 -

それは、世界が一秒前に創造されたかもしれないif。

- 存在を創る定義 -

記憶がなければ世界に存在出来ない理由。

クダイの放った言葉は魔法だった。セツハの思考を捕らえ離さない。

それが真実であるか虚言であるか、セツハは確かめる術を持ち合わせていないのに。

脱力感が襲う“今、創造されたかもしれない肉体”を想えば、目の前で卑しく笑うクダイは、まさに神だった。

第二十五節 急変

今回で五度目の魔女狩り。疑いを持つことも、もうない。なぜなら、ジャンヌが持つて来る情報は確実だからだ。

だけど、それは兄貴とクダイ側にも言える。どこから仕入れて来るのかなんて、考えたこともないが、いずれ出所ははっきりとさせたい。

俺は、アサキとサマエルを連れ、言われた先の教会へとやって来た。

「五人目の魔女がここにいる」

解りやすく、簡潔に言ってやる。

前は兄貴に先を越され、世界から魔女を一人消されてしまったが、今度はそうはいかない。

「それにしても大きな教会ね」

アサキが言うように、見た目から、教会には間違いはないのだろうが、いかんせん学校の校舎並の大きさだ。胡散臭さは申し分ない。

「どうしたの？サマエル」

機嫌悪そうに辺りを気にするサマエルに、アサキが声をかけた。

「……………嫌な臭いがする」

特に臭いを嗅いでるようには見えないが、何かが気になるらしい。

「何にも臭わないぞ？」

俺はクンクンと鼻を機能させてみたが、サマエルが気にする何かを感知は出来なかった。

「何の臭いがするわけ？」

アサキも俺を真似たようにしていたが、感想も同じようだ。

「……………嗅ぎなれた臭いだが、ずっと好きになれなかった臭いだ」

だから、それが何なのか聞いてるんだ。そついう言い方をするってことは、何の臭いか解ってはいるわけだ。

「魔女狩りと関係ある臭いなのか？」

「そんなものとは比べものにはならんな」

「なあ、サマエル。これから一仕事するんだ。あれこれ頭を悩ませたくない。そんなに気になるなら、ちゃんと言えよ」

おそらく兄貴とクダイも来る。その前にカタを着けたいんだ。

「……………神の臭いがする」

「は？カミ？」

「それも高位の神だ」

ああ。神様のことか。

もちろん、俺とアサキが神様の臭いなど解るわけもなく、サマエルの言葉に眉をひそめるしかなかった。

「しかも……………それだけではない。上手くは言えないが、危険な臭いであるのは間違いないだろう」

「間違いないだろうって……………具体的にどうしたって言うんだ？まさか、神様が降臨して来るなんて言うなよ？」

サマエルの顔が不安げに染まる。コイツのことを、よくは知らないにしても、ただ事でないことは解る。

「急げ、アロウ。嫌な予感がする」

ホント、なんだかよく解らないが、俺まで不安に染まって来た。

「行こ。アロウ。サマエルの言う通り、空気が淀んで来たわ」

それはアサキも同じようだ。

「よしっ！行くぞ！」

そう意気込んだ時だった。

「裏切り者がのうのうとやって来たか」

教会の方から誰か歩いて来る。だが、姿を確認するまでもなかった。聞き慣れた声だ。

「兄貴！」

そして、

「遅かったね。残念だけど、もう事は済んだよ」

「クダイ……………ッ!」

コイツ、今何て言った？事が済んだ？

「そうだ。魔女はもういない」

フンと鼻を鳴らした兄貴は、右手の^{カルヴ}刻印を見せ、

「見る。^{カルヴ}刻印が金色に光ってる」

自慢げに言う。けど、俺には何がそんなに自慢なのか解らない。

「だからなんだよ」

「アロウ。お前の^{カルヴ}刻印はこんなに強く光を放つか？」

言ってる意味を理解出来ないでいると、

「セツハは、魔女の力を自分のものにしたんだ」

「な……………なんだって?!」

クダイが言った。それは、にわかには信じ難いものだった。
俺の視線が兄貴を捕らえると、

「アロウ。お前も知ってるんだろっ?」

眼鏡に外灯を反射させて言った。

「何をだ?」

「フツ。とぼけるな。金環日食の日に何が起きるかだ」

兄貴が……知っている。金環日食の日に、ブランチェットが現れることを。でも、なんで兄貴が……

「まだ知ってるぞ。魔女は六人。その数は、最後の一人さえ残しておけば、残る五人はイレース出来る。しかし、六人全員を消去は出来ない。……ことまでな」

それを吹き込んだのは、多分クダイだ。

クダイも知ってたんだ。その仕組みを。

今考えれば、含む言い回しの多い奴だった。そして、そのこと
はある疑惑を生む。

「……お前、ブレイメンなのか……?」

クダイは否定もせずに見せる。

「アハハ。さあ?なんのことだろうねえ?」

「デメエ……!」

もちろん、時空間を移動して来たと言い張る奴だ。ブレイメンと繋がりがなくても、何らかの事情で知ってることも考えられる。……

……それと、さっきサマエルが言ってた“神様”の臭いの正体。それはクダイだ。

「兄貴、親父はコイツと組んで何を企んでるんだ！」

「父さんは関係ない。何も知らないさ。これは、私自身の問題だ」

「ふざけたことを！それじゃ、兄貴だって裏切り者じゃないか！人のこと言えるのか！」

「もう、終わりにすべきだ」

「何っ？」

「妖かしを狩り続けて来た真神家。確かに由緒ある名家に違いはない。今では、世界を牛耳る資産家のひとつ。どんな黒い闇も、正義にしてしまう魔法を使う。だが、私はそういうものにうんざりしていたんだ。お前が真神家を批難し、家を出て行った時、私もそうすべきだった。フツ……そんな勇氣を持っていたお前が羨ましかった」

「兄貴……」

そんな風に思ってたなんて、正直思いもしなかった。だからと言って、同情はしない。真神家を出ることのリスクは半端じゃない。それを怯えた兄貴は、親父に負けたんだ。

「それで？あんたは何をするつもりなの？」

ひょこつとアサキが口を出し、兄貴を問い詰める。

「金環日食の日に現れる魔女ブランシェット。そいつを倒して、私の理想の世界を築く」

さも、当たり前のように発言したが、言ってることはとても容認出来ない。

「兄貴……トチ狂ったか」

「元々狂った世界に住んでいるのだ。狂おうと狂うまいと、たいした問題ではない」

そして兄貴は、コートを脱ぎ捨てファイティングポーズをとる。

「なんの真似だよ？」

「聞くのか？残りの数日間で、お前らの匿う魔女の力を手に入れる。その為に、ここでお前らを殺しておく必要があるんだよ」

「兄貴……」

腹が立ち、兄貴の挑戦を受けてやろうと前に出ると、サマエルが止めた。

「アロウ。お前はブレーメンに戻って魔女を逃がせ」

「サマエル？」

「どうも嫌な予感が止まない」

その視線の先には、クダイがいる。クダイもまた、それを知り、

「君は傍観するもんだと思っていたよ」

「フン。俺が何も知らないと思っているのか？」

「……………フツ。ま、余興も必要だよ」

クダイがダーインスレイヴを手にすると、サマエルも自らの剣を手にした。

「行け！アロウ！アサキ！」

サマエルが怒鳴ると同時に、クダイと兄貴を狙って突っ込む。

二人の足止めをしてくれるのか。なら、遠慮なく退散するまでだ。

「アサキ！」

「うん！」

俺とアサキは、来たばかりの教会を後にする。

走りながら振り返ると、サマエルがクダイと鏖ぜり合い、兄貴に魔法のような現象で攻撃している。

「頼んだぜ、サマエル！」

状況把握を完璧に出来てない。でも、事態が急変したことだけはわかっていた。

第二十六節 決意

「クダイ！なんとかしろ！」

慣れたように応戦をするサマエルの攻撃に、セツハは太刀打ち出来ないでいる。アロウとアサキを追いたくとも追えない苛立ちが、クダイへ向けられた。

「クク。だだよ。応えてやらんのか？」

何度も剣をぶつけ合いながらも、サマエルは隙を見てアロウを追おうとするセツハを、離れた場所から瞬時に攻撃する。

しかし、それはクダイが本気モードでないことも後押ししていること。サマエル自身も充分に理解している。

「フフ。どうにも、僕の近くにはわがままな奴ばかりが集まって来る」

サマエルから距離を置き、長い髪を掻き上げる。

「セツハ。僕がサマエルを攻撃したら、一気に駆け抜けるんだ。大丈夫。しっかり相手しとくから」

ギラリの瞳の奥が光る。

「よ、よし、わかった！」

クダイの様子を伺いながら、駆け抜けるタイミングを見計らう。

クダイは^{まぶた}瞼を閉じ、緩んでいた唇を結ぶ。

「行くぞ！サマエルッ！！」

閉じた^{まぶた}瞼をそのままに、クダイはサマエルへ突撃する。

それを合図に、セツハも走る。

目を開けていないながらも、クダイは俊敏、かつ的確な軌道でサマエルに近づき、果敢に攻める。

「フツ。これならセツハを構う余裕はないはずだ」

舞踏のように舞うクダイは、完全にサマエルの動きを封じる。

「セツハ！アロウとアサキを追え！」

言われるまでもないと、セツハは一気に駆け抜けた。

「ククク。目を閉じたまま攻撃してくるとは……………」

セツハがいなくなったのを確認してから、サマエルは自身の剣力才スブレードでクダイを押し返す。

「面白い技を使うじゃないか」

「無眼の構えと言うんだ。目を閉じれば、瞼の裏に君を捕らえる為の光の軌跡が見える。どう行動すればいいか教えてくれるんだ」

「随分と洒落た技だな」

「もっとも、昔は条件付きでしか使えなかったけど」

「クク……………そうか。貴様も荊いばらの道を歩んだ一人か」

どんな条件が付いていたか。よりも、どんな道をどんな風に歩んで来たのか。そこに興味が湧く。

「だったらどうだって言うんだ？ 僕がどんな道を歩もうとも、全て過去のことだ」

「それは違うな。生きている以上、道は果てなく彼方へ続くものだ。今の貴様がどんな道を歩いているかは知らんが、優美なる草花の道でさえ、一瞬の選択いはらが荊を生む。過信しないことだ」

「……………嫌いだな。僕の知ってる奴に、君みたいな奴がいる。何もかも知ってるような言動で人を惑わし、深い思想で魔界いまへ誘う。…

…悪魔だよ。悪魔の神ヴァルゼ・アーク……………」

「ほう。ヴァルゼ・アークを知っているか」

「……………アハハハ！……………奇遇だね。君も知ってるのか」

クダイの中で、点と点が繋がる。

サマエルの追っているうちの一人は、自分の知っている人物である。

そして、もう一人。おそらく、その人物も共通の知り合いだろう。

「ヴァルゼ・アークを知ってるってことは、羽竜も知ってるのかい？」

「フツ……………我が愛しき因縁よ」

「僕は恵まれているのかいないのか……………」

尊敬する友人を共通の知り合いに置きながら、サマエルとは剣を交えなければならぬ。

「まあいいや。僕は腹を決めたんだ。そろそろ“事”を進める為のね。あの二人の話をじっくりしたいところだけど、本格的に君に邪魔される前に、死んでもらうよ……………サマエル！」

「……………やれるものなら、やってみるんだな！」

そしてクダイは、右の腰にぶら下がってるもうひとつの剣を、左手で抜いた。

神々しい黄金の刃。二刀流と無眼の構えで、再びサマエルに挑む。

「誰にも僕の邪魔はさせないっ！！」

決意固く。クダイは、おのが目的の為ならば、いかなる犠牲も問わないと心に決めている。

第二十七節 挑戦

もぬけの殻とはこのことを言うんだろうな。

戻って来た俺とアサキを迎えたのは、無人のブレイメンだった。

「こんな大事な時に、みんなどこに行っただのよ！」

ダンテの机を、アサキが思い切り蹴飛ばす。

俺はその行為を咎めることはせず黙認した。気持ちは同じだからな。

刻印^{カルヴ}に妖かしの能力を奪い、吸収することが出来るなんて知らなかった。

「アサキ。どうやら思った以上に最悪な状況らしいな」

まだ憶測ではあるが、ジャンヌとダンテはやはり何か企んでいる。魔女の保護と謳歌しているが、彼女らの能力を利用しようとしているのは間違いない。

「一体、何がどうなってるわけ！」

「それは俺も知りたいね」

イラつく気持ちはあるのだが、俺の分までアサキが発散してるように思え、逆に冷静な思考を巡らせることが出来た。

「どうすんの？誰もいないんじゃないわ！」

「最初から話になんてなっていないんだよ」

「どういう意味？」

「サマエルが言ってた。自分の目で確かめたわけでもないのに、安易に他人を信用するなっ」

きつとそれは、組織に殉ずる輩の全てを指すのだろう。

「アサキ、ジャンヌとダンテを捜すぞ！あの二人、絶対に何か隠してる！ぶん殴ってでも、今度こそ真実を吐かせてやるぜっ！」

次は言い負かされるものと、意気込む俺は、不意に訪れたダークな気配を感じ振り向いた。

「それは怖いな」

いつの間にか、ジャンヌが壁にもたれ掛かっていた。

ただ、明らかに尋常じゃなかったのは、鈍色の鎧を纏っていたことだ。

「ジャンヌ……………」

「アロウ。言っただけだ。全てを知ろうとすることは浅はかだと。知らなくていいこともあるんだよ」

「黙れッ！魔女を保護するなんて建前だろ！真意は他にあるはずだ！」

「フフ……………人間って、どうして知りたがりなんだろうねえ。知り得る全てが、優しさを持つてるわけじゃない。……………知れば、後悔

するかもしれない。もつとも、言つつもりはないけれど」

ニヤツと微笑む。そこにはもちろん悪意がある。

「お前の言う通りだ。知れば後悔するかもしれない。けどな、それは知った側がどう受け止めるかだ！知らせる側の勝手な判断はやめてもらおうか！」

「……………いい目つきだ。ロザリオカルヴァ、真神アロウ……………ボクは一度戦いたいと思ってたんだ」

ジャンヌが剣を抜いた。鈍色には似合わない鏡面のような刃。自らが光を放つようなその剣は、血で濡れることを望んでいるようだ。

「俺と？」

「聞かされてないのかい？なら教えてあげよう。ロザリオカルヴァは、古来、真実の神と呼ばれていたんだ。真実の神……………つまり、君のファミリーネームの真神^{まがみ}とは、そこから来ている。フフ。神と戦うなんて、我ながら愚かしいとは思うが、まあ飽くなき探求心でも思つて、ボクの挑戦を受けてほしい」

何のことだ？俺が……………神？

ジャンヌの言つてることが理解出来ない。

「アロウ……………」

アサキに呼ばれ、ふと我に返る。彼女の表情を見るに、俺は余程怪訝な顔をしてたに違いない。

「わかってる。相手にするなっただろ？」

勝敗はともかく、戦う準備って言うか心構えが整ってない。今ジャンヌと戦うのは自殺行為だ。

「悪いな、ジャンヌ。一方的な挑戦状は受け取らない主義なんだ」

「そうなのかい？それは残念だ。でも、君に拒否権はない」

「チツ」

スローモーションのようにゆらりと剣を構える。

ドアの前に立たれ、ここは2階。後ろは窓ガラスが閉じられている。

「アロウ！」

アサキは俺を見て軽く頷く。それが何を意味してるかは、充分に悟れた。

「行くよ！真神アロウツ！！」

助走もつけず飛び込んで来るジャンヌ。俺とアサキは、彼女が剣を横一閃に振るう刹那、窓ガラスを割り、2階から飛び出した。

着地が成功するかなど考える余地もなく、見事二人して転がってしまった。が、すぐに立ち上がり、逃げようとすると、

「どこへ行く」

兄貴が息を切らしてやって来た。

「サマエルのヤツ、なにやってんだよ」

サマエルに文句を言っても仕方ないのだろうが、これで退路を完全に失ったわけだ。

「これは……………真神家長男、真神セツハ」

ジャンヌのヤツも2階から飛び降りていた。

「ブレーメン……………」

兄貴は俺をすっ飛ばしてジャンヌを睨んだ。

もう、誰が味方で敵か解らない。少なくとも、俺とアサキに味方はサマエルのみ。そのサマエルも信用に足りるかは別の話だが。

「ちょうどいい。神を二人も相手に出来るなんて、滅多にない幸運だ」

「神？なんの話だ？」

どうやら、兄貴もジャンヌの言うことが理解出来ないらしい。つまり、何も知らないのは兄貴も同じだということ。

「兄貴、俺達、真神家の人間は……………」

「そうか、アロウだけじゃなく、君も何も知らされてないんだね。セツハ」

ジャンヌが人差し指で前髪を跳ねる。その仕草は、全くの余裕。気

持ちに乱れない。

「フン。なんだかよくわからんが、邪魔する者は誰であろうと殺す！」

「兄貴ッ！」

「もう魔女も真神も関係ない！新たな伝説を私が創る！」

このバカ兄貴がつ。妄信者に成り下がったか。

兄貴の睨む相手が、今度は俺になり、アサキは俺に背中を合わせるようにしてジャンヌを睨む。

「アサキ。真神に味方するのかい？君は……いや、何も言わないでおこう。好きにするといいさ」

「歯切れ悪いわね。気になるじゃない」

「気にしない方がいい」

「……どっちみち、あんたとダンテには聞きたいことがあるわ！ゲロ吐くまで蹴り倒してやるから、覚悟しなさいっ！」

おいおい、逃げるんじゃないのかよ。

「しょうがないでしょ！いいからそっちは任せたわ！」

どうやら選択肢はひとつのようだ。

「………いつもこいつも勝手なことばっか言いやがって」

カルヴ
刻印を取り出す……って表現も変だが、俺は兄貴と戦う為に狩人の能力を使う。

俺と兄貴。アサキとジャンヌ。戦わねばならぬ理由があるようには、どうしても思えない。

それでも、この場を逃れるには、戦うしか他にないのだ。

「準備はいいかい？」

と、ジャンヌが宣戦する。

「いつでもどっからでも、かかって来なさいよっ！」

と、アサキがステップを踏む。

「ロザリオカルヴアは世界に一人で充分だ！」

と、クダイに何を吹き込まれたか知らんが、妄信している兄貴。

「チッ。どうにでもなりやがれっ！」

そして俺は、先の見えない迷宮の中、迫り来る時間に怯えていた。

第二十八節 英靈

兄弟喧嘩なら、幾度となくこなして来た。だから、いくら兄貴が強くても、そう問題じゃない。と、思ったのは安易だったか。

兄貴は、その刻印カルグの中に二人の魔女の能力を持っていると言った。そのひとつが、今、俺が目になっている光景ってわけか。

「気味悪過ぎだぜ」

兄貴の周りから、無数の腕が伸び出ている。

「千手せんじゅ……反魂の魔女リジイの能力だ」

兄貴は眼鏡の位置を直し、そう言った。

「アロウ。互いに相俟み得ぬ存在だが、それでも私の弟だ。一度だけチャンスをやろう」

「チャンス？」

「私に仕え、共に理想の世界を……」

「断るっ！」

「アロウ！」

「何が理想の世界だ！そんなもの、この世のどこを探したって見つかんねーよ！」

「……………フツ。同じ血を分けながら、溶け合いきれぬのか」

「兄貴……………手加減は出来ねーからな」

「それは私のセリフだ。せめてもの情け。楽に殺してやる！」

無数の腕が、一斉に襲い来る。

「やれるとこまで、やるだけだ！」

自分に言い聞かせ、刻印^{カルヴ}の力を解放して迎え撃つ。

「ウオオオーツー!!」

俺は唸り、絡み付こうとする腕“達”を振り払う。

魔女の能力だと聞いたから、多少警戒を深めたが、それほど警戒するまでもない。ただうつつしいだけだ。これなら、ヘマをしない限り兄貴に殺られるようなことはない。

「……………いける！」

何も恐れることなんてないんだ。実の兄でさえ、妖かしの力に染まるなら、消すまでだ。

俺は、ロザリオカルヴァなのだから。

「やるね。アサキ」

「いちいち喋らなくていいから！」

ジャンヌの余裕を聞く気など毛頭ない。

アサキはすかさず攻撃に転じる。

ワイヤーアクションのように軽やかに空間を蹴り飛ばし、勢いをつけジャンヌに足技を疲労する。

その白い足を、ジャンヌは右に、左に、のけ反り避ける。

「そんな鎧（重い）もん身につけてる割りにすばしっこいのね！」

「お褒めの言葉ありがとう、アサキ。けれど、君こそ腕を上げたじゃないか。ボクとしては、頼もしく思うよ」

「そうやって、余裕がましとると、痛い目みるわよ！」

「心配はいらない。なぜなら、君は本気を出してるけど、ボクはまだ半分くらいの力しか出してない。実力は明らかだね」

「……………ずっとひっかかってたんだけど、あんたの口調ってクダイに似てるわね？」

「……………がさつだとはかり思ってたけど、中々観察力があるじゃないか。……………そうさ。ボクは彼の口調を真似てるんだ。似て当然さ」

「じゃあやっぱリクダイもブレーメンなの？！」

「そういう疑問を持つことは、いいことだ。でもね、知りたければまずはボクを倒すことだ」

「ジャンヌ……………」

「もつとも、自分が何者か知る方が先だろうけど」

クダイとジャンヌが繋がっている。それが解っただけでも収穫はあった。

自分の記憶はともかく、見えない糸に色をつけて行けば、真実に辿り着けるはず。アサキはそう考えている。

「……………シンデレラとアリスはどうしたの?!」

「他人の心配より、自分の心配をした方がいいんじゃないか?」

「そうしたいんだけど、魔女の能力を喰らう輩も現れたし、“保護”しないとね……………」

「アハハ!……………何かあったかい?アサキ」

「どうして?」

「やけに落ち着いてる……………そして、“気”に温度を感じる。温かく……………優しく……………でも激しさを秘めて」

ジャンヌの知るアサキではなくなっている。その原因がアロウにあることも承知している。

「こんなんだけど、ボクも一応女だ。好きな人が出来れば、その人に見合う女になるうとする気持ちはわかるよ」

「な……何言ってるの！私が誰を……！」

「フフ。そうやって、ムキに否定するということは、心当たりがあるんだね」

「……………！！」

「かく言うボクも、想いを寄せる人がいる。その人の為に、ボクは命を捧げたんだ。その人の願いを叶える為、ボクは剣を手にした」

「なによ、世界を救う使命はどこにいつちゃったわけ？」

「そんなもの……最初から持っていないさ。女が命を捧げるのは、果たすべき使命なんかにじゃない。惚れた男にこそ捧げるものだ」

「あんたの口から惚れたなんて言葉、聞かされるとはね」

「それも今回限りだよ。今夜、君はここで死ぬ運命なんだから」

談話にケリを着け、ジャンヌは剣を構える。

「そういえば、まだ正式なボクの名前を言ってなかったね」

ショートカットのブロンドが夜風にふわりと靡く。

「ボクはジャンヌ・ダルク。人の求めし英霊。けれど、ボクは人間が嫌いだね。故に、人の期待を裏切る者だ」

それは、彼女が人ではない真実だった。

第二十九節 光陰

「ハア……ハア……やるね。サマエル」

「…………貴様こそ。羽竜やヴァルゼ・アークに並ぶ腕だ。だが、こうでなくてはつまらん」

そつと^{まぶた}瞼を開いたクダイを見た。

強さを求めるサマエルにとって、申し分ない強さ。しかし、クダイが発する気配は人を超えたもの。それは、神の気配。

生来より神であるならば問題ではないのだが、人を超えたということは、元は人であったということの示唆。

人が人を超えた存在になるには、何かの象徴に成り代わった証。単なる神ではないのだ。

無論、クダイが自分が神であると断言したわけではないが。

「クダイ。貴様は何の為に人を超えた？」

「何の？…………聞きたいのかい？」

「貴様がどんな世界で、何をして来たかは知らんが、人が人を超えるなど、兆が一にも有り得ぬ。だが、それを成した貴様は、現世で何らかの象徴となったはず。それは、貴様が企むことの本質でもある」

「随分と詳しいね。そういった事情に」

「クク。かつては神に仕えてた身だからな」

「そうか。まあ、“あの”二人の知り合いだ。驚くことでもないか」
きらした呼吸を整えるように、クダイは大きな深呼吸をした。

「……………僕はね、失った大切なものを取り戻したいんだ」

「余程、大切なものらしいな」

「ああ。一言じゃ言えないけど、僕にはとても大切な時間だった」

「時間を取り戻したいのか？ならば諦めることだ。いかなる存在も、過ぎた時間を取り戻すことは叶わぬ。この世でもあの世でも、時間だけは絶対の存在だ。追いかけても手の届かぬものよ」

「わかってるさ。だけどね、過去へ行くことは可能だ。もちろん、その行為自体は未来への行為で、その過去は僕の存在しない別の世界なんだけど。まあ、君に説明してもわからないかな」

「同じ光景であっても、自分の知る過去じゃないと？」

「まあそういうこと。ただ、僕の求める時間は、既に消滅してしまっている。だから、別のものだろうと、その世界の過去への道がないんだ」

「言い換えれば、貴様は消滅した世界を取り戻したいということか」

「そうだ。その為に、僕は自分の住んでいた世界を壊して、そこに取り戻したい別の世界を生み出そうと試みたことがある。でも、上手いかなかった」

「クク………当たり前だ。どんな手段を取ったかは知らんが、世界をひとつ創造するというのは、無限に等しい物質や真理が必要になる。まして、時間という概念は不可欠になる。新たな世界ならまだしも、消滅した世界と同じ世界を創造するなど不可能だ。時間は、個人の自由になるものではないからな」

「そうだね。それを思い知らされたよ。だから、僕は研究してるんだ」

「研究？」

「消滅した世界の再生、もしくは、それと同じ世界の創造。それを成し得る為、僕は様々な世界を旅し、仕組みを知る。そして、理論を組み立て試行する。いつか必ず願いを成就させる為に」

「フン………くだらん夢だ」

「なんだツてツ………！？もう一回言ってみろ！」

「くだらん夢だと言ったんだ」

「くだらない………？ふざけるなツ！お前にだって、失いたくない大切なものがあるだろ！」

「クク………そんなもの、この俺にはない」

「戯れ事だ！失いたくないものを持たない奴なんているものか！」

「夢を見るのは“人”だった頃の名残か？クク。俺の生きる糧は、俺がどれだけ強くなれるか。それだけだ。ようするに、生きるか死

ぬか。生きていられるということは、強くある証拠。強さの限界が訪れた時、それが俺の死ぬ時だ。貴様のような甘い夢を見る為には生きておらんのだよ」

クダイの全てを否定する。失くした時間は、二度と取り戻せない。それが生きとし生ける者達を縛る絶対のルールだ。

「クダイ。その情熱が貴様に“人”を捨てさせたのなら、貴様は羽竜やヴァルゼ・アークの足元にも及ばない。もちろん俺にもな」

「僕と……あの二人と、何が違うって言うんだ！あいつらだって自分の望むものを追い求めている。僕と代わらない！」

「代わるさ。あいつらは、自分達の望むものが、綺麗事だと知っている。貴様のように、あたかもそれが正義だとは口にはしない」

「……………これ以上は、話しても無駄だな」

サマエルの言葉を耳に入れたくないクダイは、二本の剣を構えて瞼まぶたを閉じる。

「サマエル。これだけは言うておく。僕は誰にも負けない！例えばあの二人が相手でもだ！」

「ならば力を持って証明してみろ」

「ああ。そうするさ。僕は……………創造と破壊を司る終末の神だからね！」

世界は、光と闇がなければ成り立たない。

心を持つ者もまた、そうであるように。

第三十節 救援

「くたばれっ！兄貴ーッ！」

刻印^{カルヴ}の力を解放した拳を、兄貴の顔面に擦込むまでわずか数ミリ。そこで俺は“千手”に身体を拘束されてしまった。

「しまった……！くそっ！離せっ！」

離せと言ったところで、本体無き腕達が聞き入れるわけもなく、

「フッ。残念だったな。アロウ」

兄貴が嘲笑うだけだった。

「お前は昔から前に進むことしか出来ない男だ。恐れるに値しないんだよ」

身動きのとれない俺は、空中に張り付けにされる。

「うう………ちつくしょう………！！」

「愚弟を葬る兄の心中。察してくれよ」

兄貴は地上から俺を眺め、何やら手で空を掴む。すると、地面から荊が無数、触手のように現れた。

言うまでもなく、これも奪った魔女の能力だろう。

「花葬の魔女、ラプンツェルのから奪った力だ。一撃で心臓を貫い

てやる」

兄貴が宣告する死を前に、俺はどうすることも出来ない。

「せめて……………せめて右手さえ使えたら……………」

何本もの腕で身体を抑えられてる俺は、兄貴が呼び出した荊を受け入れるしかない。

「死ねッ！！アロウッ！！」

兄貴が拳を突き出すと、それに反応して荊が動き出した。

蛇のように、それでいて放たれた矢のように素早く、俺を狙う。

飛んで来る荊を凝視出来ず、思わず目を閉じた。

そして、死を覚悟した瞬間、鈍い音がした。そんなことを考えられることは、まだ生きてるのだろうか？ゆっくり、うっすらと^{まぶた}瞼を動かす。

「……………！！」

俺の命を狙っていた荊は“食いちぎられ”、先っぽを失くしていた。

「……………貴様ら！！」

兄貴が怒鳴り声を上げた。完全に視界を広げ、何が起こったのかの確認をする。

「お……………お前ら……………」

眼下にいたのは、ドロシーとその愉快な手下達だった。

「間一髪だったな」

そう言ったのは、巨体を持つライオンだ。

驚いて目を丸くすると、光の刃が飛んで来て、俺を掴んでいた
“腕達”を裂き、俺はようやく解放された。

「ど……………どうしてお前らが……………」

上手く着地し、俺はライオンに聞いた。

「言っただけだ。借りは返すと」

約束だからと言わんばかりの口調ではあったが、頼れる強い感情を感じた。

そこへ、おチビ……………ドロシーがやって来て、

「感謝するのだ！この、ドロシー様がお前の命を救ったのだからな
！」

恩着せがましく振る舞った。

まあ、助かったことに違いはないが、コイツに言われても有り
難みがないな。

「へッ……………今までどこに隠れてやがったんだ」

「話は後でございます。一度退散するでございますよ」

カチャカチャ関節を鳴らしキコリが言った。

逃げるのは不服だが、それもやむなしか。

「アロウッ！」

「アサキ……………」

離れて戦ってたアサキも、ジャンヌには歯が立たなかったのだろう。傷を負ってフラフラとしながらやって来た。

「大丈夫か！」

「え…………ええ。でも、これ以上は体力が限…………界……………」

体力を使い果たし、俺の胸にもたれて来た。その華奢な身体は、いつものパワフルなアサキではなく、普通の１７歳のもの。

頼りなく、誰かが守ってやらねば消えてしまいそうだった。

「おや？援軍かい？」

ジャンヌが不意に姿を見せる。ドロシー達を見ても焦りを見せないのは、腕に自信があるからか。

「援軍が来ても、結果が変わることはない。諦めろ」

くそつたれのバカ兄貴も、負ける気はしないらしい。

「おい！チビ！助けに来たからには、逃げる策はあるんだろうな！？」

「チビって言うなっ！」

「あ、あのなあ……ここでお前と言ひ合う暇はないんだよ！いいから逃げる策があるなら、さっさと言え！」

「……………」

沈黙のあげく、おチビは舌をペロツと出しやがった。

「お、お前なあ……………」

ならば頼るのはライオンしかいない。

そう思い、ライオンの奴を呼び掛けると、

「ジャンヌ……………退き上げるぞ」

クダイがフツと現れた。それも、大量に血を流し瀕死の状態だ。

「クダイ様！」

ジャンヌは慌ててクダイを支える。その表情は、聡明な出来る秘書のものではなく、ただの女の顔だった。それを見た瞬間、二人の関係を知った。何より、クダイに“様”を付けたのだ。主従の関係もあるのは事実だろう。いや、これも真実か。

「クダイ様、しっかりなさって下さい！」

「僕は心配いらない……………でも、今夜はこれで……………うつ……………！」

かなり信じられない状況だ。あのクダイが、悲痛な面持ちから立ち直れないでいる。彼をそうさせたのは、明らかにサマエルであって、どれほど上位の戦いが行われたかは、一目瞭然だ。

「ジャンヌ……これは命令だ。セツハにも……」

「……わかりました」

従者の口ぶりで、ジャンヌは一言返事をする、

「セツハ！退却だ！」

兄貴にそう指示する。言われた兄貴は、半ば不満げに、

「こんなところで帰れるか！」

反論した。しかし、それを許すまいと、ジャンヌは兄貴を睨みつけた。

「命令には従う約束だ。従えないなら、君をここで殺す！」

「……………チッ」

薄気味悪い“腕達”と、蛇のような荊を消し兄貴は、

「命拾いをしたな。だが、アロウ、近いうちに決着は着ける。首を洗って待つておけ！」

捨て台詞を吐いて去った。

そして、無言のままクダイを抱えジャンヌも去った。

「アサキ！」

「…………大……丈夫……………少し……………休ませ……………て……………」

疲労からアサキも気を失い、後に残された俺は、難を逃れた安堵と共に、不安に押し潰されそうになる。

それでも、命を救われた小さな救世主とその手下に、今だけはすがっていたかった。

第三十一節 夢魔

「ぐ…………おお…………ま…………まさか…………本当に…………ジャスティスソ
ードを……………」

「言つたろ！お前にこのまま世界を壊されるくらいなら、僕がお前
を殺して世界を壊すって！」

「ク…………クダイ…………愚かな選択…………です。その手に…………自ら罪
を……………」

「愚かな選択をしたのはお前だ、ダンタリオン！」

「な、何…………？」

「幻想として生まれたお前が、人として生きて来たんじゃないか。
シャクスやオルマとの思い出だってあった。きつと、もつと幸せに
なれたんだ。こんなことさえ望まなければ！」

「…………フツ。フフ…………甘い。甘すぎて暴言も吐けませんよ」

「ダンタリオン……………」

「ここは時空間を繋ぐデイメンジョンバルブの中。…………世界が壊
れる前に…………あなただけは逃げ延びることが出来る。…………賭け
ましょう。クダイ。あなたは必ず、私と同じ道を歩む…………その
“力”に気づいてしまったから……………」

「…………！！…………ふ、ふざけるな！僕はここで果てるんだ！それが

みんなの世界を壊す僕の責任だからな！」

「フフ……私には見える……成長したあなたが、ただひとり、叶わぬ願いを求め時間を旅する姿が！」

「だ、黙れエー……ッ……！」

「運命は変えられないッ！あなたもいつか苦しむのでしよう！足掻いても足掻いても、望む場所に辿り着けない現実に……なぜなら、人は道を誤る生き物！あなたも例外ではないからです……！フフ………フハハハハ……ッ……！」

「ダンタリオン……ッ……！」

目覚めれば、そこはベッドの上だった。

「……ゆ……夢か………うつ」

サマエルにやられた傷が痛む。

寝汗がべとついて気持ち悪い。

「気がつきましたか」

ドアが開き、ジャンヌがタオルを持って来た。

「ジャンヌ……………ここは？」

「セツハの用意したホテルです」

難しい顔をして考え込むクダイに、そつとタオルを当て汗を拭き取る。

「悪い夢でも見てられました？」

「……………うなされていたか」

「ええ」

敢えてどんな夢かは聞かないでおいた。

その夢は、クダイと出会ってからずっと彼を苦しめている。

クダイ自身も、終わったはずの過去に苛まれている現在を認めたくはないのだ。

「サマエルの奴……………少しナメてかかってたよ。あそこまで強いとは思わなかった。……………慢心だな」

「クダイ様に手傷を負わせるほどの者であるならば、いつそ味方に付けてはいかがです？」

「それはいい案とは言えないよ。サマエルは損得で動く奴じゃない。自分がどこまで満足出来るかだけを望んでいる。僕とは生き方が違う」

そう言つて、ふとカレンダーを見る。

「……………どれだけ眠つてた？」

「4時間ほどです」

もつと眠つてたのかと思つてた。悪夢にうなされたとは言え、ぐっすりと熟睡した感覚がある。

「包帯、変えましょう」

傍にあつた救急箱を手にしたジャンヌの腕を掴み、

「……………すまない。ひとりにしてくれ」

頭を抱え呟いた。

「……………わかりました」

出しかけた救急箱を戻し、クダイの背中にカーディガンをかけると、軽く頭を抱きしめ出て行つた。

ひとり残つた部屋には、暖房の音だけが流れる。

「一体、いつまで苦しめばいいんだ……………」

ギョツとシーツを強く握り、幾度も悩まされる悪夢を恨む。

消滅した世界で共に生きた仲間達。戦いで命を落とした者は諦めがつく。しかし、自分の帰りを待つ者達だけは、今も後悔している。他に手段がなかったのか……………と。

「シトリー……」

そして、愛する者への想い。

「……君に会いたいよ……」

行く当てのない心だけが、生きる為の理由だった。

第三十二節 隠匿

残り五日と十二時間。それが一応のタイムリミットになる。

ブランシエットがどんな魔女であるか解らない以上、その前に世界を救う手立てを考えなければならない。

それに……………

「ダンテとシンデレラ、アリスとチェシヤ猫の行方を追わなきゃな」

俺はおチビ達に同意を求めた。

コイツらは、どうにもただ雲隠れしてたわけではないらしく、繰り返す歴史とでも表現すべきか、ブランシエットを倒す手段を、コイツらなりに考えていたらしい。ま、結果は出ていないようだが、かつてコイツらがいた、古い保育園に逃れ、話し合いをしていた。

「だが、そればかりをしている時間はない。残り時間を、有意義に使わねば」

アサキはまだ眠ってるし、サマエルも行方を眩ませてる。今のところ、まともに会話出来るのはこのライオンだけだ。

「わかってる。だけど、まだ整理がつかないんだ。クダイとジャンヌが仲間で、兄貴もブレーメンに荷担してる。誰が何をしようとしてるのか……………はあ、頭いてーぜ」

「^{カルヴ}刻印に魔女の能力を奪う力があるのなら、お前さんの兄は、他の魔女も必ず狙うはずだ」

「だろうな。……………ただ、合点がいかないことが一つあるんだ。シ

ンデレラとアリスは、ジャンヌの元にいた。なのに、兄貴は自分が狩った二人の魔女の能力だと言ってた。もし、兄貴を仲間にしたのなら、シンデレラとアリスの身柄を差し出してもいいはずだ」

「…………ふむ。つまり、魔女の能力を引き渡し、戦力とするのが筋だと？」

そういうことだ。中々理解の早い獣だ。おチビの手下にしておくのは勿体ない。

その隣で、ちんぷんかんぷんな顔をしてるおチビ、カカシ、キコリとは大違いだな。

「理由があって匿ってるのと、ワケあってダンテと仲間割れしてるのでは、俺らの取る行動も変わってくる」

「でも、その真偽を確かめる余裕はないのよ」

「アサキ！大丈夫なのか？」

少し声が高かったか。起こしちまったようだ。

「心配ない。寝てる時間もないしね」

タフな女だ。全く。

「なあ」

アサキに感心していると、おチビが発言を求めるような声を上げた。

どうせたいした意見などないのだろうが、扱いを間違えるとややこしくなりそうなので許した。

「なんだ、おチビ？言いたいことがあるなら言ってみる」

「チビ言っくなっ！いーっ、だ！」

「わかったわかった。悪かったよ。で？ご意見は？“お嬢様”」

「うん。アチシが思うにさ、アロウのお兄ちゃんやブレーメンが、どうやって魔女のいる教会を探してたのか知った方がよくない？最後の魔女が殺されたら、もっと状況悪くなるよ」

「んなことはわかって……………」

言いかけて、俺はまた新たな疑問を持った。

タベ。兄貴とジャンヌは、俺達に戦いを挑む必要はなかったはずだ。

まだ見ぬ最後の魔女の能力を奪いに行くことの方が、ずっと効率的じゃないか。

シンデレラとアリスがブレーメンにいないのは、ジャンヌが知らないはずがない。わざわざ俺達を消さねばならない必然性がないんだ。

「おチビ、お前いいこと言っじゃないか」

「チビって言っくなっ！」

でも、それはなぜだ？

「アロウ」

考え込んでいると、ライオンが低い声で呼んだ。その視線は窓を見ている。

アサキがカーテンの隙間から外を見ると、どうやらただ事ではないことが起きてるらしい。

「アロウ（あんた）んちの“従業員”達よ」

俺も外を見る。外には、黒いスーツを着た奴らが、どうみても人を殺める為の道具を持ってこっちを伺ってる。

「どうやら、私達の居場所もわかるみたいね」

皮肉と溜め息を、アサキは器用に同時に出して見せた。

「……………決まりだな」

俺は、行くべき場所を確信した。

「何が“決まり”なのよ？」

「親父のところへ行く。知ってること、洗いざらい吐いてもらう」

「あんたのお兄さんがいるかもよ？ 毘だったらどうすんの？」

「毘なら、明確な殺意を持った“従業員”を派遣したりしないさ。兄貴は真神家には帰ってない」

もちろん推測だが、自信はある。

「……………わかったわ。確かに、ここで話し合ってるより先が望める

わね」

アサキが頷くと、おチビ達にも異論は見られない。

「でもどうやってここから脱出するのでございますか？」

キコリには、これから出す俺の答えがなんとなくわかってるみたいだ。敢えて聞くのは、その答えが、違うものであつて欲しいと願うからだろう。

だからと言って、変えるつもりはない。

「正面から挑むしかない！」

「そ、そんなあゝ」

不甲斐ない声を出したキコリを、おチビは小さな拳で叩いた。

「泣くな！」

…………泣いてたのか。

「準備はいいか？」

ライオンが起き上がり、窓を睨む。

全員が頷くのを確認すると、

「行くぞッ！！」

ライオンはそう言って、咆哮を轟かせ窓を割り、外の連中を吹き飛ばした。

「みんな！俺に続けっ！」

一番に俺が飛び出し、アサキ、ライオンの上におチビが飛び乗って続く。

真神の“従業員”は、銃や刀を構えるが、カルヴ刻印やアサキの足技には勝てない。

キコリやカカシも奮闘し始め、これならと思った。……が、多勢に無勢。あっさり囲まれてしまう。

「アロウ！」

アサキは指示を仰ぐ。

「チツ。………面倒くせー」

じわりじわり追い詰められ、判断を過ったかと思った時、轟音と共に“従業員”達が宙に舞う。

「クク。暇という言葉を知らんらしいな」

「サマエル！！」

「アロウ。事情が変わった。クダイが手傷を負ってるうちにカタを着けるぞ」

「な、なんだよ、それ？」

「五日目を迎えてはならん。金環日食が始まれば、それがこの世界の最後になる」

「……………なんだって?!」

どっから現れたのか、横に立ちそう言ったサマエルの言葉に、みんな耳を疑った。

「ちゃ、ちゃんと説明しなさいよ!」

我慢出来なかったのだろう。アサキが責め付く。

「待てアサキ。まずは親父んとこだ!そこで真相をハッキリさせよう!」

俺や兄貴。真神家が真実の神であるというその全てを。

一気に一日と十二時間もタイムリミットを減らされ、気が滅入るところだが、そうも言ってられない。

「急げっ!一秒でも無駄にしたくない!」

俺はみんなを率いて真神家を目指す。

ただ静かな真実なんてない。誰もが、終わりへ向かう扉を開け、一途の望みを手に荊の道を歩く。

棘の痛みだけが、生きてる証だと信じて。

第三十三節 行動

「クダイはどうした？」

ホテルのラウンジでコーヒーを飲むセツハは、戻って来たジャンヌに尋ねた。

「ひとりにしてくれとさ」

「勝手な奴だ」

世界を支配させてやる。そう口説いたのはクダイの方だ。わけもわからぬまま、魔女の能力を刻印^{カルウ}で奪い、真神家に背いたのだ。ケガをしているのはわかるが、これからの行動の指示くらいはもらいたい。

「瀕死だったんだ。半日程度の時間で目覚めたのが奇跡だよ」

当然、ジャンヌはクダイを擁護する。

「生きてるならどっちでもいい。それよりもだ、君らが保護した魔女はどこだ？」

それは自分の獲物だと言わんばかりに言う。

ティーカップとソーサーがカチャリと音を立て、説明責任と言うものをジャンヌに求めた。

「シンデレラとアリスなら、ダンテが連れて逃げたよ」

「ダンテ？」

「ああ。ブレイメンの室長をしてた男さ。ボクが裏切ったと知り、早々とね」

「ブレイメンはクダイが創ったんじゃないのか？」

「そうだった気もするし、違う気もする。いずれにせよ、捜さなきゃならない」

「ふざけたことを。タベだって、もう少し上手く演技出来なかったのか？……残り五日だぞ。それまで、段取りをキメておかねば、ブランシエットに対抗出来なくなる。わかってるんだろっな？」

「段取り？アハハ。勘違いしないでほしい。君は自分の欲望の為に戦うんだろ？ボクらはアドバイスはするが、君の仲間になるつもりはないよ」

「それはクダイの意思か？」

「クダイ様がどうお考えかは、ボクはわからない。でも、あの人はあの人の目的がある。ボクが優先するのは、クダイ様の目的だけだ。いちいち指図はしないでくれ」

「……………フン。女狐がっ！」

「フフ。褒め言葉と受け取っておくよ」

座らず会話を済ませたジャンヌは、

「そうそう、忘れるところだった。最後の魔女の居所だ」

折りたたまれたメモ用紙をセツハに渡す。

それを受け取り、中を見たセツハは、

「……………どういうことだ？」

「そのままさ。そこに魔女がいる。すぐにも行くといい」

「お前は来ないのか？」

「クダイ様の看護があるからね」

ジャンヌはセツハに判断を任せ、クダイの部屋へと戻った。

「……………信用ならない女だ。私を罠にかけたところで、あの二人にメリットはないだろうが……………一応、用心はしておくか」

クダイからの情報なら信用は出来る。しかし、ジャンヌのことはよく知らないのだ。そして、知る時間もない。

今セツハが思うのは、来たる金環日食の日にブランシエットに挑む為、魔女の能力を奪うことのみ。

「魔女達が自分達の世界を望まないのなら、私が望む」

例えクダイとジャンヌに利用されていようと、最後に笑えればそれでいい。

信じるのは、己の強固なる意思。

俺は、アサキとサマエル、ドロシーを連れ実家の前に来ていた。ライオン達は召喚されてない為、ここにはいない。ま、あんな奴らを連れて街は歩けないからな。これが自然な形だろう。

「どうした？行かないのか？」

サマエルの奴は、早急にクダイを倒したいらしい。

タベの話じゃ、五日後の金環日食は世界の破滅を意味してるらしい。そうクダイが言ったそうだ。

サマエルに勝つ気満々だったクダイが、迂闊にも口を滑らせたことは想像がつく。

にしても、そんな無茶苦茶な話があるかよ。結局、最後はクダイを倒さなきゃならないってことだ。そして、それはサマエルにしか出来ない。俺には力不足だ。

「なあ、サマエル」

「どうした？親父に盾突く勇気が失せたのか？……………クク」

「そーじゃねえ。そーじゃなくてさ、クダイは兄貴を利用してるのか？」

「……………さあな。貴様には悪いが、あのセツハという男に、利用価値

値が有りそうにも思えんが」

「……………もうわけわかんねーよ。疑問だけが頭にあってよ」

もしかしたら、サマエルは既に世界の真実に気づいてるのかもしれない。けど、返って来た言葉は、

「ひとつひとつ解決してる時間はない。本来なら、こんなことをしてる暇すら惜しい。……クダイは人間ではない。どんなに瀕死の状態でも、一日あれば息を吹き返すだろう。そうなる前にとどめを刺さねば、次は厄介になる」

「わかってる。兄貴と一緒にいるなら、真神家御用達の宿泊施設を利用してるだろ。親父に調べさせれば、5分で居場所がわかるさ」

そうだ。クダイを倒してケリがつくなら、真実を知るのはその後でゆっくりやればいい。アサキの記憶を取り戻すのも一緒に。

「行くぞ！」

真神家の尊厳の象徴のような大きな門を開ける。

これが、最後の戦いへの扉だった。

第三十四節 残骸

目を疑った。真神家の門をくぐり、玄関の引き戸を乱暴に開けると、そこには死体の群れだった。

「嘘……………」

「ふにゃあっ！」

アサキとおチビは目を覆い、惨事から逃れる。

その死体は、真神家で働く人達で、みんないい人ばかりだ。それなのに、誰がこんなことを……………

「鋭利な刃物……………それも刀剣の類いだ」

鑑識のように、サマエルが死体のひとつに膝をついて傷口を確認している。

「ジャンヌかクダイの仕業か……………」

俺の頭には二人の顔しか出て来ない。

「可能性は女の方だろう。クダイは相当深手を負ったはず。さっきも言ったが、回復まで一日はかかる。たった数時間で動き回れるとは思えんな」

それはお前の一方的な見解じゃないのか？サマエルよ。

「アロウ、あの娘は？」

アサキに言われ、俺はユラが気になった。

親父のことも、“別の意味”で心配にはなったが、気づいた時には屋敷の中を、ユラを探して走り出していた。

「アロウ！」

アサキの声も聞こえてはいたが、それどころじゃない。

この死体の群れを飛び越えながら、どうか無事でいてくれと願う。

「ユラッ！」

視界に入る襖だとか扉だとかを片っ端から開ける。

これだけ死体があると、ユラだけが生きてるとは思えなかったが、それでもこの目で確認するまではと、見たくもない惨事を見ていく。

この屋敷で、ユラだけが“普通”に接してくれていた。兄弟仲の悪い俺には、ユラは妹も同然だ。

使用人達の亡きがらを越え、辿り着いたのは親父がいつもいる座敷。

ついだ、親父の死体も確認しておこうと、襖を力一杯開けると、

「来たか…………アロウ」

「兄貴！」

兄貴がいた。それも、血まみれになって。

一体、どうなってるってんだ？

「……………してやられた」

「一体誰にやられたんだ！？クダイか！？ジャンヌか！？」

抱き起こすと、兄貴の右腕がないことに気づく。出血の大半が、その傷が原因だろう。俺のコートも赤黒く染まっっていく。

「私達は……………最初から騙されていたんだ……………」

会話さえままならないはずなのに、それでも必死に真実を告げようとする兄貴は、余程無念なのか、涙を浮かべている。

大嫌いな兄貴が、残された左手で俺の手を握る。

「騙されたって……………誰にだよ？」

「……………と……………父さんにだ……………」

「親父……………」

「い……………いいか、アロウ。世界は……………ループしている……………」

「……………な……………ループ……………」

「金環日食が起きると……………世界は振り出しに戻る……………あの日……………お前がこの街に帰って来た日にだ……………」

「い、意味わかんねーよ。なんだよ、振り出しに戻るって……………俺達はずっと生きて来たじゃないか」

「だ…黙って聞くんだ……………」

「聞けるかよっ！子供の時、いつも勉強教えてくれたじゃないか！
魚つりに行って、溺れそうになった俺を助けてくれたじゃないか！
喧嘩ばっかして、親父に怒られたのは？全部嘘の記憶だって言うの
か？！」

「……………この世界の balans。世界を不安定にする存在を消
す役割……………それが私達、真神家だ……………」

人の質問に答えもせずに、またわけのわからないことを言うのか。

「勘弁してくれよ、兄貴……………あんたがこんな状態なのに、そんな
話信じられるかよ」

これも……………

「アロウ……………越えろ……………」

真実なのか……………

「兄貴……………」

だとすれば……………

「世界のループを……………断ち切るんだ……………そして……………」

誰が……………

「金環日食の日の……………先へ行くんだ……………」

何の為に……

「きっと、そこにブランシエットはいる……………」

「兄貴？……兄貴ッ！？」

世界をループさせてるって言うんだ。

「なんだよ、こんな終わり方するなよ……………」

まだ喧嘩の決着はついてないだろ。むしろ始まったばかりじゃないか。

「アロウツ！いたよ！あのデパートの娘！ねえ、聞いて……………る……………」

息を切らした声でアサキが叫んでる。

ユラを見つけてくれたらしい。声色から、生きてはいるのだとわかる。

「アロウー！」

おチビもやって来て、

「……………こっちの動きがバレてるようだな」

サマエルも来た。

三人は、俺の腕の中の兄貴を見たのか、しばし言葉を発さなかったが、やがてアサキが、

「お兄さん……………殺されたの？」

気を遣うように言った。

「……………うんざりだ」

俺は兄貴を静かに寝かせ、立ち上がる。

「世界がループだとか、魔女だとか……………ハハ……………いい加減、疲れたぜ」

もういい。金環日食で世界が振り出しに戻るってなら、それでも構いやしないさ。

どうせクダイと親父が世界をループさせてるんだろ。そんな力を持つ奴に、どう足掻いても勝てるわけがない。

「後四日では、何も出来ねーよ。ゲームオーバーを待つだけだ」

どうしてこんなことを言ったのか。仲が悪かったとは言え、実の兄が死に、その犯人が親父だという事実がそうさせたのかもしれない。

「……………諦めるのか？」

サマエルは、なぜか残念そうだ。

やりたきや自分でクダイを倒せばいい。実力があるんだ、俺の意志を必要としなくてもいいだろ。

「ギブアップだ。もう無理……………」

諦めを口にした瞬間、頬が熱くなった。

「本気で言ってるの？」

アサキが俺をぶつたのだ。

「アサキ……………」

「昨日までの勢いはどうしたのよ！」

「……………んなこと言ってたって」

そしてまた一発。

「バカッ！私の記憶、取り戻してくれるって言ったじゃない！」

「……………それは」

「アロウが諦めたら、誰が私の記憶を取り戻してくれるのよ！」

また……………アサキが泣いた。俺の胸にすがり。

「……………いないのよ」

「……………え？」

「頼れる人が……………信じられる人があんたしかいないのよ！」

じんじんしてた頬の痛みは、今は胸を攻めていた。

何をやってんだろ……………俺。

カツコ悪いにもほどがある。

「…………ゴメン。どうかしてたよ」

気丈なアサキも、やはり女の子なんだ。記憶のない分、孤独感は半端じゃないだろう。それなのに…………俺はバカだ。

見れば、ユラは気を失ってるのか、サマエルに抱えられていた。

「…………守るものを得て強くなるものだ。男というのはな」

そう言ったサマエルには、守るものがあるのだろうか？失うものなんて無いんじゃないのか？

「アサキ。もう泣くな。残された時間、全力で戦おう。俺は約束は守る！」

まだ謎は残るが、挫折してる暇も立ち止まり考える暇もない。

「ふにゃあ~~~~！」

「おチビ。なんでお前が泣くんだ」

「だってえ~~~~、アロウがカツコ良く見えるからあ~~~~」

悪かったな。

「サマエル。兄貴が言うには世界はループしてるらしい。金環日食を迎えると、一週間前に戻るんだそうだ。だから金環日食の先に行けと」

コイツは知っている。気づいていると言つべきか。
だからこそ、今、サマエルの意見が聞きたい。

「クク。ループの世界か。だが、不完全な世界だ」

サマエルは抱いていたユラを、俺に委ねる。

「不完全………ループするこの世界がか？」

「そうだ。ループする世界など、実は珍しいものではない。形としては様々だが、どんなループの仕方であっても、ループによる世界時間が短期間であること。ループを可能としている者以外の記憶のリセット。そして、他世界からの干渉を受けないという絶対条件がある」

ホント、よく知ってるぜ。けど、何を言いたいのかはわかった。

「ループするこの世界にサマエル………お前がいる。それは三番目の条件を反古にしている」

「クダイがループの元凶かは別として、俺の侵入は予定外であり、不本意だろうな」

それは、ループを壊す希望ということだ。

「それとだな、金環日食の先にブランシエットがいるはずだつても言つてた」

兄貴も何かを知ったんだ。

「そもそも、三千年ごとにブランシエットと戦つてると言う割りに、ブランシエットの明確な情報が無さ過ぎる。これは俺の推測だが、魔女の存在はブランシエットが分散した姿だ。だから魔女を生贄にして、自分の姿を取り戻そうとするのかもしれない。しかし、それをさせるとループエンドとなってしまう。それを阻止し、ループを継続させるのが貴様ら口ザリオカルヴァなのだろう。その為の魔女狩りだ」

「魔女狩りが？生贄にされるのと変わらないだろ」

「生贄とただ存在を消されるとでは、その意味が大きく異なる。魔女狩りで魔女の存在を世界から消せば、ループは継続される。しかしだ、その手段も百パーセントではない。魔女の人数がゼロにならない。つまり、何人いようと必ず一人は残るのは、ブランシエット自身の存在が金環日食の先にあるからだ。最後の一人をどちらが占有するか。そこが“肝”なんだろう」

「魔女を狩るのはループ継続の確率を上げる為か。でも、ブレイメンが魔女を保護しようとしたのはなぜだ？最初からループが目的なら、俺達に力を貸せばいい話だ。親父がブレイメンと関係あるかはわからないが、戦いの行方によっちゃ、俺も兄貴も死んでいた。そうなったら、魔女狩りが出来なくなるだろ」

「きつとループ継続が目的ではない。本当の目的は別にあるはずだ。この前、チェシャ猫には言ったが、この世界は実験台にされている可能性がある。実験が成功しないからループさせる。貴様らはループ前の記憶が無いから、魔女狩りを始めてしまう。ブレイメンは実験の行方を見守る為に、魔女を保護しただけだ。そして、実験をしているのは……」

「クダイ」

「俺がこの世界に来た時より、時間の密度が濃くなった。つまり、俺もループに捕われたワケだ。クク……………とんだ災難だ」

災難だと思ってるにしちゃ、楽しそうだが。

「でも、ループエンドをするってことは、ドロシー達を生贄にすることじゃないの？」

アサキはおチビを見て言った。

そんなことはしたくないんだろう。

「魔女はブランシエットの存在のカケラ。生贄という表現は適切でないかもしれないが、魔女が存在しない世界が、この世界の健全な姿ということだ」

サマエルの“推測”が正しいなら、元々の世界の形ってどんななんだ？そう考えるのはアサキも同じだろう。

その“推測”を聞いたおチビ……………ドロシーは、自分の存在を悲しんでいるのだろうか？表情からは読み取れない。

「おチビ」

「……………アチシは大丈夫だよ。心配いらないよあ」

なんとか、救ってやることは出来ないだろうか。

「とにかく、クダイを探した方が早いわね。アロウのお父さんも行方不明みたいだし」

アサキの言う通りだ。

俺はおもむろに兄貴の亡きがらを漁り、手掛かりを探る。

スーツの胸ポケットから、兄貴がよく利用するホテルのレストランのレシートを見つけた。

「……………行こう。クダイはきっとここにいる」

ぐちゃっとレシートを握って言った。

決意新たに、目指すは人の領域を超えたクダイの^{もと}下。

ただ、気掛かりなのは、兄貴の右腕が無いこと。その残骸も無い。

それでも時間は寿命を擦り減らしている。

金環日食の向こう側へ行く為、俺達は前に進む。

第三十五節 既往

「セツハが殺されました」

ジャンヌの報告を聞き、クダイは苦笑いをした。そうする以外にリアクションが見当たらなかったのだ。

「佐一郎が動いたか」

「はい。刻印カルヴのある右腕を奪って」

刻ときは夜。金環日食まで時間がまた擦り減った。

「また、ループします」

残念そうな口調でジャンヌは呟いた。

「……………実験はまだ終わってない。まだ四日……………いや、三日か」

今日は足早に過ぎて行く。サマエルとの戦いで負った傷は、もう充分に回復している。が、今夜はどこへも出掛ける気はない。

わずかな確率で、今夜ここにアロウ達来る。本当にわずかな確率で。

「消滅した世界。しかし、消滅したとは言え、実在していた事実が存在する以上、時間上の過去へ行くことも可能……………そうでしたね？」

もうクダイから幾度と聞かされた話だ。クダイは酒を飲むと、自分

の世界の話より、自分が愛した異世界の話をする。だから、いい加減脳みそに刻まれている。

「僕は時空間を旅してこの世界を見つけた時、試してみたいことが出来た。ループし続ける世界に、未来を与えてやれるかをね」

「与えられたとして、それで何かわかるのですか？」

「ループエンドになれば、ループしていた間の時間の密度が一気に開放される。その力で時間軸を流れ落ちる、“過ぎた時間”を消し飛ばすんだ。そうすれば、僕が壊した世界の破片が飛び散り、見つけられるかもしれない」

「その破片があれば、消滅した世界に行けると………？」

「ジャンヌ。時間だとか空間なんてものは、人の知り得る知識では説明が付けられないんだ。例えば空間。形が無いのに確かに存在している。どうやって存在してるかわかるかい？」

ジャンヌは肩をすくめ、理解不能を示した。

「空間はね、例えるならとんでもなく薄い紙なんだ。それが幾重にも重なって存在している。コミックスだね。1ページ前は過去。1ページ先は未来。人はページを飛ばして未来へは行けないし、一度見終わったページは記憶の中でしか見れない。一言で言ってしまうば、それが空間と時間の概念だ」

「興味深い話です。………ボクには理解出来ませんけどね。でも、その概念を破って、クダイ様は過去へ行こうとなさってる」

「時間軸に世界が存在してる限り、過去へは行けるんだよ。ただ、過去で何かをやらかしても、現在に影響はなく“別の”現在が出来るだけだ。そして、その世界に干渉は出来ない。なぜなら、全く存在しなかった未来が、可能性として存在してるだけだからね。僕は……」

クダイは一端、言い淀み、

「僕は消滅した世界の破片を集めて、再生させたいんだ。破片の全てを集める必要はない。破片に宿るエネルギーの条件の満たされる集まれば、それでいい」

そんなことで、果たしてクダイの願いが叶うかは、ジャンヌには確かめる術はない。

「……その世界に、クダイ様の好きな女性はいたのですか？」

この質問は、何度も避けて来た。ただ楽しかっただけで、消滅した世界を取り戻すなんてしないだろう。

そこにいた仲間。なにより好意を寄せてた女性を取り戻したい……もう一度会いたいと願っている。クダイに好意を持つジャンヌにとって、それは苦しい現実ではあるが、それほどの女性なら会ってみたいとも思っている。

「いたよ」

ジャンヌの気持ちを知っていながら、気遣う様子もなく言った。

「エルフのね、王女様なんだ。……とても、綺麗な女の子だ。僕は彼女に恋をした。だから、もう一度会いたい」

聞かなければよかった。後悔しても遅かったが、本人の口からはつきりと言われると、胸をえぐられるようだ。

「……………そんなはつきりと言わないで下さい。ボクも一応、女ですよ」

取り繕う笑顔をした時、急に腕を引き寄せられ、唇を塞がれた。

「……………クダイ……………様」

「ジャンヌ。君には期待している。数百年をたった一人生きて来た僕には、頼れる者がいないんだ」

につこり笑う。反則的に。

演技だとしても、満足させられる。

「ズルイ人です……………あなたは。でも、そう言われてしまえば、ボクはクダイ様の為に働かざるを得ないでしょう。召喚主の命令に従うのが、召喚されし者の運命さだめなのですから」

「……………君を召喚してよかったよ」

ジャンヌの髪を一撫でし、ベッドから降りる。

窓際に立ち、銀色の月を見る。

「6回目のループを経て、世界の時間密度は濃くなった。これ以上のループは、世界から抜けられなくなる」

「ならば、アロウに手を貸して佐一郎を倒しますか？」

「…………いや。サマエルは僕が世界をループさせてと思っている。アロウ達は僕を倒しに来るだろう。受けて立たねばならない」

「サマエルがいない過去5回においても、アロウ達はクダイ様がループさせてると思っていました。サマエルがいる今回は、自然に違うルートを辿ることになると思っていたのに……………どうなさるおつもりです?」

「……………打って出る」

「具体的には?」

「アロウ達に真実を告げよう」

「上手く行くでしょうか?」

「かつてある男は、自分は傍観者だと言いながら、他人を思い通りに動かすことで世界に干渉していた。その時は、その男がそんなことをしていたなんて気づかなかったけど、そうすることで欲しい結果を手に入れてたんだ。僕は傍観し過ぎてた……………欲しいものがあるなら、最後は自分自身で動かなければならない。それがセオリーだ」

「……………その男は、どうなりました?」

クダイが言うのは、クダイが壊した世界にいた男だろう。だとすれば、世界と共に消滅したはずだ。そして、それは男の欲しい結果ではなかったはず。

「…………… 去って行ったよ。世界が消滅する前に。彼もまた強く願う
野望があった。…………… いつか、また出会う時が来るだろう」

その横顔は、その時を楽しみにしていることを表していた。

クダイがジャンヌに向き直ると、ジャンヌが静かに頷く。そして、
クダイの身体が強い光を放つと、一匹の猫に変貌した。

チエシヤ猫だ。

「行くぞ、ジャンヌ。金環日食が訪れる前に仕事を済ませるんだ」
神が賽を投げた。

第三十六節 正体

行動が遅れたのは、親父に殺された使用人達を弔ってやったからだ。

弔うとは言っても、大広間に亡きがらを並べて顔をタオルなんかで覆ってやったただけだが。それでも小さな頃から世話になった人達だ。せめてもの気持ちだ。

「やけに静かな夜ね」

俺が運転するミニバンの助手席で、アサキが言った。

この街の名物でもある大橋を走っているのだが、俺達以外の車を見ない。まだ眠りにつくのにには早い時間なのに。

「でも綺麗よ〜」

二列目のシートにいるおチビは、夜景に見惚れてとてもこれから戦いに行く感じじゃない。……気楽なもんだ。

「チビ。あまりはしゃぐな。遊びに行くんじゃないんだぞ」

「わかってるよ〜だ！いいからアロウは前見て運転しろ！」

なんて言い草だ。このガキ。いろいろ心配してやってるのに。

「ダメよ、ドロシーちゃん。女の子がそんな言葉遣っちゃ」

「だつてえ〜」

そうおチビを窘めたのは、ユラだった。

気丈に振る舞って見せてるが、まだあの惨劇のショックから立ち直ってるようには見えなかった。まあ、一日も経ってないんだから無理もないか。むしろ、平静を装っていることを讃えるべきだろう。

「ユラ、着いて来ない方がよかつたんじゃないか？」

「いいえ。みなさんといった方が不安が解消されますから。私の方こそ、みなさんのご迷惑にならなければいいのですが」

ホント、健気と言つか何と言つか。ショックを隠してまで俺達に気を遣うなんて。いいお嫁さんになるよ。

事態は説明してあるのだが、それを考慮しても、ユラの立ち直りは素晴らしい。

「迷惑だと思うなら、おとなしくしててよね。戦闘になったら、あなたのことまで庇えないし」

なのに、アサキはなぜかツンツンしている。

「アサキ。そんな言い方はないだろ」

ユラを擁護する言葉を発したのはもちろん俺だ。

サマエルは3列目のシートに腕を組んで目を閉じたままだし、おチビにそんな器量はないからな。

「だって、クダイとジャンヌは強敵よ？クダイはサマエルが相手してくれるとしても、ジャンヌはアロウと私の二人掛かり。そこに加えて、アロウのお父さんがいたら？ダンテまで出て来たらどうすん

のよ？」

「だからってだなあ……………」

「大体、アロウはこの娘に甘いのよ！」

「ユラは何も知らない“一般人”だぞ！甘くしてるわけじゃない！」

「どうかしら！鼻の下伸ばしてみっともない！」

「あのかなあっ！」

「何よっ！」

思わず怒鳴り、アサキを睨む。

「アロウツ！危なっ！っ！」

前方から視線を反らした俺に、おチビが叫ぶ。慌てて前を見ると、距離にして数十メートル先に猫がいた。

「うわっ！」

条件反射で急ブレーキをかけると、ABSが作動する。このシステムの優れているところは、制動距離の短縮なんかじゃなく、ブレーキを踏んだままでステアリングを切れるところにある。つまり、速度を落としながら対象物を避けれるのだ。……………なんてことはどうでもよく、俺は力一杯ステアリングを切った。

「きゃあっ！」「ふにや……あっ！」

アサキとおチビは悲鳴を上げ、ユラは……何も言わないところを察するに、目を閉じて祈ってたりするんだろ。サマエルはどうでもない。車が橋から転落したって死にやしない。

ミニバンの柔らかいサスペンションは重心移動を瞬時にさせ、猫を上手くかわしてくれた。が、思いきりロールしたミニバンは、挙動を戻すことなくスピンをすることで停車した。

「……………みんな、無事か？」

運転をしてた俺はステアリングが支えになり、身体を振られることはなかったから大丈夫だが、他のみんなは……………と、一人一人確認する。

「いったあ……………」

アサキはフロントのピラーに軽く頭をぶつけたようだ。

「ふにいゝゝ」

おチビは転がって身体を打ったらしく、それをユラが撫でていた。

サマエルは……………

「フン。猫など轢いてしまえ」

不機嫌そうに俺の顔を見て言った。

「……………ったく、なんでこんなところに猫がいるんだ」

俺は車を降り、疫病神ならぬ疫病猫に近寄った。せめて文句のひとつ

つでも言つてらやなきや気が済まない。そう思つて口を開きかけると、

「性格が運転に現れてるぞ」

「……………!!……………おま……………チエシャ猫!!」

このバカ猫、コイツ何やつてるんだ。

チエシャ猫の名を聞くと、みんなも車を降りて来た。

「チエシャ猫……………あんた、こんなところで何してんのよ!」

思つてることをアサキが言ってくれる。チエシャ猫は悪びれもない顔で……………つて、猫が悪びれた顔なんて知らないけどな。

一様に全員がチエシャ猫をただ見てる中、一人突っ掛かる話し方をした奴がいた。

「いい加減、小細工するのはやめたらどうだ?」

サマエルだ。

「フフ……………バレてたか」

ふうつと息を吐いたチエシャ猫は、その毛並みのいい身体を光らせる。

誰もが驚き、強い光の刺激を受けていると、そこにはクダイがいた。

「小細工してたつもりはない。こんなことでもしてないと、同じ時間を何回も過ごすなんて気が障れてしまうんだよ」

そう言ったクダイは、いつもの汚らしい格好ではなく、胸に穴の空いた純白の鎧を纏っていた。

第三十七節 嘲笑

「なんの悪ふざけだ」

俺は込み上げる怒りを抑えつつクダイに聞いた。

言いたくもなるだろ？なんだってチエシヤ猫がクダイになるんだ？

「怒るなよ。サマエルから聞いてるんだろ？この世界は短い期間を繰り返してる。そんな世界を今回で6度。先の読める世界を生きるには、洒落も必要なのさ」

「洒落で済ませないでくれるかしら？笑えないんだけど」

アサキがクダイにじり寄る。すると、スチャツと金属がじゃれる音がした。

「曲がりなりにもクダイ様は神様だ。下手な行為は身を滅ぼすよ」
ジャンヌが剣を抜いた音だった。どっから現れたか聞く気はない。演出のつもりなら、尚更聞きたくないからな。

「忠告ありがとう。でも、悪ふざけをする神様を拝む気はないから」
「ハハ。強気だねえ。その強気のまま、ラストに臨んで欲しいもんだ」

アサキの態度も、ジャンヌにしてみれば他愛もないことなんだろう。世界のループが真実なら、クダイとジャンヌは既に5回は今と同じ

情景を見て来たと言える。だから、アサキが怒ろうと気にも止めないのだ。

「クダイ…………説明しろ！お前がチェシャ猫だったのか？！」

「見たまんまだよ。そして、君は同じことを前日も言った。違う場所だったけど」

俺が何て言うかまで知ってるんだろう。そんな口調だ。

「ここで決着を着ける気か？」

「勘違いしないでくれ。世界をループさせてるのは僕じゃない」

「なら誰がやってるんだ？！」

「君のお父さんだよ。真神佐一郎。時間を切り離し、世界をループさせた張本人だ」

「……………親父が？」

「セツハから聞いたんじゃないのかい？」

ああ。聞いたさ。けどな、何を信じたらいいのかもわからないんだよ。

「親父が……………何の為に世界をループさせてるってんだ！」

「それは本人から聞くといい。息子を殺してまで世界をループさせる、そのわけを」

……ム力つくぜ。知ってても言わないなんて。この“神様”は、よほど人の命を弄びたいらしい。

「じゃあ何しに來たのよ！」

「今までに何回ループをしてるかは、僕らにもわからない。けど、時間密度が濃くなって来て、ループを断ち切ることが不可能になるかもしれない。だから、君達に勝ってもらわないと困るんだ」

アサキに説明したクダイは、

「こんなところで往生するつもりはないんでね」

そう付け加えた。

「……手を貸してくれるってことか？」

今となっちゃ、クダイに頼るのは不本意ではあるが、いてくれたら確実に勝てるのだろう。

俺の記憶にはない戦いに。

「手を貸す気はない。あくまで、君達自身に勝ってもらわなきゃならないからね」

ジャンヌが前髪を指で弾いて言った。

「……アロウ。君達は、佐一郎の前に敗れ去る。それだけがこれから君達に待ってる事実だ」

いつになく真剣な眼差しをクダイがした。きっとこれからクダイが話すことは、俺達にとって大切なこと。忘れることは許されないことだろう。黙って聞くしかない。それが俺達の為だ。

「君達が敗れた後は、佐一郎が再び時間を戻し、また同じ時間を始める。つまり、佐一郎さえ倒せばループは終わる……そのはずなんだ」

でも、気にかかることがあるんだろ？だからそんな顔をしてるんだ。

「……………ダンテがいただろう？彼はグリムという別名を持っている。5回のループの中で、彼はいつも魔女を連れていなくなる。最後まで姿を見せないんだ。だから僕とジャンヌは、今回彼に接近して行動を監視してたんだ」

「なら、なぜみすみす逃げられた？」

サマエルはクダイを疑っているのだろうか？それとも、他に思惑が……………？

まあ、コイツも胡散臭さ全開な奴だからな、俺から言わせりゃお互い様だろ。

「今回はイレギュラーな事態が在りすぎた。まずは君だ。サマエル君が現れたことで、急激に時間は密度を増した。佐一郎も、明らかに動揺してたしね」

「……………フン。だがそれは、貴様達にとってもそうだったわけだ」

「ああ。君が現れたおかげで、何もかもが崩れ始めたんだ。それだけじゃない。これまでのセツハは、佐一郎に従順で、アロウを殺す

のに躍起だった。最後は同じ結果になったけど、それでも、アロウに対して思いやりを抱いていた。ずっと彼を見て来た僕には驚くことだった」

兄貴が……俺に思いやりだつて？

「それに……」

クダイはおチビを見た。

「その小さな魔女も、最初に姿を眩ませてから、ずっといないままだった。……細かいことを言えば、もっとあるんだ」

「そんな話はどうでもいい。伝えたいことがあるなら、さつさと言え」

サマエル……こちらから責め付かなくても、ちゃんとクダイから言ってくれるって。

「フツ……なら話を戻す。佐一郎が時間を戻してるのは間違いない。だが、行方を眩ませているダンテと二人の魔女。そして、最後まで姿を見せない魔女。これだけがずっと引っ掛かってるんだ」

「でも、ループを終わらせるなら親父を倒すしかないんだろ？」

「まあ、そういうことかな」

なら、俺からも聞きたいことがある。

「クダイ。サマエルが言うには、魔女ってのはブランシェットの分

散した姿らしいんだが………どうなんだ？お前の意見………てか、真実があるなら聞かせてくれ」

「………あながち間違いじゃないかもね」

「かも………って。何か知らねーのか！？なんでもいい！」

「どうしたんだ………？」

「いいから教えてくれっ！」

「………そこまでは僕も考えたことはないよ。僕だってブランシェットを見たことがないんだ。何とも言えないよ」

役立たずが。言いたいことだけ言ったら知らんぷりかよ。

「そんなにがっかりされても………ね」

「………チッ。まあいいさ。でもまだ聞きたいことがある！」

「………どうぞ」

「親父はお前の存在をどう考えてるんだ？」

「この世界の一部。その程度だと思うけど？実際、世界が始めに戻ったら、僕は記憶がリセットされてるフリをしてたし。もちろん、初対面の時はやっぱり動揺してたけど、元は殺し屋が雇われていたんだ。その人物が僕に変わっただけのこと。すんなり受け入れられたんだと思うよ。“こういうこともあるだろう”ってね」

「……………親父が時間を戻す理由は？」

「いいや。未だにわからない。息子を殺してまで得たい何かがあるのか……………でなけりや、狂人だよ」

多分、本当に何もわからないんだと思う。クダイは自分の目的さえ果たせばいいんだろう。

だから、細かいことを気にしないんだ。

それにしても、親父は一体何がしたいんだ？

「……………で、親父はどこにいるんだ？知ってるんだろ？」

「この橋を渡った先に、今は使われてない教会がある。そこにいるよ」

また教会か……………なんだってんだ。

「……………行こうぜ。親父をぶっ倒して、金環日食の向こう側とやらに行くんだ」

同意するように、アサキもおチビも、ユラも頷いて車へ戻る。

「サマエル？」

一人、まだクダイを睨んだままだ。

「僕の顔に何かついてるかい？」

「貴様が元凶でないというのが信じられなくてな」

「アハハ。勘弁してくれ。好きで紛れ込んだ世界だけど、もう飽き飽きしてるんだ。君達に勝ってもらわないと困るくらいなんだ」

「それにしてはたいした助言じゃなかったな」

「僕は始めて自分から動いたんだ。未来を伝え、真実を明かす。本来知ることのない情報を得たアロウ達が、これまで通り佐一郎に敗れるのか。奇跡を起こすのか。少なくとも、奇跡が起きる確率が上回ったと認識してるよ。……君もいるしね、サマエル」

「……………」

何か言いたげなサマエルだったが、諦めたように踵を返した。

「クダイ」

俺は聞かねばならないことを、もうひとつ思い出した。

「なんだい？」

「真実の神だとか言ってたな。俺を」

「そうだよ。最後まで佐一郎に抗うたった一人。君は知らないだろうが、その右手の刻印^{カルグ}には、とてつもない力が宿っている。魔力の力を吸収し、自分のものにしてしまうような。それを出来る存在は、君とセツハと佐一郎だけだ。神じゃなかったらなんだって言えばいい？」

なんかしっくり来ない言い回しだ。それだけなのか……………？

「さあ、行くといい。君自身の未来の為に勝利して来るんだ」

テメエの為でもあるんだろーが。

そう言いたいのを我慢して、俺はクダイとジャンヌに背を向けた。

全て終わらせる為に。

「佐一郎を倒してくれるでしょうか？」

アロウ達が去った後、クダイとジャンヌはまだその場にいた。

頼りないアロウに不安を抱くジャンヌは、クダイから確かな言葉が欲しかった。

「サマエルもいる。大丈夫なんじゃないか？」

なのに、あまりに軽い返答だった。

「しかし、あのサマエルという男、彼らにとって吉となる人物とは思えません」

「まあね。大体、サマエルの狙いは僕だ。アロウ達を見届けた後は、僕に戦いを挑んで来るだろう」

「まさか受けて立つなんてこと……………」

「拒む理由はない」

「クダイ様！」

「悪魔の神と不死鳥を知る者ならば、それだけで僕に挑む権利がある」

珍しくワクワクしているクダイに、これ以上は水を差すまいとした好きであるが故に、その笑みが眩しく感じる。

「それよりも、あの着物の女の子……………」

クダイは、アロウ達が消えた方向を見つめ、

「ただのお手伝いさんだとばかり思っていたんだが……………」

過去5回において、この時点でユラがいたことはない。気にかかる。

「……………いや、考え過ぎかな」

だからと言って、ユラから何か特別なものを感じたわけではない。余計な勘繰りを入れるのは止そうと、「フッ」と笑った。

伝えるべき真実は伝えた。後は傍観していればいい。
世界の行く末に、神は人を嘲笑う。

第三十八節 内面世界1

教会……………か。

車を降り、とても教会とは思えない……………言つなれば城に近い。
そんな教会だ。

「こんな教会……………この街にはなかったぞ」

俺は思わず口にした。実際、それは事実で、幼い頃の記憶を辿つても、こんな建物はなかった。

「最近建てられたんじゃない？」

そう言ったアサキの考えは最もなのだが、それとは違う雰囲気。上手くは言えない……………そう思つてると、

「突発的構想具現という奴だ……………」

サマエルがわけのわからない言葉で説明した。どうせなら、ちゃんと話せ。

「突発的……………何？」

アサキが俺を代弁するようにサマエルに聞いてくれた。

「突発的構想具現……………つまり、時空の歪みから時間を“引き抜き”、想像するものを具現すること……………なのだが」

カツツカツツと、鎧の靴音を立て突発的構想具現による教会の聖堂

入り口の前に立った。

悪どいツラはしているが、こういう雰囲気によく溶け合う男だ。神に仕えてたようなことを言ってたが、あながち嘘でもなさそうだな。まあ、百歩譲っても天使なんかではないだろうが。

「人間に出来る技ではない」

言い終えるのと同時に、サマエルは聖堂の扉を開く。

「これは……」

俺の……いや、この場にいるみんなの目に飛び込んで来たのは、淀んだ空気を含む異次元的な空間。それが扉の向こう側にある。

「な、なんなんだ……」

「見ての通り、異次元空間だ」

それは何と無くわかる。俺が知りたいのは、なんでそんなものが扉一枚を隔てて、そこにあるかってことだ。

「真実の神……クク。納得した」

一人で納得するな。

「サマエル……」

「貴様の父親は、どうやら世界のわずか十日ばかりを時間から切り取り、その十日間の世界を自分の意識の中へ沈めたんだ」

……また理解に苦しむことを。

「なあ、サマエル。言いたいことがよくわかんねーよ」

「クク……簡単な話だ。切り取った世界を丸ごと喰ったんだ。：

……例えるなら、この世界は貴様の父親の心の中」

親父の心の中……内面世界か。そういえばこんな話を聞いたことがある。個人が何かを強く想うばかりに、その個人の内面世界に他人が囚われてしまうことが実際にあると。それも、当の本人は自覚していないという。

そういうことを言いたいんだろ？

「親父は……それを自分の力でやったのか？」

「ロザリオカルヴァとしての力とか……」

アサキが俺を見る。

「そんな力が刻印^{カルヴァ}にあるなんて、一度たりとも聞いたことがないぜ」

「ただ言ってみただけよ。私に聞かないで」

お前なあ……。

「あ、あのう……先に進んで見てはどうですか？」

話が進まないのを見兼ね、ユラが遠慮がちに提案すると、

「あんたに言われなくったって、わかつてるの！」

アサキが強い口調で言った。何もそんな言い方しなくてもいいだろ。

「アロウ。時間は有効に使うべきだ」

サマエルに仕切り直された俺は、自分の頬をパシッと叩く。

猶予は72時間を切った。そして金環日食の向こう側へ行くんだ。ブランシエットがこの世界に何をもたらしてくれるのかは知らないが、兄貴はブランシエット会えと言ったんだ。ブランシエットに会って物語は終わる。

「行くか……………」

親父……………兄貴を殺してまで何をする気なのか、しっかり聞かせてもらうぜ。

実存する世界と親父の内面世界が融合したこの世界で、俺達は唯一、自由を許された人間なのかもしれない。

右手の刻印が熱く疼いている。

ロザリオカルヴァの血が、目覚め始めていた。

第三十八節 内面世界2

異次元空間。そこは何も無い空間だった。

先頭をサマエルが歩き、その後を俺達は着いて行く。

「うげ、気持ち悪い」

おチビが拒否反応を起こしていると、どういつ連鎖か不明だが、ライオンとキコリ、カカシが現れた。

「いきなり現れるな」

一応、苦言を呈しておく。

「そんなことを言われましても……」

キコリがあくせくして答えた。

どうやら、自分らの意志とは関係がないらしいし、もちろんおチビも召喚していない。

「召喚待機してる者達は、磁場の強い場所ではその姿を隠してられない。特に、こんな奇っ怪な空間は磁場の典型だからな」

そう説明してくれたのはサマエルで、

「でも、これも親父の内面世界なんだろう？」

「そればかりではないと言っただろう。もはや、現実も虚実も皆無だ。五感で感じる全てがこの世界の全て。考えるだけ無駄だ」

なら難しい説明をするな。

「なんだかよくわからぬが、ワシらを巻き込むのだけは勘弁してくれ」

と、ライオンが弱気なことを言いやる。

「その図体で言うな。こっちはむしろ頼りたいくらいだ」

前に助けてもらった時は、頼れる奴らだと見直したんだが……宛てにしない方がいいか。

「万が一の時は、ドロシーちゃんのことだけでも守ってあげてね」

こんな時でも、ユラは優しく他人を思いやれる。その優しさが通じたのか、

「心配ご無用！我が三銃士はやる時はやるんだから！」

ドロシーは胸を張りポンツと一叩きする。ユラは笑顔で応え、同じようにライオン達にも微笑んだ。

激励の意味でもあるんだろうか？なんにしても、ライオン達も悪い気はしてないようだ。

「談話もいいけど、気合い入れ直した方がいいみたいね」

アサキが立ち止まり、ただ一点を見る。そこには、

「これはまた随分と仲間を連れて来たな……アロウ」

「親父……………」

親父がいた。

「……………ループさせてるんだってな」

何を言っているのかわからず、とりあえず思いついたことを口にした。

「フツ……………幾度も重ねた時間で、唯一今回のお前は真実に辿り着けたか」

「それだけか？」

「それだけ……………とは？」

「ふざけんなっ！兄貴や、屋敷のみんなを殺しただろっ！他に言葉はないのかよっ！」

「私に懺悔をしろと言いたいのか？」

「親父ッ！！」

「心配せずとも、どうせまた時間が戻る」

「戻すのはテメーのさじ加減じゃねーかつ！」

興奮し、感情が抑制出来ない。

「落ち着け」

そんな俺の肩を叩き、サマエルが言った。

「貴様に聞きたい。どうやって時間を操る術を手に入れた？」

その問いの真意は、サマエルがまだクダイを疑っている証拠でもある。知的探究心の為に聞いたとは思えなかった。

「我々ロザリオカルヴァの力は、何も妖かしを狩るだけのものではない」

「フン。だとしてもだ、時間を切り取るなんてことは、神でもそう簡単に出来ることじゃないんだよ」

「……………聞いてどうする？」

「さあな。それは俺が決める」

「フツ……………面白い奴だ。だが、お前の求める答えはない。私が時間を切り取り、世界をループさせている」

すると、親父は全身の筋肉に力を入れる。歳のわりに屈強な肉体を持つ親父だが、見る見るその姿を人ではないものに変えていく。

「オオ……………ッー!!」

角まで生え、額には瞳がギョロリと現れた。

「妖……………かし？」

俺にはそういう風にしか見えなかった。

「…………… どうかね？ 私はもう人ではない。時間さえ操る神になったのだ…………… ロザリオカルヴァの力と共にッ！」

疑う余地はない。しかし、俺はまだ信じられないでいる。

「…………… アロウ」

「なんだ、サマエル」

「逃がした方がいいかもしれん」

サマエルが、アサキ達のことを言ってることはわかった。

コイツがそう言うなら、それがベストなんだろう。

「アサキ！ ユラ達を逃がしてくれ！」

「逃がしてって…………… アロウはどうするのよ！？」

「俺は……………」

サマエルと目が合う。そうだ、答えは決まってる。

「親父を倒す！」

「む、無理よ！ あんなの、化け物じゃない！ 私にだってわかるわ！」

「それでも戦う！ 許せねえよ…………… 兄貴や、屋敷のみんなをあんな

殺し方したんだからな！」

その覚悟と決意を感じたのか、アサキはユラと、おチビとその三銃士を連れ走って逃げる。

サマエルは剣を抜き、俺は刻印カルグの力を開放する。

挑むはバカ親父。そう思い、踏み出した時だった。親父が右手から波動を出した。

咄嗟に避けた俺とサマエルだが、それが悲劇を生む。

「……………ッ！！」

俺は誰の名前を呼んだんだろう……………。自分でもわからず、ただ振り向いた格好で成り行きを見ているしかなかった。

波動は、逃げるアサキ達に向かって飛んで行く。それに気付いたアサキが、ユラを抱え込み脇へ飛びのける。

ライオン、キコリ、カカシも、それぞれ上手く避けてくれた。
そして……………

「ドロシー……………ッ！！！！！！！！！！」

叫んだのはライオンだった。地鳴りのように野太い声も、虚しいだけの空砲。

小さな身体で、誰より先頭を走っていたなんて、思いもしなかった。

一度は転んだおチビ。そのまま起きなくてよかったのに……………な
んで遅しく起き上がったたりしたんだ。

「そんな……………嘘だ……………」

俺はその一部始終を見ていた。一瞬の出来事なのに、間際の表情さ

え脳裏に焼き付いた。

「悲しむな。どうせ生き返る命だ。涙で弔う価値もない」

親父………ッ！二度と生き返らないように、テメーの存在ごと消してやるッ！！

第三十九節 失楽

「お前達は覚えておらんのかもしれんが、同じことを何度も繰り返して来たのだぞ？　そう思えば、悲しむ理由などないはずだ」

親父は自分のしたことを正当化する。

「うるせえっ！！あんな小さな子供にまで手をかけるとは……………外道も過ぎれば鬼畜より劣る！　大体、何の為に世界をループさせてるんだッ！」

「……………“時間の概念を作り替える為”だ」

「何だとッ？」

「時間とは、世界によつては進み方が異なると言う。この世界での一日が、ある世界では一年になることもあるんだそうだ」

「だったらなんだってんだ！　何が不満なんだッ！」

「不満があるわけではない。私はただ、無常に過ぎて行く時間に“果て”を作り、時間の限界の中でだけ人が存在する世界を築きたいのだ」

俺には、親父が何を言ってるのかさっぱりだが、

「……………時間に喰われたか」

サマエルには、はつきりとわかってるらしい。

俺が怒りに困惑を混ぜていると、

「つまりこういうことです。……全ての時間に“ゼロ”地点と、“範囲”を決めてしまい、永遠に未来にだけ流れる時間ではなく、“範囲”の中でだけ存在する時間を作ると」

おもむろに説明したユラだったが、それでも俺にはわからない。

「そうになると、どうなるんだ？」

「時間に“範囲”が設けられれば、その世界は時間に支配されることがなくなります。……そうですね？佐一郎様」

こんなにも自分の考えをはっきりと伝えられる子じゃなかったはずだ。

使用人のユラに問われても、主人である親父は不快な顔を見せず、

「私の考えを理解出来る者がいたとは……」

そのことを喜んでるように見える。

だが……

「時間をどうしようとワシらには関係のない話だ」

ライオンが眉間にシワを寄せ、その巨体で俺とサマエルを押し退ける。

「我が主を殺した罪、償ってもらいますよ！」

キコリも、表情からは伺えないが、怒りに震えている。

「ドロシーちゃんの仇！」

カカシの声にも……………。

「妖かし風情が……………口を慎め！」

「ガルルル……………貴様の首を食いちぎってやるッ！！」

親父にライオンが襲い掛かる。続くようにキコリとカカシも。

しかし、それは無謀だと知る。

「いかんっ！アロウ！避けるッ！！」

サマエルはそう叫ぶと、レポートでもしたかのように消え、アサキとユラを両脇に抱え上げ高く跳んだ。

俺も言われるがままに、また脇へ飛びのく。

「ガオオオオッッッ！！！！」

その咆哮は、親父の全身に衝撃を与えたはずだ。普通の人間ならば、全身の骨さえままならない状態に陥る。

……………なのに、

「この程度でロザリオカルヴァを倒せると思ったかッ！！」

おチビを……………ドロシーを消し去ったように、カルヴ 刻印のある右手から波動を放ち、

「グオオオオツッ！！！」

ライオンを……………

「うわああああっ！！！」

キコリを……………

「ぎゃーっ！！！」

カカシを……………消し去って行く。

ドロシーを失ってすぐに。仲間と呼ぶには絆の細い奴らだけど、大切なものを壊されたような感覚だけが、俺の胸を貫いた。

塵にもならず、虚空の彼方へ消えた三銃士。

「愚か者めらがっ！身の程を思い知れッ！！」

「親父ツッ！！」

無意識に肉体が動いた。いや、動いていた。気付いた時には、カルヴ 刻印が光り輝き、親父の頬に拳を挟込んでいた。

「ぬわアッ！！」

会心の一撃。親父は膝を着いた。

「アロウ……………ッ！！」

身体内部が熱く燃えるようだ。

立ち上がり、俺を睨む親父の顔には、驚きも混じっているよう

だ。

「ハア……ハア……ぶっ殺してやるッ！人の命を弄ぶようなクソ野郎はよーッ！！」

内部の熱さが皮膚を突き破る。血液の循環が激流の如く流れ出し、髪が逆立つのがわかる。

「アロウ、まさか……お前まで……！！」

親父……覚悟してもらっぞ。そのツラ、跡形無くなるくらいぶん殴ってやる。

「二十一年生きて来て、今だけはあんたの血を引いていてよかったと思ったことはない」

額に激痛が駆け抜け、俺にも第三の目とやらが備わる。

「何と言うことだ……私でさえ何度も繰り返した世界で手に入れた力を、こんなことで……！！」

「バカかテメーは。何度も繰り返して来たのは、俺も同じだ！……そうしたのは、あんただろ！」

「おのれっ！アロウッ！この世界に支配者は一人でもいいのだッ！！」

親父が殴り掛かって来る。だけど、焦る必要もないくらいあっさり避けられた。

「くっ！！」

今度は波動。だが、それすらも恐れるに足りない。今の俺には。

「サマエル!!」

お前には頼みたいことがある。

「アサキとユラを連れて逃げてくれ!」

「……………貴様はどうする気だ?」

「知れたこと!コイツを倒すツ!!」

ロザリオカルヴァとして戦う敵は、鬼畜の所業を行うロザリオカルヴァ。

第四十節 人害

元の世界。

アロウの意志を尊重し、サマエルはアサキとユラを連れて戻って来た。

「離して！」

アサキはサマエルの手を振りほどき、わずかに距離を取る。

サマエルはユラの身体も離し、ユラが丁寧にお辞儀するのをどう反応していいか困ったような顔をした。

「フツ。礼を言うならアロウに言え」

と、照れを隠すようなことを言うと、

「ねえ！なんでアロウを置いて来たのよ！」

一人不機嫌なアサキが毒吐く。

残して来たアロウが、佐一郎と同じ力に目覚めたにしても、勝てる確証などない。サマエルがいてこそその戦いのはずなのだ。

「これはアロウの戦いだ。アロウが一人で父親へ挑むと決意したのなら、尊重してやるのが筋だろう」

「あ、あんだねえ……………」

「それに、俺にはやることがある」

「やること………?」

サマエルは、そのまま先を見つめる。

その視線を追うように、アサキとユラも先を見つめると、

「アロウはようやく真実に辿り着きました。しかし佐一郎は、それすらも重ねた時間のひとつだと言い、自分の勝利を疑わないのです。果たして、アロウは佐一郎を倒し、この世界に未来をもたらすことが出来るでしょうか」

紙芝居の語りのような口調で、クダイは含む言い方をしながら現れた。

「クダイ………」

サマエルはアサキとユラの前に出た。自分の客だからだ。

「またループするか、金環日食を越えるか。その前に君と戦ってみたい」

クダイにも芽生えた好奇心。

「その好奇心が、貴様の後悔になるかもしれんぞ」

と、サマエルは軽い揶揄で忠告する。

「その言葉。そのままそっくり返すよ」

クダイは二本の剣を手にとると、ダーインスレイヴをかざしてくるくる回す。そこに穴が開き、

「来いっ！サマエル！」

クダイが穴の中に吸い込まれて行く。それを見て、サマエルもまた穴に近付き、

「貴様らはアロウの帰りを待て」

そう告げてクダイを追う。

「勝手な奴！」

残されたアサキはやり場のない怒りを噛み締めるしかなかった。

自分の中の眠っていた力が目覚めると、それは俺にとって絶対の自信となった。同時に、背負った運命と言うべきか、己の役目を果たすが為に、刻印の従者^{カルヴ}ロザリオカルヴァとして最強のロザリオカルヴァに挑んでいる。

「うおおーッ！！」

思い描くように肉体が反応してくれ、数分前には脅威に感じていた

親父も、恐れる因子とならない。

「ぐはっ……………何と言うパワーだ……………」

これまで、何度世界をループさせて来たのか知らないが、それももう終わりだ。

親父がふらつく。ロザリオカルヴァとしての力も、若さに比例するみたいだな。

「我が息子ながら、見事としか言いようがない……………」

「減らず口はいい！さっさと終わらせる！覚悟出来てんだろーな！」

「フッ……………生意気な口を聞くまでに成長したか」

「黙れ！今更何を父親ぶってやがる！」

「お前はセツハと違い、自分の生き方というものを持っている。あいつがずっと欲しがっていたものだ」

兄貴が欲しがっていたもの？俺の生き方が？

「どうだ？アロウ。その生き方、セツハに教えてやっては。何かと喧嘩の絶えないお前達ではあるが、二人の仲を考えるのも悪くないだろう」

「ケッ。バカ言っな。兄貴はもう死んでる。あんたが殺したじゃねーかよ！」

「フフ……………」

「……………何がおかしい！」

「セツハを想う気持ちはあるようだな」

「一応、兄貴だからな」

「ならば生き返らせればいい」

「なに？」

「もう一度世界をループさせる。もちろん、真のロザリオカルヴァとして目覚めたお前は、時間を戻しても記憶はリセットされない。次の時間で、セツハにも目覚めてもらい、親子三人、仲良く時間を支配しようではないか！」

コイツは……………。

「親父……………」

「さあ、私の手を取れ。行くべき明日は金環日食の向こう側などではない。戦争もない、飢餓も格差もないただ人々が平和な世界。真神の支配する時間世界だ！」

ゴツい親父の手が差し延ばされる。

時間を支配する……………許されてしまうのか？

「許されるのだ。刻印^{カルヴ}を持つ真神には」

親父が言うように、後一回だけでいい。世界をループする。時間を

戻す。そうすれば、兄貴を……おチビを助けられる。

「親父……」

「そうだ。もう一度世界を戻すんだ」

掴む。親父の手を。

「フッフ……所詮、お前も人の子よ」

笑い、ギュッと俺の手を握り返した親父を、

「……どうしようもないバカだぜ。あんた」

手を引っ張り、体勢を崩した親父の顔面に頭突きする。

「ぐあっ……ア、アロウ!!」

「誰が時間なんか戻すかよ!」

「バカな……セツハを見殺しにするのか!？」

「俺の記憶がリセットされない保証はない。次の世界では、もうこの力に目覚めることはないかもしれない。俺にとっては全てがギャンブルになる。とてつもなく高いリスクを負った……だったら、俺のやるべきことはただひとつ!あんたを存在ごと消し去ることだ!」

そうしなければ、親父の思惑の中から抜け出せない。

「アロウーーーーッ!!!!」

憤怒した親父が、波動を放って来た。

でもそれは、最後の足掻き。悪足掻きってヤツだ。

「終わりだッ!!俺は“明日”へ行く!!」

どれだけの時間を繰り返して来たか。俺は知らない。

親父の内面世界と現実世界が融合していた世界を元に戻し、金環日食の向こう側へ行く。永遠に訪れる明日へ行くんだ。

人は、明日に希望を持つ生き物。今日に未来を見れない生き物である、誰が認めるだろうか。

第四十一節 王道

終わった。これでもう二度と世界がループすることはない。
肉体を塵にして行く親父を見て、俺は確信を持った。

「…………ア…………アロ…………ウ……………」

悪いとは思ってないからな。神様だろうと何だろうと、人の命を弄んだんだ。自分勝手な思い上がりで、平等にあるべき時間を一人占めしようとした罪は重い。

「親父…………全部、あんたが蒔いた種だ。恨むな」

「…………アロウ…………お前…………は…………満…………足…………なのか…………？ 神の力を…………手に…………しながら…………人としての…………生き方を…………望む…………のか…………？」

くだらない質問を。

「生き方なんて、そんなに真剣に考えちゃいねーよ。俺はただ、今日の俺が俺らしくあれたらって、そう思うだけだ」

「…………誰もが…………力を欲する。…………それを放棄する…………馬鹿な話だ……………」

「…………神様になって何かをしたいなんて思わないね」

「後悔する…………ぞ…………神の力を…………行使しなかったことを……………」

「余計なお世話だ。……………それより、兄貴の右腕はどうした？」

「……………なんの……………こと……………だ……………？」

「とぼけるな！兄貴の右腕を持ってたんだろ！」

「……………知らぬな……………セツハの……………右腕など……………」

「……………なんだって？」

じゃあ誰が……………？

どこからか風が吹き、親父が消え失せた。と、同時にこの異次元空間にも強い圧迫感を覚える。主無き空間も、その役目を終えるのだ。

「……………仕方ない、帰るか」

元の姿に戻り、元の世界へ帰る。

何もかも終わるなら、そのくらい呆気ない方がむしろ清々しいか。

この何もない空間で、現実と繋がるあの扉だけが俺を待っているようだ。

ただ……………何かが違うような気がしなくてもなかった。

サマエルとクダイが刃をぶつけ合う度、大気が震える。互いに付け入る隙のない完璧なモーシヨンで立ち振る舞う姿は、バイブルの挿絵に相応しい。

「ダイナミックスラッシュュッ!!」

サマエルが技を繰り出せば、

「終末幻想!!」

クダイも技で応戦する。どちらも引けを取らぬ戦いに、ある種の快楽さえ覚えてゆく。

「ぐっ……………見事だね、サマエル。この僕が傷付いて行くなんて……………」

「クツクツクツ……………貴様もな。神を名乗るに申し分のない實力だ」

「そりゃそうさ。死に物狂いで磨いて来た腕だ。ダーインスレイヴと、この黄金の剣に恥じないように」

「そいつは結構な話だが、貴様の剣からは血の臭いがする。神になる為に、斬らなくていい命も斬って来たということだろう」

「事情がね、あるんだよ」

「悪びれるもない……………か。で、これからどうする気だ？アロウが父親を倒し、世界のループが解かれたら」

「君には関係ないよ。ほっといてくれ」

クダイの二刀流もまた、サマエルを傷付けて行く。

「クク……どうせ他の世界に行くつもりなんだろ」

「だとしたら、どうだって言うんだ？君も同じだろう。僕らは旅をする。それぞれが想う理想の彼方。心の果てへ」

「心の果て……かもしれない。雲散しようとしている宇宙の中ではな」

「ちょっと待て！」

剣を振るうのを止める。

「……なんだ？戦いの最中だぞ」

それでも、サマエルの顔に曇りはなかった。逆に、蒔いたエサに魚でも釣れたように笑んでいる。

「宇宙が……雲散しようとしているって………どういう意味だ！」

対称的に、クダイの表情は日陰の草花。

「なんだ、知らなかったのか？なら教えてやろう。……宇宙は二人の男に自らの運命を託した。しかし、その二人の男は、未だ決着を着けられないでいる」

「…………その二人って、羽竜とヴァルゼ・アーク……か？」

「クク…………貴様が旅をし続けるのなら、いつかまた会おうはずだ。それは貴様もわかつているだろう？」

「羽竜とヴァルゼ・アークが、宇宙に関係してるってのか？」

クダイがそう言うと、サマエルは剣を鞘に収めた。

クダイの戦意が衰えたからだ。これでは戦いを楽しめない。
同時に、クダイの心の脆さを知った。

「サマエル?!」

「心が折れた奴と剣を交えたところで、なんの面白みもない」

「待てよ!どこに行くんだ!まだ話は終わってないぞ!宇宙が雲散してるって…………」

背を向けたサマエルに叫ぶ。

答えを聞かなければならない。そんな気がして。

だが、

「宇宙は何もかもを“無かった”ことにしようとしているということだ。その意味も答えも、貴様の言う心の果てにあるのだろう。貴様の野望が何かは知らんが、時間も世界も越えて生きる者には、あの二人を無視して野望を叶えることは出来ん話だ」

「……………」

「いつかまた会おう。俺と貴様…………願わくば、輪廻の神と悪魔の

神も迎えてな」

サマエルがアサキとユラの方へ飛び立った。

別れを告げるのだらう。まるで、アロウが帰って来ることを悟ったかのように。

「……………フツ……………フハハ……………アハハハハハッ！！」

冷めて行く夜に、クダイは高笑いをする。

「つまり、宇宙が雲散するまでに野望を叶えなくてはいけないのか」

独り言を吐き、曇り加減の表情が悪意に満ちる。

「いいだらう。ならばあの二人に会って、僕が宇宙の運命を変えてやる。……………そしてサマエル、君もね」

思った通り、アロウの気配を感じる。

「何もかも“無かった”ことになんて……………されてたまるかッ！」

信念に執着し者に行くべき道が見えた時、人も神も心を失くす。

第四十二節 終息

「アロウ！」

そう呼んで駆け寄り、俺を迎えてくれたのはアサキだった。

その後ろから、ユラもてくてくと着いて来た。二人の姿に、俺はホッとして思わず微笑んでいた。

「アロウ様……勝たれたんですね？」

「ユラ……ああ。楽勝だったけど、なんか疲れたよ」

脱力感が俺を突っつき、その場に胡座あぐらをかいて座り込んだ。

「……………サマエルは？」

気付けばサマエルがいない。特に心配するような奴でもないが、いないと不思議と気にはなる。

「サマエルなら、クダイと戦ってる」

アサキが俺の横に座り言った。

「クダイか……アイツ、嫌な奴だけど、なんかいつも淋しそうなんだよな」

すれた雰囲気を出してはいるけど、クダイの胸の奥には何があるんだろうか？そう思っていると、

「あのお方は根はお優しいお方です」

ユラが俺達の前に座って言った。

屋敷にいたから、会話もしたことがあるんだろう。クダイの方は気にもしてない様子だったけど。そういう奴だ。俺達のことなんてどうとも思っていない。

「ユラは屋敷でクダイと話したことがあるのか？」

「はい。ございます。一度だけでしたが、温室の花を見て何かを思い出しているようでしたので、私から話し掛けたことが」

何の話をしたのか尋ねようとしたところに、サマエルが帰って来た。だいぶ痛めつけられたのは、見れば誰にもわかる。鎧も破損が酷く、身体中傷だらけ。それでも、穏やかな表情をしてるのは勝ったからか？

「クダイを……倒したのか？」

修飾語で飾るわけでもなく、露骨に結果を聞いた。

「フツ。いや。勝負はお預けだ。舞台を変える」

舞台を変える……それはつまり、二人共この世界を離れるということだ。

「時間の密度も薄くなった。世界がループすること、これで無くなるだろう」

サマエルは空を見上げて言った。

「行くのか？」

どうやって世界やら時間やらを旅するのかわからないが、サマエルが旅立とうとしているのはわかる。

「短い時間だったが、十分に楽しめた」

「……………せめて、金環日食くらい見て行ったら？」

思いがけず、アサキがそんなことを口にした。ま、勝利を味わうなら、ブランシェットに会うってのが一番だろう。だけど、サマエルにとってはどうでもいいことだ。コイツは、強く在りたいと願うだけなんだから。

「それは貴様らの役目だ。俺は次の戦いを探さねばならん」

カッコつけやがって。そしてサマエルは背を向けた。

「次は会えるといいな。お前の追ってる奴らに」

「……………。」

サマエルは何も言わずに飛び立った。その向こう側に黒く渦巻く穴が出現し、サマエルは消えた。

「何よ、アイツ！さよならくらい言ったらいいのに！」

怒るなアサキ。きっと、サマエルは言いたくなかったのさ。またいつか、フラッと立ち寄る気なんだよ。きっと……………。

そして夜が明け、また一日が過ぎた。まだ気になることもあるが、世界がループしないのなら、これからいつでも解決出来る。

「行こうか、アサキ。ユラ。腹減ったよ」

明日が今日になり、今日が昨日になる。これで全て元通りだ。

「それではファミレスにでも行きましょうか。この時間では、他に営業してるところもないですし」

ユラがにこやかに笑うと、

「牛丼屋だってあるわ。そっちの方がアロウは好きよ」

牛丼が好きだなんて言ったことはないのだが。何かとユラに突っ掛かるアサキに、

「まあまあ。腹さえ膨れりゃ、なんでもいいよ」

と、宥めるつもりで言うのと、

「「なんでもよくないっ!!」」

二人にそう返されてしまった。なんだってんだ。

だが、それも心地好い。肩の荷が下りたからだろう。

行くべき道は繋がった。ダンテやシンデレラとアリスの行方は、これからゆっくりと探し出せばいい。

二人に手を引っ張られ、おろおろと着いて行く。

時間が、当たり前のように流れる世界の中で、俺達だけがどこか特別なんだと、バカな俺はそう思っていた。しかし……

まだ、何も終わってなかったんだ。

第四十三節 烙印

明日の金環日食まではアサキとユラを連れ、遊びにでも行くつもりだった。

ところが、朝起きて、寝ぼけ眼で何気なく窓を開けた俺は、どう足掻いても目を覚ますしかなかった。

「な……………これは……………」

夕べ、ブレーメンに泊まったのだが、そこから見た景色は大きく変わっていた。

空は燃えたように赤く、街はまるで戦争でも起きたかのように崩壊している。

「……………何が起きたってんだ……………」

唖然として何も言えないでいたが、不意にアサキとユラのことを思い出して、まずは向かいのアサキの部屋に飛び込む。

「アサキ！外を……………」

たった六畳程度の部屋だ。ドアを開ければアサキがいるかいらないかは目を凝らす必要もないわけだが……………

「……………いない？」

そして今度は、その隣の部屋。ユラの部屋に入る。

「ユラまで……………」

どこに行つたんだ？

そのままブレーメンを出て、外を見渡す。

「アサキー！ユラー！」

……嫌な予感がする。荒れ果てた街。消えたアサキとユラ。

そういえば、クダイの野郎……二度、世界を壊したとかほざいてたな。まさかクダイの仕業……？

「あんの野郎……」

サマエルがいなくなったことで、やりたい放題ってか。

「クソツタレがッ……」

怒りに任せ、ブロック塀を殴った。鈍痛が走り、拳から血が流れる。

「何を怒っている？」

「……」

目の前に、そいつはいた。

「ダンテ……」

「よもや佐一郎を倒すとはな」

「テメエの仕業か……？」

「そうだ。全ての元凶は私だ」

「親父じゃなかったのかよ？世界をループさせてたのは……………」

俺の問い掛けにダンテはニヤツと笑い、何かを言いかけた時、

「佐一郎は利用されただけだ」

クダイがジャンヌを連れて現れた。

「これは………… チェシヤ猫じゃないか」

「ダンテ………… いや、グリム。君の悪巧みもおしまいだよ。観念するんだ」

「ハハハ。何を今更。お前にもまんまと騙されたが、それなりに楽しめた。礼を言うよ………… 神様」

どういうことだ？説明しろ！

「彼の名はグリム。佐一郎のロザリオカルヴァの力に付け込み、彼を利用して世界をループさせていたんだ。佐一郎自身は、自分の意志でそうしてると思っていたのだらうけどね」

クダイはサラツと言ったが、その表情は険しい。コイツがこういう顔をする時、状況は芳しくない。

「お前らは勘違いしている」

ダンテ………… いや、グリムは余裕の笑みを浮かべたまま、

「別に佐一郎の力に付け込んだわけじゃあない。刻印カルヴなら、私の拳にもあるからな」

そう言つて、右手の甲を見せる。そこには、確かに刻印カルヴがあつた。

「そんなバカな！刻印カルヴは真神家の者にしかないはずだ！親父にもお袋にも兄弟はいない！だから、刻印カルヴを持つてるのは、親父と兄貴、そして俺だけ………なんでお前がッ！！」

「フツ………簡単な話よ。私は今より十七年先の未来から来たお前自身なのだからな。アロウ」

なんて言つた………今？未来の………俺？

「未来のアロウか………迷惑な話だ」

「クダイ。アイツの言つてること信じるのか！」

「信憑性はある。グリムはブレーメンを立ち上げ、魔女達を探していた。しかし、魔女の存在を知り得たのは、ロザリオカルヴァたる真神の者だけだ。コイツが知つていたということ自体、そもそもが怪しかつたんだよ」

クダイがそう言ふのなら、それもまた真実つてわけか。

「さすがクダイだな。賢いよ、お前。お前とあのサマエルさえいなかったら、もつと楽に事を進められたんだがな」

「グリム。お前が未来の俺だつていうなら、何が目的でここへ来た

んだ」

「……………失ったものを探しに来たんだよ」

「失ったもの？」

「そうだ。確かクダイ。お前も何かを探して時空を旅してるんだっ
たな？」

俺を無視するように、クダイに問い掛ける。無理もないか。グリム
にとって俺は、過去の自分。今俺が抱く感情だとか思考なんかは、
わかってるんだ。だが、クダイは懐かしむべき相手だ。必然的にク
ダイと話したくなるんだろう。気に入らないけどな。

「どうしたクダイ？お前の探しものは、見つかりそうか？」

「黙れ。僕をお前と一緒にするな。どうやって時間を超える術を手
にしたかは知らないけど、そうまでして欲しいものは僕とお前とで
は違う」

「違わないな。私は知っている。お前の欲しいもの。望むものを。
フツ……………なんにも変わりはない。救えなかった時間を、可能
なら救いたい。誰だってそう思うさ。我が同胞のチェシヤ猫を殺し、
彼に成り済ましていたお前なら尚更、私の気持ちに共感が持てるは
ず」

「君に僕の話をした覚えはないと思ったが？」

「フフ……………まあいいじゃないか。さて、決着を着けようか。お前
らをブランシェットに会わせるわけにはいかないからな」

醜く笑ってくれるぜ。これが自分なのかと思うと、頭痛がする。

「待てよグリム！」

おっぱじめる前に、聞かなきゃなんねーことがある。

「なんだね？アロウ」

「アサキとユラはどこだ！それと、シンデレラとアリスもだ！」

自分で元凶だと吐いたんだ。知らないとは言わせねーぞ。

「おお。忘れていた」

「ふざけんなよテメエ……………」

「怒りを堪えてるところ悪いが、シンデレラとアリスはもうこの世に存在しない」

「まさか……………」

グリムは、^{カルヴ}刻印を見せつける。それは、シンデレラとアリスの二人を狩ったということだ。

「なんだなんだその顔は？彼女らは妖かしだ。妖かしを狩るのはロザリオカルヴァの役目。当然だろ？ああ、そうそう。こいつも忘れてた」

そう言うと、^{カルヴ}刻印のある右手に、スッと何かを出現させた。

「…………あ……兄貴の……右手！」

「承知してると思うが、狩った妖かしの能力は自在に使えるようになる。残念ながら、ドロシーの能力は手に入らなかったが、まあ、あの召喚獣は、大して使えるような従者じゃなかったし、困ることはない」

「クズが……………！アサキとユラはどこだ！」

「二人なら……………」

兄貴の右手をどっかに消し、指を鳴らした。

グリムの両脇の空間が歪み、そこにアサキとユラが現れた。

「アサキ！ユラ！」

意識がないのか、反応は皆無だ。

「二人に何をしたッ！」

「何もしてない。ただ眠っててもらってるだけだ」

何の為に二人を……………！そう聞く前に、

「生贄……………」

ジャンヌが口にした。

「察しがいい。クダイの右腕だけはある」

「無駄話で時間を稼ぐのはやめにしないか？そういうの、一番嫌いなんだ」

不快感をあらわにしたクダイは、腰に下げた二本の剣を抜く。

「おい！クダイ！しゃしゃり出るな！」

「これは君だけの問題じゃない。僕の問題でもある」

「ケツ。どうせろくでもない目的の為だろ！」

「そうじゃない。もし、グリムの言う通り僕が時間超えの術を彼に……強いては君に教えたのだとしたら、自分で造った迷宮に自ら迷い込んだということだ。だが、この世界に来たのは全くの気まぐれで、ループも四回のみ。その中で君に時間超えを教えた記憶もないし、グリムと対峙するのもこれが初めてだ。となれば、これはあらかじめ描かれていたシナリオ。……考えたくもないが、決められていた運命ということになる。そんなものは、断じて認めるわけにはいかないんだよ！」

クダイが何に対して怒ってるのか、俺には皆目見当もつかない。

でも、これだけは言える。グリムを生かしておくわけにはいかないんだと。

「アサキとユラは、ブランチェットへの鍵だ」

不意にグリムがそう宣言し、

「それに気付くまで、何回ループさせて来たことか」

そう言った。だがこれではつきりした。グリムがこの世界に来たのは、ループが始まる二週間前。コイツが過去のこの世界にやって来たことが、ループの始まりだったんだ。

そう思うと、怒りも限界を超え、タベ親父と戦った時のように肉体が変容していく。

「クダイ。悪いが、俺もアイツを倒す」

「……………フツ。いいよ。せいぜい足を引つ張らないでくれ」

ジャンヌも剣を抜いて構えた。

グリムの目的がブランシェットだろうとなんだだろうと、アサキとユラを傍に置いておくわけにはいかない。今はとにかく、グリムを倒すのみ。

「さあ、来るがいい！哀れな子羊達よ！」

「グリム……………例えお前が未来の俺だとしても、生かして帰さねえッ……！」

クダイは言った。“これはあらかじめ描かれていたシナリオ”だと。

しかし、それを認めないと。

これが全てを否定する戦いなら、俺はそれすらも否定する。

ずっと、誰かの言葉に耳を傾け、与えられた情報だけで判断をして来た。それが間違いだった。世界が壊滅してしまった今になって、後悔している。右手の刻印は、疑い、考えるべき事象を怠った自分への罪。その烙印。

もう誰も信じない。進むべき道は、俺がこの手で切り開く。

第四十四節 貫通

一度は開けた世界が、再び閉じようとしている。
ループが開始されようとしているんだ。

正真正銘。最後のロザリオカルヴァによって。

「ぐあぁっ!!」

「アロウツ!!」

グリムに向かって行つたはいいが、あつさり弾き飛ばされ無様に転ぶ。我ながらいいザマだぜ。

クダイにまで心配され、

「見てられないよ!」

その部下であるジャンヌにまで、俺への攻撃を防いでもらう始末。

「チツ。クダイ! なんとかならないのか! アイツの攻撃!」

嵐のように繰り出されるグリムの攻撃に、俺ではどうにも出来ないのが現状だ。

でも、バカが付くくらい強いクダイなら……そう。コイツは神様だ。頼りたくはないけど、アサキとユラの命が優先。クダイならこのくらい……

「そうしたいのは山々なんだが……この空間ごと彼の意識の中にあるようでね、存分に力を発揮出来ないんだ」

どうにもならないのか。結局、ここはグリムの内面世界化しつつあると……神様つてのに定義があるなら、肝心な時には役に立たないって書いてあるんだろうな。

「君だつてこの世界では神様だろ？ 大体、彼は未来の君だ。むしろ君になんとかしてもらいたいね」

責任転嫁かよ。グリムと戦うのは、お前自身の問題とか言つてなかったか？

「それとこれとは話が別だろ。それよりも上を見る！」

上？

言われるがままに上……つまり空を見る。

「空が……閉じて行く……」

ジャンヌの言う通り、赤く血で濡れたような空に、スモーク掛かった灰色のドームのようなものが、ゆっくりと互いを求めるように重なる。

「お前らはまた戻るんだ。二週間前に。もっとも、俺だけはブランシェットに会いに行く。次のループからは、俺も、アサキも、ユラもない。つまり、二度とループから抜けることは不可能ということだ」

グリムが勝ち誇る顔をすればするほど、コイツが十七年後の自分だとは認めたくない。

「くそっ……そんなことになつたら……」

「諦めるな！この空間が存在してる限り、まだチャンスはある！」

クダイ。慰めならいらないぜ？時間の仕組みってヤツなら、グリムのお陰で理解出来てる。

グリムがこの“内面世界化した空間”から、俺達だけを残して消えるということは、“十七年後の俺が消える”ってことだ。その時点で、俺は“十七年後に行けなくなる”。間違いなく世界が、時間が繰り返されるんだ。

だから結論から言えば、この“内面世界化した空間”が存在しているうちにグリムを倒せば、時間を元の流れに戻せる。本来、この時間にはいないグリム。内面世界化の中で倒さねば、どこで倒しても俺の十七年後は奪われるってことか。

「諦めてなんかねーよ！」

考えるより先ず行動。手当たり次第でいい。俺はクダイやジャンヌのように戦えない。刻印カルグの力の成すがままでも、クダイとジャンヌのアシストでも、切り開くんだ。針の穴ほどの突破口を。

「行くぞ！グリムッ！」

身体を張るから頼むぞクダイ！

グリムは奪った魔女達の技を同時に放ち攻撃してくる。

兄貴が奪った二人の魔女の技と合わせて四つ。厄介極まりない。容赦なく襲って来るリジイの千手せんじゅを刻印カルグで破壊し、地面を盛り上げバカでかいムチのようになる、ラプンツェルの荊の幹をかい潜る。

そして、シンデレラ能力の、制限された時間によって制限されたクダイの力。アリスの空間搾取の能力により、空間のあちこち

が歪み俺を捕らえようとする。

それでも、ただひたすら猪突猛進。グリムに隙を作る為に。

「くらえええっ！！！」

力一杯、刻印^{カルヴ}を刻み付けるように拳を繰り出す……………が、

「お前を見てるとな、十七年前の俺はこうも不甲斐ないのかとガツカリさせられる」

逆に拳を掴まれ、ぶん回されたあげく、地面に叩き付けられる。

「もう降参したらどうだ？この内面世界化した空間の中で、お前らに勝ち目はない。そう思わないか……………クダイ？」

「バカ言わないでくれないか？諦めて僕らに明日はない。君に引導を渡す。それが僕らのすべきことだ」

「……………フン！そう言うと思ったよ」

「グリム。君はさっき僕らに勝ち目はないと言ったね？」

「半分の力も出せないこの空間で、私はお前らの何十倍もの脅威だからな」

「じゃあ聞くけど……………どうして君に“十七年前”が存在するんだい？」

「な……………に……………？」

「君の知る僕は、時間についてよく講義しなかったみたいだね。いかい？時間における概念図は、未来は無限に広がって行くけど、過去へは一本道なんだ。だってそうだろ？元を辿って行くんだ。一度起きたことは、たったひとつしか存在しない」

クダイが何か難しいことを言い始めると、グリムの顔色が褪せて来た。

それを見て、クダイはニヤリとし、

「僕らがまたループさせられるのなら、“十七年後”の君がいるわけがない。ほうら、もうわかったよね？“十七年後”の君が今ここにいるということは、僕らはループした世界には戻らないということ」

「クダイ様。さっきのセリフ、お返ししなければいけませんね」

「ああ、そうだね！それがいい！……グリム、君に勝ち目はないんだよ」

ジャンヌの冷やかしが見事に引き立て、クダイの言葉が切れ味を増した。

「……………！！」

事の重大さを知ったらしい。グリムは後ずさり、絶句している。

俺にもようやくわかった。どんな無限の未来からやって来た“俺”だとしても、過去は共通のもの。厳密に言えば、戻って来る過去の場所にもよるのだろうが、そうであっても、元は一本の幹。そういう事だ。

「そんな……私は……自ら死にに來たと言うのか……？」

「ある男が僕に言った。“運命は既に決まっている”と。生まれた時……いや、生まれることすら緻密な宇宙の計算の下に決まっているってね。運命を変えるには、相応の力と、それに比例するリスクが必要だ。ただ単に過去にやって來た君に、運命を変える力なんてないんだよ」

「運命が……既に決まっている……？フ……フハハハ！戯言だ！そんな屁理屈……！」

強氣に出て來たが、グリムの……氣配って言うのか？が、明らかに薄まった。怯んでいるんだ！

「クダイ様！空が！」

ジャンヌの呼びかけに、再び空を見上げる。

「光……！」

俺の見間違えでなければ、灰色のドームが少しだけ開き、その向こうの赤く血で濡れたような空が割れている。

「アロウ！もう一度だけ突破口を！」

わかってる。その代わり、クダイ。トドメを刺せ。

「もちろんだ！」

グリムの懷へ、俺は走る。相変わらず激しい攻撃だが、さっきまで

の勢いはない。

「私は負ける為に過去へ来たわけではない!!」

「ほざけ、グリムッ!」

後ろから風の刃が俺の脇を抜け、グリムの右腕を切り飛ばした。

「ジャンヌ………!」

チラッと振り向くと、ジャンヌが援護してくれていた。

「うおおおおーッ!!」

全体重を乗せ、グリムの顔面に叩き込む。

「ぐおあっ!!」

今だ!クダイ!!

「ゲームは終わりだ!グリム!」

吹っ飛んだグリムの真ん前に、いつの間にか移動していたクダイの右手には黄金の剣。左手には、確かダーインスレイヴ。

もはや、グリムに抗う術はない。クダイから黄金の蒸気………オ
ーラってヤツだろう。そいつが立ちのぼる。

最後を飾るヒーローには程遠い表情をしてるんだろうな、お前。

「グリムッ!己の浅はかさを思い知れっ!!」

死刑を宣告。二本の剣が、グリムの身体を貫いた。

第四十五節 久遠

クダイの黄金の剣とダーインスレイヴがグリムの身体を貫き、
確実に勝利を手にした。

「やった……………！」

思わず俺は声を漏らした。当然だろう？ 終わったんだ。これで全部。
もう、誰も傷付かなくて済む。そんな安堵感もあったんだと思
う。

「がふっ……………ま……………負けた……………のか？」

未練がグリムに現実を拒否させている。

「グリム。君の完全なる敗北だ。雪辱戦の永遠に訪れない……………ね」
悔しいけど、クダイの奴がキメてくれた。嫉妬するね。ま、ラスト
を飾るには相応しい色男だから許してやるか。

「さて、グリム。君には聞きたいことがある」

「……………フッ……………あの二人のことが……………」

グリムが指すあの二人ってのは、他ならないアサキとユラのこと。
まだ、安堵なんてしてられなかったな。アサキとユラが、どう
してブランシェットへの鍵なのか。

「くく……………アサキとユラ。二人は“どちらか”が最後の魔女・グ

レーテルだ」

なんだって……………？

「“どちらか”？魔女はどう見てもユラという少女の方じゃないか」

「お、おい！ユラが魔女って、どういうことだよ？」

おかしなことをグリムが話始めたと思えば、クダイまでユラを魔女だと言い出した。

「僕がループした過去四回。そこでは、あのユラという少女は佐一郎に屋敷で殺されている。グリムが二人のどちらかが鍵だと言うのなら、ブランシェットに会えなかった時にいなかった人物が魔女だとすれば、四回とも最後までいなかったユラが魔女のはずだ」

「残念だが…………クダイ。君がこの世界に来る前に、アサキが早くに死に…………ユラが残っていたこともある……………」

てことは、“どちらかが”ではなくて、“どちらも”魔女ではないってことじゃないのか？

「それがわからんから、今回はユラを…………佐一郎から守り、アサキを監視していた」

「ちょっと待てよ。お前の十七年前はどうだったんだ？」

グリムは経験してるはずだ。この戦いの全てを。

「それは聞いても無駄だよ。アロウ」

「クダイ？」

「グリムの十七年前に君はいない。だから、さっき“こんなにも不甲斐ないのか”……………そう言ったんだ」

「おいおい。それじゃ矛盾してるじゃねーか。ここはグリムの過去なんだろう？なら、十七年前にも同じ経験をしてなきゃ筋が通らないぜ」

「そう。ここは“グリムの過去の世界”。アロウ、君は過去が存在なんだ」

それって、実在してないってことか？

「正確には“十七年前に実在していた”……………かな」

「冗談言つなよ！俺はここにいる！大体、グリムが過去に来たってことは、やっぱり一度経験してることなんだ！なら、魔女のことも、ブランシェットのことも知ってるだろ！」

「わかってないね。グリムが時間を遡り過去へ来た。だが、“その過去”、つまり“この世界”は“その過去”とは別のものになる。そうでなければ、過去へ来たグリムが、何人もいることになる。しかし、そんなことは時間の概念から言って有り得ない」

「信じられるか！矛盾を強引な理屈で隠してるようにしか見えない！」

「アロウ。時間の全てを知ることが、所詮、人にも神にも不可能な

ことだ。宇宙が“無”から生まれたのなら、“有”に向かって時が進んでいたことになる。それでは、“無”の状態の時に既に時間が存在していたことにならないか？でもそれじゃ“無”ということに反する。じゃあ、『時間が在るから全てが存在するのか？』それとも、『全ての中に時間が存在し得るのか？』…………それは誰にもわからない。君が矛盾に感じることも、宇宙の細かな理屈で、時間の概念のひとつなんだ。…………かく言う僕も、時間や異世界を旅していても、時間の仕組みなんてよくわからないのが本音だ」

……………

……………

……………

……………

何も言えなかった。俺の存在がグリムの過去だなんて。

「……………気の毒だがそういうことだ。私は……………アサキもユラも……………もしかしたら魔女なのかもしれない……………と、思ってもいる……………だが、十七年前の記憶には、アサキがいないんだ。だから私は……………過去に来て彼女を見た時、彼女が魔女だと信じて疑わなかった……………」

グリムの告白は、暴論だけど事実なのだろう。グリムの十七年前には、俺もアサキも存在しなかったという。言われて見れば、アサキはともかく、俺が十七年前に存在しているってことになれば、グリムと俺は別人ということだ。ここがグリムの過去……………過ぎ去った時間だが、今も進行形の過去だからこそ、“俺”がいても不思議じゃないんだ。

それに、俺達を残し自分だけがブランシェットに会うなんて話、確実性がなかったんだ。

「魔女はその数がゼロにならない。アサキがいなくなっても、ユラがいなくなってもブランシェットに会えない。……なるほど。そういうことか」

「どういことだか知らないが、クダイには何かピンと来るものがあったらしい。」

「何かわかったのか？なら俺にも教えてくれ」

「ああ。けどその前に……」

クダイは黄金の剣の切っ先で、グリムの顎を上げた。

「死刑執行だ」

そして……グリムの首を切り落とした。とてもじゃないが、真似は出来ない。

グリムの肉体が塵になって風に流され、浮いていたアサキとユラが落ちて来るのをクダイが受け止めた。

「終わりましたね」

ジャンヌは笑顔でクダイに懐いて見せる。その少女らしい表情も、目の前で首を切り落とされた後では色褪せる。

クダイは二人を瓦礫にもたらせた。

「アサキとユラ。二人は“どちらか”が魔女というわけでもなく、また“どちらも”魔女ではないというわけでもないんだ」

グリムがいなくなっても、まだ眠り続けるアサキとユラ。二人は一体……？

クダイがおもむろに論じ始めたその結論を待った。

「……………“二人とも”魔女なんだ」

そんなバカな。アサキとユラがどちらも魔女だって？そんなはずはない。魔女は六人のはず。既に五人の存在は確認している。ならば残る魔女は一人。

「違うんだよ、アロウ。具体的に言うと、ユラが魔女の時、アサキは魔女じゃない。アサキが魔女の時は、ユラは魔女じゃないんだ」

「どこが具体的なんだ？わかんねーよ。ひとつつも。それじゃ片方だけが魔女になるだろ」

なんだなんだその顔は？残念そうに溜め息まで吐きやがって。

クダイはどう説明したらいいか迷ってるようだが、ようやくまとまったのか、

「例えば、あの時屋敷でユラが佐一郎に殺されていれば、その時点でアサキが魔女になる。逆に、アサキが何らかの形で先に死んでしまえば、その時点でユラが魔女になる」

「考え方を変えれば、二人が生きている時点では、六人目の魔女は存在しないってことさ」

ジャンヌ、的確な説明はありがたいが、お前は黙ってる。

「六人目の魔女が存在してないってなら……………」

「佐一郎やグリムがいない現状でも、世界がループするということだ」

クダイは呆れて、また溜め息を漏らしやがった。

「じゃあ、明日の金環日食を超えられないってことか……………」

それじゃあ、俺達は今まで何の為に戦って来たんだ。

考えてみりゃ、グリムがいつまでも自分の内面世界から抜けられなかったのは、その手段を知り得なかったからだろう。

俺達の行動パターンを読む為、ブレーメンを立ち上げ、クダイやジャンヌにイニシアチブを取らせていたんだ。

その結果が、抗えぬ運命だったなんて、きっとグリムも認めたくはなかっただろうな。

「はは……………どん詰まりかよ……………」

ガクツと膝が落ち、地面に手を着いた。

「そうがっかりすることもないさ」

……………？

「金環日食を超える方法はある。ひとつだけね」

「……………ホントか！」

マジかよ。

「ああ。僕は嘘はつかない」

お前のアピールはこの際いらない。早く金環日食を超える方法を言え。

「……………しょうがないねえ。……………元々は、魔女を生贄につてのが条件だった。でも、六人中、五人は狩ることが許されていた。なら最後の一人が鍵になる。この一人をどうするかだ」

「……………どうするんだ」

長い前置き。黙れとは思ったが、妙におとなしいジャンヌ。ニヤケたクダイ。

嫌な予感がする。

「二人を同時に殺す」

「な……………」

「いいかい、アロウ？取り乱さず聞いて欲しい。ここは……………この世界は“現実”とは違う。あくまでも“グリムの過去”。“既に終わっている時間”なんだ」

「……………それで？」

聞いてやろうじゃねーか。お前の意見を。

「魔女達の存在意義は、時間を進ませる為のスイッチ。一人狩るごとに、アサキとユラの魔女としての存在を確定させて行くスイッチだ」

「くだらねー。ここが“過去”なら、世界がループなんてするのは道理じゃないだろ！」

「君の言う通りだよ。だからグリムは一度経験してるって、僕は言っただ……ループを抜ける経験をね」

それってつまりは、アサキとユラを……

「ループのきっかけは、グリムが過去へ遡って来たことだろう。何を取り戻したかったのかはわからず終いだがね。そして、そこに“アサキ”というグリムの記憶にない人物が現れた。その出会いがループを抜けられなくする引き金だったんだ」

……アサキに記憶がないわけだ。グリムが過去へやって来たのと同時に生まれたんだからな。

「なら……どうしてアサキが生まれたんだ？」

「戒め……かな」

「戒め？フン……なんだよ、それ」

「時間を超えるなんて、赦された行為じゃないんだ。神とも言えどもね」

「お前はどんなんだ、クダイ。お前やサマエルだけは特別なのかよ」

「そつだよ。サマエルが言うには、宇宙が自分の運命を二人の男に託したと言っただ。その二人ってのは、かつて僕がいた世界にやつ

て来た奴らなんだが、彼らに深く関わる存在は、あるいは時間超えを赦されているのかもしれない」

「グリムはお前から時間超えの方法を聞いたって……………」

「……………それは定かじゃないけど、どっちにしろ最後の魔女に確定されたアサキとユラは、明日の金環日食が始まる前に始末しなければいけない」

「言いてーことだけ言っただけじゃねーよ！！お前の話が全部正しいとしても、二人を殺せるわけないだろッ！！」

「それは君の自由だ」

「……………！？」

「僕はこの世界の時間に干渉してない。単に外から入って来た存在だ。だから、時間の密度が薄くなってる今なら、どこへでも行けるループを回避するしないは、アロウの問題だ。ただ、僕はブランシエットに会ってみたい。会ってブランシエットが何者かこの目で確かめたい」

「その為にアサキとユラを殺せるかッ！」

「……………最後の魔女グレーテル。彼女達を狩るのは、最後のロザリオカルヴァの君の役目だ」

「……………ッ！」

「明日の金環日食は確か11時11分だ。それまでに考えておくん

だね。金環日食の向こう側に行くのか、行かないのか」

これは悪い夢なのか……………？一生懸命戦って来て、最後に言い渡されたのが、こんな悪魔の裁きのようなことなのか？

「行くよ、ジャンヌ」

「はい。クダイ様」

黄金の剣とダーインスレイヴを鞘に収め背を翻す。

「ああ、そうだ！」

まだなんか言いたいのか？

「ここが過去の世界であっても、君には明日が訪れる。金環日食さえ超えれば、十七年後にグリムになることも可能だよ」

クダイはフツと笑い、ジャンヌと共に消えた。

残された俺は、一向に目を覚まさないアサキとユラを前に、残された時間を有効に使える気はしていなかった。

「俺は……………どうすればいいんだ……………」

人が時間を超えたことの戒め。

最後に残された選択は、同じ時間を永遠に生きるか、寿命という制限された時間を生きるか。

その為に失うのは、大切な友人だった。

第四十六節 日食

金環日食。その日が世界の境目だと思い、そして今日がその金環日食の日。

街は壊滅状態のままだが、空だけはやたら青々していて、見物客の限られた天体ショーの為の演出を気取ってるように見えた。

特に待ち合わせたわけではないのだが、だだっ広く空き地になつてゐる場所へ行くと、クダイとジャンヌが待っていた。

「遅かつたね。後10分もすれば金環日食が始まる」

涼しい顔で話すクダイとも、間もなくおさらばだ。どっかに行く気なんだろうし。

「決めて来たかい？」

俺の後ろにいるアサキとユラを見ている。

「ああ」

アサキとユラには、今朝全て説明した。金環日食を越えるには二人の命と引き換えだということも。

「なら結論を聞こう。時間がない」

時間がない……………か。そうやって、何度も焦って来たんだ。

「……………俺はアサキとユラを殺さない」

「…………じゃあ、このまままたループするのかい？」

「他に道がないなら、見つかるまで何度でもループする」

「…………ま、それもいいだろう」

クダイは意外とあっさり受け入れたようだ。

これでいいんだ。間違った選択はしていない。そう思っていると、

「クダイ」

アサキがクダイに歩み寄る。

「なんだい？」

「私とユラ……………どういう関係なの？」

「藪から棒に聞くんだね」

「私に記憶が無い理由は聞いたわ。でも、それじゃ私って……………」

「君と、そのユラは、同一視されるべきだろうね」

「同じ人物ってこと？」

「いや……………」

「わかりやすく言って！自分のことだもの、ちゃんと知りたいの！」

アサキ……………。

「……………わかった。なら言おう。君は神格化されたユラだ。これは僕の憶測だが、グリムの過去でユラは何か特別な存在だったんだ。魔女の大元とかね」

「魔女の大元？」

クダイがアサキからユラへ視線を動かす。

「ユラ、君はアロウのことが好きなんだね？」

と、唐突にこの男は何を言い出すんだ。ユラが俺を？大体、今そんなこと関係ないだろ。

「関係あるんだよ。さあユラ、どうなんだい？」

ユラは俯いたまま、

「はい。好きです。アロウ様のことが」

答えた。

だからと言って、それとこれと何の因果関係があるんだ？

「ユラは、アロウの傍にいたいと願った。しかし、それが叶わぬ願いだったんだ。強く想うあまり、別の形でアロウの傍にいるしかなかったんだ。もちろん、ユラ自身は無意識でのこと。で、アロウが気に入るような女性像のアサキが生まれたのさ。それもみな、グリムを名乗り過去へやって来た十七年前の君のせいだ」

んなこと言われても困る。十七年後、俺が何をするかなんて知った

ことか。

クダイはそれが真実だと言わんばかりに話すが、二人にとってはピンと来ないだろう。

「でも、アロウの傍にいたいのなら、そう言えいいのに」

アサキがそう言うと、

「私はアロウ様に恋をしてはいけない身分なんです」

自虐的に答える。

「身分なんて関係ないだろ」

俺はそんなこと気にしたこともない。だから、ユラがそう思ってることが淋しかった。

ところが、ユラは突然上着を脱ぎ出した。

白い膨らみが顔を出し、それを覆う下着まで……………脱ぎ出した。

「ユ、ユラ?! 何してるんだよ!」

目を背け、叫んではみるものの、脱いだ上着はそのままに、

「見てください」

俺達に背中を見せた。理由はわかった。ユラの綺麗な背中には、

「それは……………カルヴ 刻印!」

そう。ユラの背中一面にカルヴ 刻印があった。

「なんで…………ユラに^{カルヴ}刻印が…………？」

^{カルヴ}刻印は真神の人間にだけ現れるもの。俺は恥ずかしさなど忘れ、ただユラの背中を見ていた。

「私にもアロウ様やセツ八様と同じ血が流れてるんです」

「なんだって?!ど、どういう……………」

「私は真神ユラ。あなたの妹です」

呆気に取られたのは俺だけだろう。クダイ達には大して問題じゃないのだから。

「妹って言われてもなあ……………」

「異母兄弟と言つのでしょうか。母親は違いますが、父親は佐一郎様です」

あのバカ親父……………隠し子がいたのかよ。それも、よりによってユラだなんて。

「だからアロウに想いを寄せても叶わないのか」

人の苦悩を尻目に、ジャンヌがたわけたことをしれつと言いやがった。

「叶わぬ願いを、形を変えて叶えようとした。でもそれだけじゃないだろ?」

クダイが言うと、ユラは小さく頷き、

「私の母は妖かし。魔女です」

なんとも返答の困る告白をしてくれる。

「ごめんなさい。黙ってて」

俺は……特に気にするようなことはない。

人と魔女の間に生まれた子供。ただそれだけのこと。

俺は、ユラが脱ぎ捨てた上着を拾い上げ、ユラにかけてやる。

「アロウ様……」

「ユラはユラだよ」

泣き出しそうな瞳で見つめる。

大丈夫。何も変わらない。

そんな風に思っていると、急に辺りが暗くなり始めた。

「日食だ」

クダイは物憂げに月に隠れて行く太陽を見ていた。

「あの！」

ユラが声を上げ、クダイを呼ぶ。

「なんだい？」

「私とアサキさんがいなくなれば、世界は元に戻りますか?!」

ユラ……………何を言ってるんだ。

「元に戻るかはわからない。でも、君とアサキがいなくなれば、世界の時間は明日へと進む。保証しよう」

“保証しよう”。それは、クダイがユラにそうしろと言ってるようなものだ。

「待てよ!そんなことさせるわけには……………」

「時間を進めましょう」

「アサキ!お前まで……………!」

「それしかないのよ」

「ふざけんなっ!」

「ふざけてないわよ!」

「ふざけてんだろ!お前、死ぬってことなんだぞ?!」

「そうよ!それで……………それであんたが助かるなら……………」

すると、アサキの目にも涙が浮かぶ。

「私の記憶を取り戻すって言うてくれたの、嬉しかった。本当のこ

と知ってショックも受けてるけど、最後にアロウの役に立てるなら……ううん。それが私の役目なんだと思う」

「ダメだ！そんなことは許さない！もっと違う方法があるはずだ！それがわかるまで、何度だってループして探してやる！」

俺はアサキの肩を強く掴んでいた。そうじゃないと、どこか遠くへ行ってしまいそうな気がするからだ。
でも、

「アロウ。ありがとう。気持ちだけで充分よ」

「アサキ！」

俺のことを無視して、アサキはユラに、

「あなたも同じ気持ちでしょ？」

そう聞くと、

「はい。異論はありません」

「それでこそ最後の魔女グレートル。潔いわ」

二人はニコリと笑い合いあった。

「クダイ。もう金環日食が完成しちゃうわ。私とユラを……殺して」

「フツ。いい覚悟だ。僕は君達を忘れないよ。……でもね、ただ

殺すだけじゃだめなんだ。アロウの…… ロザリオカルヴァの刻印^{カルヴ}
で消し去る。それで終わりだ」

そう言っつて、クダイは俺を見る。

「後は君が決めるんだ。君の力でしか彼女達を消せない」

「バカな……俺がそんなことすると思うのか！」

「彼女達の意志を尊重するかしらないか。それだけだろ」

刹那。俺はクダイを殴っていた。

「……気が済んだかい？」

「テメエ！」

もう一度殴ろうとした時、それを遮るようにアサキとユラが立ちは
だかる。

「アロウ。お願い。ちゃんと前を向いて！」

「私達はアロウ様が好きです。どうか、金環日食を越えて下さい」

アサキ……

ユラ……

「どうしてそこまで……」

わからない。どうしてそこまでしようとするんだ。

「アロウ、君はループしてもアサキとユラが今のことを記憶してる
と知っているのか？」

「……………！」

「君はいい。なにせ、真実の神だ。きっと記憶を無くさずにループ
するだろう。でも、彼女達はまた同じ苦勞をするんだ。君の勝手な
思い上がりでだ」

「俺のどこが思い上がってるって？」

「他に方法はない。百回繰り返しても、千回繰り返しても、結局は
二人を消すしかないと気付く。それでもループすると言っのなら、
それは思い上がりだ」

太陽の半分が月に隠れた。猶予はない。どうすれば……………。

「アロウ。私達はあなたの記憶の中で生きる。あなたが私達を忘れ
ない限り」

アサキ……………

「行きましょう。金環日食の向こう側へ」

ユラ……………」

「さあ、選択だ」

ジャンヌが責つ付き、俺を焦らせる。

金環日食の向こう側……………二人の大切な友人を犠牲にしても、行く意味があるのか。

「アロウ！」

「アロウ様！」

俺は、^{カルヴ}刻印を二人の前に掲げた。

「……………ゴメン。アサキ、ユラ」

二人が俺の右手に触れる。

「絶対……………絶対に忘れない」

微笑んでくれた。忘れないから。約束する。世界を救うのは俺じゃない。アサキ、ユラ、お前達だ。

^{カルヴ}刻印の力を解放して、俺は二人の魔女を狩った。
明日へ行く為に。

「許してくれ……………二人共」

そして、金環日食は完成した。

第四十七節 離別

金環日食が完成した。すっかり暗くなり、空には金色の環が俺達を見ていた。

ブランシエットが現れる。はずだ。

「……………おかしい」

しかし、クダイが呟いたように、どうにも様子がおかしい。待てど暮らせど、何も起きる気配がない。泣く間を惜しんで見定めようとしてるのにな。

「おかしいじゃねえよ。何も起きねーじゃねーか」

「……………そんなはずはない。僕の考えに間違いはないはずだ」

「どっからその自信は出て来るんだ！神様だからか！アサキとユラは……………！」

もう一発ぶん殴ってやろうと拳を振り上げた時、

「待って！」

ジャンヌが叫んだ。俺を止めたわけではなく、ハッと我に返った俺はその意味を理解した。

「これは……………異次元空間！？」

暗がりが見え、淀んだ空間へ姿を変えた。

相変わらず金色の環はお高く止まっている。

「どうして異次元空間が……………」

「違う」

俺を否定するようにクダイが言った。

違うって言われても、明らかに異次元空間だろ。何が違うんだ？

「……………これは……………ディメンジョンバルブ！」

「ディメンジョン……………」

「ディメンジョンバルブ。時間と時間を繋ぐ道の中だ！」

クダイが慌てている。俺には親父と戦った時の空間にしか思えないが、そうではないらしい。

「こんなこと……………まさか、あの金色の環がディメンジョンバルブだっていうのか？」

「クダイ。何をそんなに慌ててるんだ？」

お前が取り乱すと、なぜか不安になる。

なのに、クダイは俺を完全に無視して金色の環を見ている。

「クダイ様……………あそこ！」

またしても、ジャンヌが何かを発見したらしく、声を上げた。

観察力が凄いのか、はたまた洞察力に優れているのか、彼女が

指差す先。俺達の視線の先に、一人の成人の女が立っていた。

「ブランシエット」

俺が言うと、

「シトリー……………」

クダイがその女の名を口にしたが、でもソイツは、ブランシエットだ。

「知り合いか？」

しかし、クダイはそのブランシエットに目を奪われたままだ。

「シトリー……………君なのかい？」

よろよろとブランシエットに近づいて行く。一步一步、確かな道を選ぶように。

「間違いない……………シトリー、君なんだね」

「……………」

ブランシエットは何も答えず、佇んだままだ。

右手には杖を持ち、際どいコスチュームでグラマラスな印象を受ける。

何者だ？

「おい、クダイ」

呼び止めようとした俺を、ジャンヌは首を横に振って止めた。黙って見てろと。

「ハハ……すっかり大人になったね。僕もだけど。何て言うか、綺麗になったよ」

「……………」

「こんなところで君に会えるなんて、思ってもみなかった。嬉しいよ」

「……………」

「そうだ、君に謝らなきゃ。僕は君達の世界を壊してしまった。やむを得ない事情だった。許して欲しい」

クダイがブランシエットに触れようとした瞬間、まるで感電したようにクダイに衝撃が走る。

「うわああっ！！」

「……………」

微動だにしなかったブランシエットが、少し焦点をクダイに寄せる。

「シトリー……………僕だ！クダイだ！わからないのか！」

「……………」

無言を貫くブランシェットに、少し苛立ったのか、

「どうして何も言ってくれないんだ！覚えてるだろ？一緒に戦ったじゃないか！頼むよ……シトリー。罵声でもいい、君達の世界を壊したことを軽蔑してもいい、どんな言葉でもいいんだ！君の……君の声を聞かせてくれよ……」

一瞬のフラストレーションの爆発も、すぐに消え失せ力なく膝から落ちた。

余程ショックらしい。態度を見てれば、ブランシェットはクダイが好意を寄せる女だとわかる。

「……でもよかった。君が生きててくれて。それだけでも、僕は救われた」

「……クダイ」

「……！……シトリー？」

ブランシェットは、確かにクダイの名前を呟いた。俺もちゃんと聞いた。

「シトリー……わかるんだね？僕が！」

ところが、ブランシェットはそれっきりまただんまりを決め、パアツと光ったかと思うと、次の瞬間にはいなくなっていた。

「シトリー！？シトリーッ……！」

そして、月は太陽の前から去り、元の街に……壊滅前の街の姿に

戻っていた。

「クダイ様……………」

ブランシェットを見て取り乱したクダイを見たジャンヌの胸中は、まだ悲痛な叫び声を上げているのだろう。

「クダイ」

俺は、ブランシェットのことを尋ねようとしたが、

「ハハ……ハハハ……………そうか、シトリーは……………生きてるんだ！壊した世界の破片の中で……………まだ！」

今のクダイには聞いても無駄かもしれない。

「ジャンヌ」

立ち上がったクダイは、それまでの頼りなさを皆無にしたように勇ましく彼女を呼ぶ。

愛する主の声にジャンヌは即座に、

「はい」

返事した。

「帰ろう。もうこの世界に用はない。シトリーが生きてることがわかっただけで充分だ」

「……………では、次の世界に？」

「ああ。壊した世界の破片を集める方法を探しに旅に出る」

嫌味なくらい青い空は、クダイの新たな決意を引き立てているように、俺は内心ムカついていた。

「クダイ。ブランシエットは、お前の知り合いか？」

「僕のお姫様だよ」

と、調子良く言う。

「アロウ。君とはここでお別れだ。楽しかったよ」

「待ってくれ。こんなんでも本当に時間が進むのかよ」

「……………ああ。大丈夫だ」

「信じるぜ？」

「フツ。十七年後、せいぜいグリムに化けないようにすることだね」

「ほざけ」

「じゃあ。いい未来を」

長い髪を掻き上げ、クダイとジャンヌは消え去った。

「本当に、これで終わったのか……………」

あまりに単純過ぎる終焉に、半ば晴れない気持ちだった。

旅に出ると言っても、特別、仕度することはない。身体ひとつで行けばいいのだから。

そうジャンヌに話すと、クダイは元に戻った街を眺めた。

「ブランシェットを探しに行くのですね」

英霊として召喚されたジャンヌは、愛する主との新たな旅に胸を踊らせていた。

「ブランシェットではない。シトリーだ」

ちよつと不機嫌にそう返したクダイは、やはりシトリーのことしか頭にないのだろう。

踊るジャンヌの胸も、隅の方ではチクチクと痛んでいる。

「失礼しました」

それを我慢し、謝罪をする。全てはクダイを愛するがゆえ。

「ジャンヌ」

「はっ」

「君に頼みがある」

「はっ。何なりと」

こうやって、クダイの願いを叶えて行くことだけでしか傍にいれない立場。

「君はこの世界に残って、アロウを監視してくれ」

「……………え？」

「グリムは時間超えを僕から聞いたと言った。だが、僕は言った覚えがない。これから先、万が一にもアロウに時間超えをされては困るんだ」

「……………。」

ただ啞然と聞くしかない。共に行けると思っていたのに、残れと言われたのだ。

「時間移動なんて、限られた存在だけがすること。そんな簡単に時間移動されたら、僕は何の為にこの手を汚して来たのかわからなくなる」

「待って下さい！私も一緒に連れて行つてはもらえないのですか！」

「聞いてなかったのか？君はここに残るんだ」

「そんな……………」

「これは命令だ。しっかり監視してくれ。もし、アロウに時間超えの気配があつた時は、迷わず殺すんだ。いいね？」

愕然と全身の力が抜ける。

「僕は行くから。後は頼んだよ」

それがクダイからの最後の言葉だつた。

クダイは空を見上げると、彗星の如く飛んで行つた。

「クダイ様……………うつ……………うわああーっ！！」

慕い、崇めた神を信じた末路は、哀れにも捨てられるという惨めなものだつた。

終節

街は元に戻ったが、一人になった俺は特に行くところもなく、かと言って誰もいない屋敷に帰る気にもなれず、またブレイメンに足を向けていた。

ブレイメンの敷地に入り、中庭に進む。雑音が遮断され、心地好いんだ。

悦に浸るわけではない。そういう気分じゃあないからな。

中庭へ行く門を開け、枯れ葉を踏んで入る。と、そこにジャンヌがいた。

「ジャンヌ………何か忘れ物か？」

てつきりクダイと旅立ったとばかり思っていた。

俯いたまま、顔上げようとしないので、こっちから近づいてやった。

ジャンヌは泣いていた。

「お、おい、どうしたんだ!？」

「ボクは………捨てられた」

「捨てられたって………なんだよそれ？」

「クダイ様は、ボクをこの世界に残して旅立った」

「なんだって？理由は？お前はアイツの一番の部下だろ」

「ハハ………笑ってくれ。部下どころか、ボクはあの方にとって、単

なる捨て駒に過ぎなかったんだ」

あの野郎……俺ひとりが怒っても仕方ないことなのだろうけど、男として許せるわけがない。

「アロウ」

「え？あ、どうした？」

「ボクを消してくれないか………^{カルヴ}刻印で」

「な、何言ってるんだよ！んなこと………」

「ボクは英霊。妖かしだ。君に消されるなら、文句はない」

「勘弁してくれ。アサキとユラのこと結構参ってたんだ。これ以上、顔なじみを消したくはない」

「なら、取り引きとを考えてくれ」

「取り引き？」

「狩った妖かしの力を、ロザリオカルヴァは奪うことが出来る。君がボクを狩れば、相応の代価を与えてやれる」

「今更、妖かしの力なんていらねーよ。戦いは終わったんだし」

「君に与えるのは力じゃない。ボクの記憶だ」

だから、記憶であつてもいらないんだ。

「ボクはクダイ様がどうやって時間を超えるかわかる。一度だけ、やって見せてくれたから。その記憶があれば、もう一度アサキとユラを助けに行けるはずだ」

「!?!」

「後生だ。惨めなまま生きて行くつもりはない。頼む。殺してくれ……」

見てられないぜ。主に捨てられ、行き場を失った女の姿は、見るに堪えない。

「それで……気が済むんだな？」

ジャンヌは頷いた。それがジャンヌの望みなら、叶えてやれるのはロザリオカルヴァだけか。

右手をジャンヌの前に翳す。叶えてやるよ。俺なんかで役に立てるのなら。

「次は……ただの女に生まれて来るといい」

カルヴァの刻印が熱くなり、ジャンヌの存在を消して行く。

「ありがとう。アロウ……」

感謝の言葉を残し消えたジャンヌに、俺は何を思えばいいのだろうか……。

翌日。陽射しの強い朝だった。この季節には珍しく、暖かさを
感じさせた。

瞼を陽射しが突き抜け、少し乱暴に俺の睡眠時間に終わりを告
げた。

「……………」

ベッドの中から手を伸ばし、目覚まし時計をまさぐる。

「何時だ……………」

招き入れた目覚まし時計の針をよく拝む。

「……………なんだよ、まだ七時か」

やることなんて何もありやしないが、もうこの街に用はない。早く
街を出て、自分の人生とやらを考えようじゃないか。

疲れの取れない身体にムチ打つように起き、でかい欠伸をかま
すと、冷たい酸素が脳に侵入して目を覚まさせてくれた。

「ふわぁ……………」

おまけのような欠伸がポロリと零れた矢先、携帯電話の電子音が鳴

り出した。

「電話？」

はて？誰が俺にかけて来たんだ？

サブディスプレイには“非通知”の文字。

「はい……………もしもし？」

三度目の欠伸を堪え、けだるく通話に応じてやった。……………のに、
向こうからは何の返答もない。

「もしもし。どちら様？」

『……………。。』

「……………誰だかわかんねーけど、悪戯なら俺じゃなくて他の誰かに
してくれないか」

『……………。。』

「テメエ……………ふざけんなよ！誰だッ！名前くらい言え！」

『その分だと、あまり落ち込んではいないようだな』

「その声……お前……！」

聞き覚えのある声。一気に眠気が吹っ飛んだ。

「お前、グリムだな！」

『覚えててもらって光栄だな。すっかり忘れられたんじゃないかと心配したぞ』

「バカな！お前は死んだはずだ！」

クダイが首を切り落としたんだ。生きてるわけがない。

『そう思うなら、窓の外をしてみる』

言われるがまま、勢いよく窓を開け外を見る。そこには、紛れもないグリムがいた。

『驚いたかね？』

「な……なんで……？」

俺は固まったまま動けなかった。声さえ自由を奪われてしまっている。

死んだはずのグリムが、下から俺を見て笑ってやがる。

寒気がする。明らかな絶望感が俺を襲う。信じたくないが、世界は……またループしたんだ。

『さあて、始めようか……アロウ。今度はお前の内面世界だ』

特節 光射す方へ

「どんなに足掻いても、ループから抜け出すことは無理だよ……………アロウ」

時間軸上で、クダイはアロウのいる世界を眺めていた。

「今の君には前回の記憶が残っている。……………アサキとユラ。彼女達への未練を覚えたままでは、ループをしてしまうのは当たり前だろう？」

千里眼のように強い力でアロウの絶望する顔を見ると、フンと鼻を鳴らした。

「君がループを抜けるには、アサキとユラのことを忘れてしまうしかないんだ。彼女達のことを覚えているということは、“十七年後に君がグリムになる”ということ。そして、十七年後のグリムは必ず十七年前にやって来る」

アサキとユラを忘れられないアロウは、結局、十七年後に時間を超える選択をするのだ。

既に終わった時間の未来は、既に決まっちゃっている。

原因となる過去がひとつしかないのだから、過去へ来たところで問題は解決しない。

「愚か者だよ……………君は」

アロウ自身の心残りが“偶像未来を生み”、その“偶像未来”からグリムがやって来る。

「フツ。自分の生み出した未来の自分と、永遠に戦うといい。自分の心の中で」

ジャンヌにはしてやられたが、そんなことはどうでもいい。そんなことはわかっていたこと。

グリムがクダイから時間超えを知り得たと言っのなら、アロウは何らかの形でそれを知り得てしまうのだ。

偶像未来とは言え、未来で起きたことは、過去においてはその元となる事象が必ず起きる。

「その仕組みを理解してこそ、真に時間移動が可能となる。ま、もう手遅れだけどね」

顎を上げ、見下す。あまりに無様な真神アロウを。

そして、クダイが次の行く道を探していると、とても熱い気配を感じた。

「……………この熱気、まさか？」

その熱気の在りかを必死で探す。

「あそこか！」

宇宙のように静寂と闇に包まれた空間で、点在する小さな光達。それが数多の世界達。その数多くある光の中でも、より強く輝く世界があった。熱気は、その世界へと向かっている。

「フツ……………クク……………アハハハッ！これまた運命なのか！だとすれば、受け入れるだけだ！」

クダイは、自分の望みは叶うことをブランシェットに出会ったことで確信した。

後はその方法を確立させるだけなのだが、案外、それは容易いのもかもしれない。と、気分が高揚する。

「次の世界は楽しくなりそうだ」

誰もが惹かれ、導かれる……………光射す方へ。

魔女伝説

ロザリオカルヴァ

く完く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1312j/>

魔女伝説 ロザリオカルヴァ

2010年10月8日23時24分発行